# AFTER←RAIN ～BLEACH小説～

切香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＡＦＴＥＲ↑ＲＡＩＮ　～ＢＬＥＡＣＨ小説～

【Ｎコード】
Ｎ４９８０Ｅ

【作者名】
切香

【あらすじ】
ＢＬＥＡＣＨ劇場版第３弾を祝って！第１弾の茜雫、第２弾草冠を登場させてみました。死神代行・茜雫は、殺された家族の敵を討つため、自ら命を絶つ。ソウル・ソサエティに潜入した茜雫は、家族を殺した「死神崩れ」に追いつけるのか？※オリジナル色が強いので、苦手な方は閲覧をご遠慮ください。

## 【1】「あんたを、絶対に許さないわ」（前書き）

劇場版のネタバレあり。まだ観てない方はご注意くださいm（＿）m

## 【1】「あんたを、絶対に許さないわ」

いつ果てるとも知らない、絹糸のような雨。
音も無く夜の街に降り注いでゆく。
立ち上る水蒸気の向こうで、ぼんやりと輝くのは、夜空のたった一つの光源。
雨の中の朧月は、美しいというよりも・・・おそろしかった。

黒い睫毛に落ちたその雨粒が、スウッ、と眼球の上を滑って地面に落ちた。
それでも、その瞳は瞬きをしない。
輝きを失った瞳孔は、その人間がただの「モノ」と化していることを示していた。
倒れ伏したその体の下に、黒い、水よりも黒い液体が広がってゆく。
ワンピースの上にエプロンを纏っているが、その肩口から石榴(ざくろ)のような傷口が残っていた。
そして、その上に護るように覆いかぶさっていたのは、スーツ姿の男だった。
スーツは、雨にぐっしょりと濡れ、伏せた頭からはおびただしい出血が見て取れる。

壊れた雨樋の水が、どっと零れ落ち、二人の体を更に濡らした。
その二人がさきほどまで談笑していたに違いない、その家は半壊していた。
ジジッ・・・壊れた蛍光灯から、火花が散る。
部屋の中からは、突然の破壊から免れたテレビがチカチカと光を放っている。

この景色から、全ての命は拭い去られているか？

それを確かめるような、温度の無い見下ろす視線が、ゆっくりと庭を舐めてゆく。
屋根の上の、微動だにしない人影。
風にあおられ、ばさり、と着物の裾が揺れた。
漆黒の単衣と袴に身を包んだ、少年とも、女とも取れる小柄な姿だった。
チャキ、と音を立て、手にした日本刀を、中空に差し出した。
その銀白の刃を、悪夢のように赤い血が滑っていくのが見えた。
それは、黒と白に閉ざされた世界の中で、唯一色を持っていた。
その惨劇とは裏腹に、雨音さえ聞こえない世界は、まるで絵画のように閉じていた。

「あんたを、絶対に許さないわ」

その絵画を、凛とした声が貫き・・・世界は息を吹き返した。
倒れた二人の傍に、フッと人影が現れたのだ。
それは、見下ろす人影と同じように、上下とも黒の着物で固めた少女だった。
年のころは１６歳くらいで、長い黒髪をポニーテールにまとめ、赤いリボンで結わえている。
澄んだ琥珀色の瞳が目を惹く、街を歩けば「かわいらしい」と評されるだろう容貌。
しかし、その瞳は今は、相手を焼き切ろうとでもするかのように、爛々と燃えていた。
手にしているのは黄金色の錫杖。
その切っ先を、まっすぐに屋根の上に立つ影に突きつけていた。

「・・・ムダだ。お前には俺は殺せない」

屋根の上に立つ人影が、初めて口を開いた。
大人の男にしてはまだ高い声・・・まだ声変わりも迎えていない少年だと知れた。
その時。
「疾風(ハヤテ)！」
張りのある、艶っぽい女の声が、その場に異質に響いた。
疾風、と呼ばれたその少年が、ツイ、と首を巡らせて声の主を見た。
「・・・もう一人。いや、二人いたのね」
少女が、新しく現れた二つの影を睨み据え、つぶやいた。
少年の隣に降り立った影は、明らかに女。
その隣に一呼吸置いてフッと現れたのは、大柄な男の影だった。

「疾風。あンた・・・」
女のほうが、眼下の状況を見下ろすと同時に、言葉を発した。
「邪魔したから、二人殺した」
返したのは、少年の平坦な声。
その、モノを片付けたかのような何気ない声音に、庭に立つ少女の肩が震えた。
「その女も殺すか」
少年の声に、ぎり、と歯をかみ締める。
「ふざけるな・・・殺すのはあたしの方よ！！」

「疾風。その娘は殺すな。それじゃ『意味がねぇんだよ』」
意外にも、それを止めたのは、女の隣に佇んだ男の方だった。
そして、自分を見上げる少女に、冷たい視線を走らせた。
「その実力じゃ千年早い。帰るぞ」
最後の言葉は、女と少年に向けられた。
そして、3人は少女を無視して、背中を向ける。
「・・・帰るってどこよ！ソウル・ソサエティね？」
「だったらどうした。俺達を追ってくるか？死神代行の分際で」

ぎり、と茜雫が唇をかみ締める。その眼前で、次々と3人の姿が掻き消えた。

「待て・・・！」

少女がバッ、と庭を蹴り、身軽な動きで中空に飛び上がった。

しかし、屋根に降り立ったときには、その3人の姿は、もうどこにもなかった。

「くそっ・・・」

少女はあたりを見回し、気配すら完全に消えたことを悟ると、唇を噛んだ。

強気な言葉とは別に、涙と雨が一緒くたに、頬を流れてゆく。

「・・・お父さん。お母さん」

庭で倒れた一組の男女は、少女の目に、やけにちっぽけに見えた。

「あたしはどうなってもかまわない・・・絶対、敵を討つから」

無表情で両親を凶刃にかけた、あの少年のどこまでも冷たい瞳を、思い出していた。

少女は、ゴクリ、と一度唾を飲み込んだ。

そして・・・手にした錫杖を、大きく振りかぶる。

力の限り振り下ろしたその錫杖の一撃は・・・少女自身の胸をまっすぐに貫いた。

## 【2】「久しぶりだな、一護」

6月。
梅雨に入った今日も、朝から雨が降り続いていた。

「おはよー」
一護が、寝ぼけ眼のまま、リビングのドアを開けた。
「おはよ！」
「一兄、おはよー」
キッチンの奥からは遊子の、リビングのテーブルからは夏梨の声が返した。
父親の一心はすでに診療所に行っているのか、姿は見えなかった。
朝からシャワーを浴びた後なのか、夏梨の肩までの黒髪は、半乾きのままだ。
青いランニングシャツに、黒のスパッツを履いた、いつもながら動きやすそうな格好をしている。
食パンにハチミツを塗りながら、チラリと一護を見た。

「ほら、お兄ちゃん。土曜だからってボンヤリしてたらダメだよ」
キッチンから出てきた遊子が、湯気の立ちのぼるコーヒーカップを一護に手渡した。
夏梨と双子とは思えない、小麦色の髪に明るい茶色の髪をしている。
服も対照的に、エメラルドグリーンのTシャツに、黄色いスカートを履いていた。

「おー、サンキュー」
ううん、と伸びをしてからコーヒーカップを受け取り、口をつける。
苦い液体が口の中に流れ込むと同時に、半濁していた意識がはっきりしてきた。

それと同時に、さっきから流れていたＴＶの音が、突然耳に入り始める。
――「それでは、東京都〇〇市、橘町（たちばな）の現場です」
ＴＶの中では、黒い雨合羽を着たキャスターが、深刻な顔でマイクを握っていた。

「橘町？・・・ったら、ココの隣街じゃねーか？」
「あぁ」
顔を上げてＴＶに見入った夏梨の隣の椅子に、一護が腰を下ろした。
――「昨日６月１４日深夜、神崎匠さん（４６歳）の自宅で、一家三人が惨殺されるという、痛ましい事件が起こりました。
警察当局は、殺人の容疑で捜査本部を設置し、捜査を開始しました」
沈痛な面持ちでキャスターが告げ、背後の家が大きく映し出された。
門の前には「神崎」とネームプレートが取り付けられていたが。

「な、なんだこりゃ」
その家の映像に、その場にいた三人は絶句した。
家は、まるで大砲でも打ち込まれたかのように、破壊されていたからだ。
――「殺害に使われたと思われる鋭利な刃物も現場からは見つかってはおらず、捜査当局は犯人が現場から持ち出した、との見方を強めています。
また、黒い着物のような衣服の人影を見たとの証言もあり、慎重に捜査が進められています。

「黒い・・・着物、だって？」
夏梨が眉をひそめ、チラリと一護を見やった。
「お前が気にすることじゃねーよ」
一護はそれだけ言うと、遊子が運んできたトーストを齧（かじ）った。
ＴＶは直ぐに切り替わり、「数字を理解するワンコ」の話題へと移

っていた。

部屋に戻った一護は、シャツをベッドの上に脱ぎ捨てると、クローゼットを開けた。
少し悩み、無地の黒のTシャツと、薄地の黒のジャケットを引っ張り出した。
――　黒い着物に、鋭利な刃物、だと？
キャスターの言葉が、耳に引っかかっていた。
素人目に見ても、犯人が、黒い着物なんか着て殺人現場に行くとは思いがたかった。
逃げるときに、それでは目立ちすぎるだろう。
「でも、そんな訳ねえ」
一護は、無意識のうちに一人、呟いていた。
日本刀を携えた黒い着物のモノ達を、一護はよく知っている。

死神。
死してなお、様々な理由で現世に留まるものを、あの世まで導く者たちだ。
しかし・・・生きている人間を手にかけるなど、ありえないはずだった。
――　とりあえず、現場に行ってみるか。
橘町までは、電車で15分程度だ。
服を手に、振り返った一護は、
「ふっ！」
息を吐いて、その場に固まった。
思いがけないほど近くに、いつからいたのか・・・
「久しぶりだな、一護」

大きな黒い瞳が、一護を見上げていた。
「ルキア！お、おめーいつからそこにいた？」
漆黒の着物「死覇装（しはくしょう）」を身に纏い、腰には斬魂刀と呼ばれる刀を差す、死神の正装姿である。
驚く一護を見て、ルキアの目が、睨むように細められる。
「いい加減にお前も、霊圧を察する力を鍛えればどうだ」
それだけ言うと、ベッドに腰を下ろして、立ったままの一護をもう一度見上げた。

「どーしたんだよ、ルキア。何かあったのか？」
「あったのだ」
ルキアはふぅ、とため息をついた。
「お前と同じ死神代行の一人が、昨日殺されたのだ。しかも、家族ともども、な。
死神化した形跡は残っている。しかし、虚（ホロウ）の霊圧はその場に残っていないようなのだ。
だからと言って、死神を虚以外に殺せるものなどまず無いし、私が現場検証に来たのだ」
「ふーん、・・・て、待て」
うなずきながら話を聞いていた一護が、ハッ、と視線をルキアに戻した。

「死神代行って、俺のほかにもいるのかよ？」
「お前一人しかおらぬと思っていたのか？」
ルキアは逆に聞き返した。
「そんな訳はないだろう。
お前のような経緯は極めてイレギュラーだが、様々な理由で死神代行になった人間は昔からいるのだ。
まぁ、余程のことがなければ、死神代行同士が連携することはないがな」

「・・・なるほど」
一護はうなった。
確かに、死神代行という制度が既にある以上、自分以外にいてもおかしくはないが・・・
これまで、自分と同じ立場の人間がいるなんて、想像だにしなかっただけだ。
――一度、会って話してみたかったけどな・・・
ルキアが現れたタイミングからして、その「殺された死神代行」のことを、おそらく自分はもう、知っているのだろう。
「・・・俺も行く。ちょうど、行こうと思ってたところだしな」
「どういうコトだ？」
怪訝そうに顔をしかめたルキアに、一護は今朝のニュースを話して聞かせた。

「・・・ふむ。間違いなくそれだな。
考えてみれば生身の人間が殺されたのだ、ニュースにならない訳がないか」
一護の話を一通り聞いたルキアは、腕組みをしたまま頷いた。
そして立ち上がると、すぅ、と一呼吸ついて、一瞬のうちに死神から生身の姿へと変わる。
濃い藍色のワンピースは、ルキアの白い肌によく映えていた。
「お前も、行くか？・・・別にこなくてもよいのだぞ」
ルキアの表情に込められた気遣いに、一護も気づかないほど鈍くはない。
だが、一護は軽く首を振った。
「いや、俺も行くぜ。・・・他人事じゃ、ねえしな」
「そうか」
ルキアはそれだけ返事をすると、僅かに辛そうに頷いた。

――　ルキア・・・
一護が死神代行になるきっかけを作ったのは、他ならぬルキア自身だ。
それを気に病んでいることを、一護もよく知っている。
「ルキア」
声をかけようとした時、ルキアはチラリと一護を見た。
「それは良いが、貴様。いつ服を着るのだ？」
「え？あぁっ！？」
言われて初めて、一護はシャツを脱いでそのままだったことに気づく。

「お、おめーがいきなり現れたから、ビックリして忘れてたんだよ！」
「それにしては、ずいぶん長い間忘れてたようだな。
てっきり私は、お前はこういう趣味なのだと・・・」
「うっせえよ！」
あたふたと服を着る一護を見て、ルキアはニヤリとほくそ笑んだ。
――　性格悪ぃヤツ・・・
一瞬でも、こいつを慰めようと思った俺がバカだった。
苦虫を噛み潰したような一護の顔を盗み見て、ルキアはふっと微笑んだ。

## 【3】「茜雫を殺したのは、死神だ・・・」

「・・・イヤな雨だな」
ルキアが、透明のビニール傘から透けて見える、雨粒を見上げた。
「晴れてるよりはいーんだよ、こういう時はよ」
そう言って先へ進んだ一護の背中を、ルキアは目で追った。

――　そうかもしれないな・・・
一護の向かう先は、昨日襲撃にあった、神崎家。
家のある方には人垣ができ、カメラのフラッシュらしい閃光や、あわただしく行きかう警察関係者でごったがえしている。
それの更に向こうに、不安そうな顔をした一般の人々が見えた。
「やっぱり、嫌なものだな、こういうのは」
先を行った一護には聞こえない小さな声で、ルキアは呟いた。

死神として、日常的に死には接している。
しかし、身近な人間の死を前に、苦悶している人たちの顔を見るのは苦手だった。
どうせ誰もがいつかは死ぬのだから、とは、どうしてもルキアは割り切れないのだった。
もう全く覚えていないが、自分もかつて現世で生き、死んだ魂だったからかもしれない。

「・・・昨日は、元気に職場に来てたのに。どうしてこんなこと・・・！」
泣き崩れているのは、無くなった妻の同僚だろうか。
中年の女性の背中を、同じ年くらいの女性が抱き、諸共に泣き崩れるのを見た。

一護は、寄り添うその背中を、成す術なく見守るしかなかった。
一護自身も、家族を虚に襲われたことが何度もある。
自分はもちろん、父親や妹が一緒に殺されていても、おかしくない場面もあった。
そこまで考えて、一護の背筋を、ゾクッ、と冷たいものが駆け上がった。
――　明日は我が身、かもしれないってことか・・・
もちろん、そんなことは絶対にさせない。
でも、ここで命を落とした死神代行だって、そう思っていたに違いないのだ。

一護は唇を噛んで、間近に迫った家を見上げた。
警察が行きかう庭には、生々しい血痕がいくつも残っている。
おびただしい血が流れた後に描かれた白い人型のラインに、一護は目を逸らせた。
「・・・ちくしょう」
自分が助けに行ければ、こんなことにならずに済んだかもしれない。
しかし昨夜、虚の気配に反応するはずの死神代行証も、沈黙を守ったままだったのだ。

「娘さん、胸を一突きだったみたいじゃないか。
長い刃物で突き通されたんだろうって警察が言ってるのが聞こえたよ」
――　長い刃物・・・
隣の男たちの会話に、一護の心臓がドキリと跳ね上がった。
――　黒い着物のような衣服の人影を見た、との証言もあり・・・
今朝のキャスターの声が耳によみがえり、一護は首を振った。
「そんなはずねえ」

一護が呟いた、そのときだった。

一護の隣を、女子高生たち数人が、しゃくりあげながら、通り抜けた。

「うぅ・・・茜雫ちゃん・・・」

「・・・センナ？」

なんだろう。

その名前を聞いたとき、胸の中を風が吹き抜けた気がした。

一護は反射的に振り返り、女子高生達を見やる。

そのうちの一人は、ケータイを開き、その中の画像に視線を落としていた。

一瞬だが、ケータイの中で、満面の笑みでピースサインをしている少女が見えた。

長い黒髪を頭の高い位置でポニーテールにし、赤いリボンで結わえている。

大きな琥珀色の瞳、悪戯っぽく笑う口元。

――　コイツが、殺されたって言う一人娘か・・・

刹那の間なのに、その少女の画像は、一護の頭に焼きつき離れなかった。

「神崎茜雫、１６歳。斬魂刀の名は『弥勒丸』か。

・・・これは、一護に勝るとも劣らぬ、異色の経歴だな」

ルキアは、人ごみから少し離れ、隊長の浮竹から渡された資料に視線を落としていた。

今より３ヶ月前。

神崎茜雫は、橘町に出没した虚を倒したところを、駆けつけた死神

に発見された。
斬魂刀「弥勒丸」を使いこなす姿に、どこの隊の所属かと聞かれても、彼女はキョトンとしたままだったという。
それどころか死神でさえなく、現世に親も持つ普通の高校生だと知った死神たちの驚きは、相当のものだったらしい。
しかし、結局「なぜ、ただの人間のはずの神崎茜雫に、死神レベルの実力があるのか」という謎は解明されないままらしい。

「記憶喪失・・・」
資料の文字に視線を走らせ、ルキアは眉間に皺を寄せた。
神崎茜雫には、過去半年以前の記憶は抜け落ちている。
すなわち、なぜ死神化できるのか、という経緯も忘れているということだ。
茜雫、か。
心の中で、その名前をもう一度呟いた時だった。
一瞬、ルキアの脳裏にフラッシュバックした風景があった。

いつになく孤独に見える一護の背中。
ルキアは、その背中をじっと見つめながら、ゆっくりと歩みを進める。
周りは石の灯篭や石塔が立ち並ぶ・・・街の一角のひっそりとした墓場。
その背中に呼びかける時、いつになく、声がかすれた。
――「もうじき、夜が明ける」
――「あぁ」
返した一護の、どこか乾いた声音。
ゆっくりと、ルキアに向かって振り返った ――

ポツ、とひときわ大きい雨粒が傘に落ち、ルキアはハッと我に返った。
「なんだ・・・」
さっき、私は何を考えていた？
思い出そうとするが、さっきはあれほど鮮烈に浮かんでいたイメージが、影も形もなくなっている。
ただ、胸を締め付けるような思いだけが、後味のように残っていた。

「と、とにかく、霊圧を調べなければ・・・」
ルキアは自分を励ますように口に出すと、スッと瞳を閉じた。
そして、その場に残った霊圧に、注意深く意識を凝らした。
「・・・何」
ルキアはすぐに、弾けるように目を開けた。
「虚の霊圧を感じぬわけだ」
その場にくっきりと残された霊圧は、ひとつの事実を物語っていた。
信じられないし、信じたくも無いが、それは明白な事実。

「茜雫を殺したのは、死神だ・・・」
自分達と同種の者だけが持つ気配は、読み間違えようとしたって間違えられるものではない。
それに、並みの死神ではない・・・
例えば席官レベルなのは間違いないこと、そして3人分の気配が残っていること。
ルキアは瞬時にそれらの状況を把握する。

しかし誰が？
今の精霊廷に、そのような凶行に走る、席官がいるというのか？
――　いつ、何が起こってもおかしくはないか・・・
ルキアは唇をかみ締める。
何しろ、隊長が3名も精霊廷を離脱するような事態が、実際に起こ

っているのだから。
「一護・・・」
一護を探したが、気配はすぐ近くにあるものの、人ごみに隠れて姿が見えない。
めまぐるしく思考を走らせていた時だった。

「！」
ルキアはピタリ、と体の動きを止める。
――　誰かが見ている・・・
そう思ったのは、一瞬。バッ！と上空に視線を走らせる。
民家の屋根から数メートル上の、上空。そこに、黒い人影がたたずんでいた。

――――――――――――――――――――――――
ここで補足。
映画のラストシーン、茜雫が普通の少女として暮らしているのが婉曲的に出てます。
これはその後に茜雫に起きたこと、という設定です。
あと、茜雫の苗字はでてこなかった（はず・・・）なので、便宜上神崎（なんで？）にしてます。

## 【4】「俺は、もう氷輪丸は使わない」

「貴様！何者だ！」
波打つ長い黒髪が、漆黒の死覇装の胸から腰にかけて、纏いつくように伸びている。
髪の一部を頭頂部で結わえ、紅色の簪(かんざし)で止めている。
その大きな切れ長の瞳は、緩やかな弓形を描いている。
目を惹くほどに赤く、豊かな唇が、ルキアを見下ろしてにんまりと微笑んだ。

「アタシかい？・・・孤虹(ココウ)」
艶のある声は、その場にはっきりと通った。
嫣然と微笑んだままの「孤虹」と名乗った女とは逆に、ルキアは一歩、後ろに下がった。
「馬鹿なことを言うな・・・」
強気に言い返したが、その語尾はかすれた。
「孤虹といえば私でも知っている！しかし、それは遥か昔に、虚に殺されて死んだ者の名だ！」

「へェ・・・そういうことになっているのかい」
全く動じることなく、却って笑みを深くし、女はそう言った。
「アンタ、アタシの噂を聞いてるんなら、このことも知ってるだろ？」
その瞳に、妖しい光がともる。
「アタシたちを殺せるような虚や破面は、たったの一匹さえいなかったってことを」
ぐっ、とルキアが言葉に詰まった。
この女が、ルキアが噂に知る「孤虹」のはずがない。

しかし・・・刻々と増してゆく女の霊圧は、理屈でなくルキアの平常心を奪ってゆく。
万が一本当だった場合、ルキアには万にひとつも勝機があるとは思えなかった。

「貴様。今、『私達』と言ったな？」
少しでも情報を引き出さなければ。ルキアは、ごくりと唾を飲み込んだ。
対照的に、女は余裕の笑みを浮かべたまま、続けた。
「山本総隊長に伝えなさいな。この孤虹、そして黒星（ヘイシン）。
この二人を敵に回したくなければ、黙って見ていろ、と」
「黒星、だと・・・」
愕然としたルキアが、呟くよりも早く。
笑みを湛えた女の姿が、フッとぶれたように見えた。

次の瞬間には、その姿はもう、どこにもなかった。
――　速い・・・！
これほどの速度、「瞬歩」よりも上だ。
「この速さ。・・・時越（じえつ）の孤虹…本人だというのか」
もしもそれが事実なら、精霊廷にとってもとんでもない事態だ。
「くっ！！」
ルキアは死神化すると中空に飛び上がり、あたりを見回した。

――　かすかに、気配を感じる・・・！
まさか追ってくるとは思っていないのだろうか。数キロ先に、ポツリと気配を感じた。
「バカに、するな・・・」
自分とて死神の端くれだ。
「相手が強い」それだけの理由で、逃げることなどできない。
ルキアは眦を決し、その場を蹴った。

その頃。
ソウル・ソサエティ中心部・精霊廷でも、柔らかな雨が降り続いていた。
ふぅ。
執務室で書類に目を通していた日番谷は、窓から降り続く雨に、ふと視線を走らせた。
壁に立てかけられた氷輪丸に目が行くと、その目が少し切なそうに、細められた。

――「じゃあな、冬獅郎。いつかまた、会える日も来るだろうさ」
王印の力によって二度息を吹き返した（※）草冠が、そう言って精霊廷を去っていったのは、今から一ヶ月前のことだった。
――「これからどこへ行くつもりだ？草冠」
日番谷の問いに、草冠はサッパリとした笑みを返した。
――「決めていない。まぁ、気が済むまで流れてみるさ」
その屈託の無い表情は、草冠と日番谷と二人、真央霊術院で技を磨いていた頃を思い出させた。

草冠は、表側では精霊廷を反乱に陥れた末、日番谷によって殺されたことになっていた。
その後の顛末を山本総隊長とて知らぬわけではない。
しかし、精霊廷に侵入し破壊した犯人が生きている、では示しがつかぬと拒絶したのだ。
――「・・・もう一度俺から、総隊長に話してみる。このままじゃお前は・・・」
せっかく生き返っても、歴史からは消されてしまうんだぞ。
日番谷がそう続けようとした時、ぽん、と軽い仕草で草冠が日番谷

の頭を打った。
――「な・・・」
――「自分のことなら潔く全部捨てられるのに、他人のこととなると、てんでダメだな、お前は」
言動とは裏腹に、草冠の声は兄のように優しい。
そして、自分の見送りに、自主的に集まってくれた死神たちを見渡した。

一護、ルキア、恋次、乱菊。浮竹、京楽。そして意外なことに、一角と弓親の姿もあった。
――「どうか、コイツを頼むよ」
――「オイ、コイツってのは俺のことじゃねえだろうな」
日番谷の抗議を笑って聞き流すと、草冠はくるりと背中を見せた。

――「おいお前、氷輪丸は！」
その背中に、日番谷は慌てて呼びかけた。
草冠の持つ刀は、日番谷と同じ「氷輪丸」。
その腰には、刀の一本も差していない。
草冠は、既に歩き出しながらも、日番谷に返した。

――「お前が勝って、俺は負けた。落とし前はつけなきゃな。俺は、もう氷輪丸は使わない」
――「草冠っ！」
ソウル・ソサエティは、死神レベルの実力があれば安心、とは間違っても言えないのだ。
隊長格でも手こずるような敵だって存在する。
後を追おうとした日番谷を、肩越しに振り返った、草冠の鋭い眼光が射た。
――「これ以上、俺に恥を掻かせるな。親友と、今でも呼んでく

れるなら」
返す言葉を失った日番谷の肩を、一護がそっと掴んだ。
振り返った日番谷に向かって、無言で首を振った。
二人の最後の戦いを目の前にした一護には、少しだけ・・・草冠の言うことも、分かるのだ。
――「お前は、俺の親友だ」
再び踵を返した草冠に、日番谷がポツリと呟いた。
――「だから、必ず帰って来い」

こういう結末しか、起こりようがなかったのだ。
雨をなんと無しに見つめながら、日番谷は思う。
例え同じコトがもう一度起こったとしても。
自分は草冠と決着をつけるために精霊廷を裏切るだろう。
そして草冠と、最終的には刀を交えることになる。

それでも。たまに、頭の隅で思うのだ。
――一緒に、戦ってみたら、どうなっていただろうな。
草冠と肩を並べて精霊廷と戦い、卍解の力で王印の力を解放していたら、どうなっていただろう。
草冠にとっては、少しはマシな結末が訪れただろうか？
少なくとも、友の裏切りという事態には、直面せずに済んだはずだ。
でも日番谷には、例え何度決断を迫られたところで、そんな未来は、選べない。
だからこそ、後ろめたい気持ちは、未だに日番谷の心を深く蝕んでいた。
――――――――――――――――――――――――――――――――

※草冠宗次郎について補足。
映画では草冠は死んでますが、ここでは「生きている」という設定でひとつ、お願いします。

その辺のエピソードは別作品「Ａｃｏｕｓｔｉｃ　Ｂｌｅａｃｈ１９話～２０話←」にて（ＰＣのみ閲覧可）
【１９話】ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ６６２５ｄ／１９．ｈｔｍｌ
【２０話】ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ６６２５ｄ／２０．ｈｔｍｌ

## 【5】「どうしても追わなきゃいけないヤツがいるの」

「・・・もう呑めましぇーん・・・」
カクッ、と日番谷の首が落ちた。
視線を部屋の中に戻し、長椅子をにらみつけた。
正確には、長椅子の背の向こうを。

「松本っ！いつまで寝てんだっ！！」
「・・・はっ！！」
かば、と長椅子の向こうから、身を起こした乱菊の姿が現れた。
そして日番谷を見やる。
「寝てません、寝てませんてば」
「寝言ぬかしてただろ、今！」
「えぇ？『もう働けません』とか言ってました？」
頬を押し付けて寝ていたせいだろう。
ソファーの縫い目の線が、頬にくっきりとついている。

――　どう突っ込んでやろうか・・・！
日番谷がワナワナと震えていたとき。
「いつもにぎやかだね、十番隊は！」
ノックもなしにバーン、と扉を開けて入ってきたのは、十三番隊隊長、浮竹十四郎だった。
しかし、その表情と格好を見て、日番谷は眉をひそめる。
その大声はいつもどおりなのだが・・・どこか表情に元気がない。

「元気を分けてもらいに来たよ」
そう続けた浮竹は、上から下まで、全て黒で統一した着物を着ていた。
死覇装はただでさえほとんど黒だが、今日は足袋や草履の紐まで黒、

とかなり念が入っている。
「アンタに分ける元気なんて、十番隊には無いっス。それより、隊で何か？」
聞きながらも、隊士に誰も死人はでてないはずだ・・・と頭の中で確認する。
「いや、正確には死神ではないよ。死神代行が昨日・・・ね」
「死神代行！まさか」
乱菊が長椅子の背に手をかけ、浮竹の方に身を乗り出した。
「いや、一護君じゃない」
その声に、乱菊はほっと胸をなでおろした。

「て、他に誰かいましたっけ」
「何人もいるだろ！浮竹隊長の管理下で、黒崎じゃないとしたら・・・神崎茜雫、か。
最近死神代行になったって聞いた」
「さすが、よく把握してるね。死神だったら席官はカタいと思ってたのに、残念だよ」
部下を亡くすことについては、殊の外敏感な浮竹だ。
元々病弱なこともあり、まるで病気が吹き返したかのように浮竹の顔色は悪い。

「・・・虚にやられたのか」
「それが、よく状況がつかめなくてね。今、朽木を現世に派遣している」
そこまで言った浮竹は、隊首席に肘をついて、日番谷の耳に口を寄せた。
「そこで、内密に頼みがあるんだが・・・西関門は、君の管轄だったね？」
「あぁ」
それだけで、なんとなく察しがついたのだろう。

日番谷が微妙な表情で頷いた。
「神崎茜雫って者の魂が、門まで導かれて来たら、特別に連絡をもらえないだろうか？」

「・・・それは構わねーけど」
思った通り。日番谷は、微妙な表情を深めて頭を掻いた。
本来、死者個人に死神が関与することは、隊長格であってもご法度である。
しかし、日番谷が気にしているのは、そういうことではなかった。
毎日何千・何万もの死者を新たに受け入れても、死んでから流魂街に割り振られるまで数ヶ月街待ちという状況なのだ。
たった一人の人間を選り分けることが、そもそも可能なのか？
日番谷が返事に困った、その時。
隊首机に置かれた電話が、鳴り響いた。

「日番谷だ」
無愛想そのものの声を返した日番谷の表情が、ぱっと明るくなった。
「お前か。どうしたんだ、珍しいな」
「隊長がそういう声出すほうが、珍しいですよね」
乱菊と浮竹が、日番谷と受話器を交互に見て、こそこそと言い合う。

「おぅ。電話なんて初めてかけるんだが、こんな小っこいもん持てねえよ」
電話の向こうにいたのは、児丹坊（じだんぼう）。
精霊廷西門と、ソウル・ソサエティ西関門の警備を兼ねている大男である。
西流魂街出身の日番谷とは、日番谷が死神になる以前からの付き合いだった。
日番谷が苦笑いしたらしい声が、受話器の向こうから聞こえてくる。

「今、西関門に来てるんだがよ、困ったことが起こってな。ちっと知恵かせ」
児丹坊は、西関門・通信室の窓の外に座り、室内からギリギリまでコードを伸ばし、電話していた。
１０メートルを越える身長のため、どうやったって部屋の中には入らないのだ。
小指の先くらいのサイズしかない受話器を、指先でなんとか掴んでいる姿は、笑えないコメディーのようである。
通信室の中では、何人かの関守が、苦りきった表情で児丹坊の声に聞き入っていた。

「――　話してみろよ」
関門で起こる程度のことなら、隊長でどうにかならないことはないだろう。
要領を得ないらしい児丹坊の話に、日番谷が辛抱強くうなずくのを、浮竹と乱菊は黙って見守った。
「・・・あぁ？本当か、それは？」
日番谷の声が、だんだん意外そうなものに変わってゆく。
彼には珍しく、驚きを隠そうともしない声音だ。
「話は分かった。けど――」
日番谷はそこで言葉を切ると、困ったような目で浮竹を見上げた。

「なんだい？一体」
更に珍しく、助言を求めているような表情に、頼られ好きな浮竹が身を乗り出した。
それと同時に。受話器から児丹坊とは別の男女の声がしてきた。
――「こら、君！入ってきちゃいかん！」
――「責任者と今話してるんでしょ、あんた！あたしに話させて！」
「なんだぁ？」
浮竹が怪訝そうな顔をして、受話器に耳を寄せた途端。

耳がキーンとするほど甲高い大声が、受話器から吐き出された。
「だからぁ、あたしは死神なんだって！どうしても追わなきゃいけないヤツがいるの！！流魂街に行けなんて、冗談じゃないわよっ！」

その頃。現世では、一護がルキアの不在に気づいていた。
「・・・っくしょー、ルキアのヤツ。いきなりどこ行きやがったんだよ？」
――　何かあったか。
ルキアは、いきなり自分をおいて消えるほど、気まぐれな性格ではない。
一護は、人垣の向こうに見える、半壊した家を見上げた。
一護には霊圧を感じ取ることはできない・・・が、この破壊のされ方が、普通と違うことは、分かる。

まるで、数メートルもの巨大な刃に切り裂かれたように、スッパリと鮮やかな切り口。
普通に切りつけて、あんな跡になるはずがない。しかし。
「死神の鬼道使えば、あれくれえは出来るかもな・・・」
だとすると。霊圧の調査をしているはずのルキアが、何かかぎつけていてもおかしくない。
「・・・ちっ」
一護は、その場で死神化すると、近くの電信柱の上に飛び移った。
あたりを見回した、その途端だった。
視界の西側で、何かが崩れ落ちる轟音のような音が聞こえた。
衝撃を受け、電線がゆらゆらと揺れている。
「くしょー、いきなりかよ！」
一護は背負った斬魂刀に手をやり、反射的に身を翻した。

## 【6】「・・・憧れは、理解から最も遠い感情よ」

「・・・あら」
香水の香りが、ふわりと空気に流れる。
「髪がくずれちまったじゃないか」
紅の簪(かんざし)を唇に挟むと、自分の姿を、近くにあった湖に映した。
湖に移る自分自身を見ながら、慣れた手つきで髪を結い上げる。

「・・・ひとつ、教えてあげるよ」
湖がゆらり、と揺れる。
湖に、ルキアの姿が映った。
女の背後に迫り斬魂刀を振り上げる姿が。
ちら、と女・・・孤虹(ココウ)は、ルキアを振り返った。
――　またか・・・！
ルキアは心中、舌打ちをする。
それだけの動作。それだけの動作なのに、ルキアの周囲に突風が巻き起こった。
いや、風などという生易しいものではない。
まるでハンマーのように相手に叩きつけられる、巨大な空気圧のようなものだった。

「くぅっ！」
ダン、と音を立て、ルキアの体が地面に叩きつけられた。
「女ってのは、そんなドロだらけになって戦うもんじゃない」
ゆらり、と立ち上がったその姿は、着物の乱れひとつない。
「うる・・・さい」
地面に手をつき、何とか半身を起こしてルキアは息をついた。
既に何度も叩きつけられている体は、内側からズキズキと痛んだ。

――　この女、間違いない・・・
この風の力といい、実力といい・・・今や伝説と化している死神「孤虹」本人だ。
疑っていたルキア自身も、こうなると受け入れざるを得なかった。
「なぜ・・・なのだ」
膝を突いたまま、自分を見上げたルキアの顔を、孤虹が見返す。
シトシトと振る細かい雨が、二人の間に降り積もってゆく。
数秒の静寂。
それを乱したのは、一瞬の間に落ちた、黒い影だった。

「ルキアっ！大丈夫か！！」
「一護！」
ルキアの傍らに飛び降りた一護は、ルキアの状態を見るなり、庇うように斬魂刀をルキアの前で構えた。
そして、目の前に立つ孤虹を見据える。
「死神代行の・・・茜雫とか言うヤツを殺したのはこいつか？」
「関わりはあるはずだ」
「それだけ聞けば十分だ！」
一護の手にした刃に、一瞬にして霊圧が満たされてゆく。

「・・・へェ」
孤虹が、面白そうに目を細めた。
「その霊圧、隊長レベルだね。・・・こんな現世に面白いヤツがいたもんだ」
「うるせぇ！！」
怒鳴ると同時に、一護は迷わず孤虹に斬りかかった。
一足飛びに、孤虹の間合いに入り込む。
「だけど、浅はかさは新人並みだね」
鮮やかな紅色の口元が、にんまり、と微笑んだ。
「ダメだ一護、逃げろ！！」

悲鳴のようなルキアの声が、その場に響く。
「その女の能力は　――！」
ルキアがいい終わるよりも早く。
孤虹の体の周囲で、何かがキラッと一瞬光ったように見えた。

「閃け。『紅南風（べにはえ）』」
「な・・・」
光ったと思ったそれが、突風のように自分に向かってくる――
一護はとっさに、斬魂刀「斬月」を自分の体の前にかざした。
「甘いね」
孤虹が笑ったのが見えた、次の瞬間。
斬月がまるで豆腐のように切り裂かれ、いくつもの破片と化して飛び散った。
その力は、容赦なく一護をも襲った。

「な・・・んだと」
一護は、唖然として、自分の横腹や肩に奔った傷跡を見た。
一瞬置いて、その傷がいっせいに血を吹き出す。
「一護ォ！」
叫んで駆け寄ったルキアが、後ろに倒れたその体を、背後から受け止めた。

「斬魂刀がなかったら、完全に真っ二つだったところだね」
嫣然とした笑みを浮かべたまま、言葉をつむいだ孤虹をギリ、と睨み上げた。
「なぜなのだ・・・」
歯を食いしばり傷口を押さえた一護を見下ろし、ルキアは呟いた。
「なに？」
「なぜなのだと聞いている！」
ルキアは、その大きな瞳をゆがめ、叫んだ。

「死神になろうとする者は、今でも。
貴方達に憧れ、貴方たちのようになりたいと思っているのだ！
私自身・・・噂に聞く貴方の強く美しい生き方に、女として憧れたこともある」
怪訝そうに、かすかに眉根を寄せた孤虹を、ルキアは悔しげに見上げる。
「なのになぜ。今になって、死神の敵に回ろうとするのです。・・・孤虹隊長」
その名に、孤虹は懐かしげに目を細めた。

「隊長、だと・・・？」
愕然とした表情で、一護がルキアと孤虹を見比べた。
答えない孤虹の姿が、ふっ、とその場から揺らめいたように、ルキアの視界に移る。
「・・・っ！」
ルキアはとっさに、身をのけぞらせた。
思いがけないくらい目の前に現れた孤虹が、その細い指をそっとルキアの頬に伸ばしたからである。
その指は、死人を思わせるほどに冷たかった。
笑みを形作った・・・しかし決して笑ってはいない瞳が、ルキアの瞳を覗き込んだ。

「・・・憧れは、理解から最も遠い感情よ」
――　殺される・・・
冷や汗が、ルキアの額にフツフツと浮いた。
警鐘が全身に鳴り響いているのに、動くことが出来ない。
――　どうする！
ドクン、ドクン、と鼓動が胸を叩く。
「・・・あら」

その時、孤虹は視線を下にずらせた。
その喉元に、白銀の刃が突きつけられた。
「一護！」
ルキアは思わず、声を上げた。
気を失っているとばかり思っていた一護が、ルキアの帯びていた「袖白雪」を抜き払い、刀身を孤虹に向けていたのだ。
ジリ・・・とその切っ先が、孤虹の喉元、数ミリまで迫る。

「・・・ルキアに手ェ、出すんじゃねえ」
この期に及んで全く怯えていない、怒りに燃えた瞳が孤虹を射た。
その瞳を見返し・・・孤虹はニィ、と笑みを広げる。
「カワイイのね」
その姿が、陽炎のように揺らめいた・・・と思った瞬間、孤虹の姿は数メートル離れた場所にあった。
――　またか・・・
ゆらゆらと揺らめいたと思えば、次はどこに現れるか分からない。

「アンタたちは、殺さないよ。精霊廷に伝言を持っていってもらわなきゃいけないしね」
「黙ってみていろ、とか・・・？」
身を起こしたルキアが、力を取り戻した瞳を孤虹に向けた。
「そんなことが通じるとでも？」
挑戦的、ともいえる言葉に、孤虹は表情を崩さない。
「そうね。ただの宣戦布告、と捕らえてもらっても結構さ」
ふっ、と右腕を中空に差し上げると、その手のひらの先に、黒い揚羽蝶が現れた。
死神が、ソウル・ソサエティと現世を行き来する時に使う、遣い魔のような役割を持つ「地獄蝶」である。
「アタシ達を殺そうっていうのなら、それもまた一興」
スッと背を向け、肩越しにチラリと振り返った。

「その時は・・・殺し合いをしましょう？」
その時に口元に浮かんだ笑みを・・・この期に及んで美しい、とルキアは思った。

## 【7】「お前と茜雫は、初対面なんだろうな？」

雨が降り続く精霊廷内は、落ち着きの無いざわめきに包まれていた。
いつもは静まり返っているこの場所にしては、珍しい状況だ。
「おい、聴いたかよ」
「信じられないよ、全く・・・」
死神たちが言い交わす中。ざっ、と重い足音が通りに木霊した。
「お、おい！君たち、大丈夫か！」
「頼む、手を貸してくれ」
駆け寄った死神たちに、小柄な女死神が返す。朽木ルキアだった。
一足ごとによろめく一護の肩を支えてはいるが、なにぶん身長差があるため、あまり歩く手助けにはなっていない。

「どうした！虚とやりあったのか？ひどい傷じゃないか」
一護に肩を貸しながらそう言った死神の声に、ルキアは唇を噛んだ。
「まぁ、な・・・。そんなことより、四番隊の誰かを・・・」
「呼ぶ必要はない」
ルキアの声を、冷酷、とも取れる女の声がさえぎった。
「お前は・・・」
地面に膝をついた一護が、その小柄な姿を見上げる。
「砕蜂だ」
感情の伴わぬ、漆黒の瞳。
まるで人形のような、表情のない顔立ち。
一護やルキアから5メートルほどの間を保ち、あくまで冷たい瞳がひた、と据えられた。

「朽木。死神代行を勝手にソウル・ソサエティ内に入れてはならん。・・・知っているはずだが」
「ですが！この傷では・・・！」

「死にはせんだろう」
砕蜂が一護を一瞥した。
「いくら四大貴族の娘だろうと、独断での行動は許されぬぞ」
「お言葉ですが、それは今回の行動とは、関係のないことです！」
さすがにムッとしたルキアの声が、その場に響き渡った。
砕蜂は、眉ひとつ動かさずにルキアを見返す。
「掟は掟だ！朽木、今すぐ黒崎一護を・・・」
「おーう、朽木！一護君！！」
砕蜂の言葉を、大らかな大声が遮った。
「浮竹！貴様・・・」
「悪いな砕蜂、一護君は俺が呼んだんだ。彼らを出迎えてくれてありがとう」
浮竹の言葉に、砕蜂は苦虫を噛み潰したような顔をする。
「ん？」
屈託の無い笑顔を向けられ、ため息混じりに背後に下がった。
「・・・勝手にしろ」
それだけ言うと、くるり、と3人に踵を返した。

歩み去る背中に、ルキアと一護は恨みがましい視線を送る。
「はは、まぁあれだ、砕蜂は忠義に厚い隊長だからね。そう悪く取るんじゃないよ」
「・・・いえ。助かりました、浮竹隊長」
ルキアが浮竹に向き直り、頭を下げる。
「いや。ちょうど良かったよ、今お前に連絡を取らなきゃと思っていたところだったからな」
「そのことなのですが、隊長！ご報告したいことが・・・」
「こっちも、とんでもないことになってるんだ」
「は？とんでもないこと、とは・・・」
浮竹は首をすくめて、ちらり、と近くを通りすがった死神たちに視線を向けた。

自然と、その二人の会話が耳に入ってくる。

「一体どういうことなんだろうな。死人が斬魂刀引っさげて現れるなんて・・・」

「神崎茜雫、だったか？死神代行が死んで、今度は正規の死神にしてくれって訴えてきたんだろ？呆れたもんだ」

一護とルキアは、ぽかんとして顔を見合わせる。

口も開けたまま、今度は浮竹を見た。

「ま、そういうことなんだ、二人とも。無駄足になって済まないな」

後頭部を掻きながら、浮竹が言った。

――　何をのんきな・・・

ルキアは思わず、浮竹の方に身を乗り出す。

「そのようなこと、前代未聞ではないですか！

一体死神代行は今、どこにいるんです！のんびりとしている場合では・・・！」

「誰がのんびりしてるって？」

大人にしては高い、しかし落ち着き払った声が、その場によく通った。

「と・・・冬獅郎！」

振り返った一護の動きが、こちらへ歩いてくる二人の姿を見るなり・・・固まった。

雨に湿った砂をざっ、ざっ、と鳴らしながら、二組の草履が土を踏む。

先導するように歩む日番谷の後ろの人物に、一護の視線は吸い寄せられた。

その少女は、背中の中ほどはある、蒼っぽく見えるほどに黒い髪を、上できりりと束ねていた。

かっちりと着こなした、漆黒の死覇装。

真紅のリボンと帯が、風に流れてふわりとたなびいていた。
一護よりも明るい琥珀色の瞳が、まっすぐに一護に向けられた。

「――」
二人はつかの間、表情のない瞳を向けあう。
「おま・・・」
「なーーーんだ!!」
躊躇いがちに声をかけようとした一護を、茜雫の無遠慮な大声が遮った。
「あたしと同じ死神代行っていうから、運命の出会いかもって思ってたのに・・・!
全っ然想像と違うじゃんよ」
「・・・オイてめー。初対面の人間に言うことか、それが!」
途端に一護が額に青筋を立てる。
浮竹が苦笑いし、日番谷はあからさまにため息をついた。

詰め寄った一護の眼前に、茜雫は人差し指を突きつけた。
「なーによ。あたし、死んだばっかりなのよ?死人は労わりなさい」
死人は労われ。意味が分からないが、妙に説得力だけはある。
さっきまで、お前の通夜を準備してる席に立ち会ってたぞ。
思わずそう言おうとして、一護は言葉を飲み込む。
なんだか、そんなことを言うのは、ふさわしくない気がした。
というより、これは何と不自然な状態なんだろう。
「何が死人だ!アッケラカンとしやが・・・」
そこまで言いかけて、また口をつぐむ。
――　ちくしょう、やり辛ぇ・・・
どんなに平気に見えても、茜雫は両親を亡くし、自分自身も命を落としたのだ。

一護の葛藤とは裏腹に、茜雫は屈託無く笑った。

「あたしね。実は半年以上前の記憶が全く無いの。
親とか友達とか、あんまり実感がわかなかったから。あんまり悲しくなんて・・・」
そこまで言いかけた時、茜雫は唐突に言葉を止めた。
その襟元を、詰め寄った一護が掴んだからだ。
「それ以上言うんじゃ、ねぇ！」
茜雫ちゃん。
そう言って肩を抱き合い、泣き崩れた女子高生の姿が、一護の頭によみがえった。
「どれほど皆泣いてたと思ってんだ！」
どういう神経をしていれば、親を殺されて、そんなに平気でいられる？
自分の考えを押し付ける気なんてない。
しかし、一護はこみ上げてくる苛立ちを押さえられず、茜雫を真っ向からにらみつけた。

言い返すか、手を振り払うかと思っていた茜雫は、黙っていた。
その瞳が、ゆらり、と揺らめいた気がして、一護はハッと我に返る。
「もういいだろ」
日番谷が、一護の袖を掴み、ぐっと後ろに引き戻した。
一歩下がった一護の手が、茜雫の襟元から離れた。
「山本総隊長が待ってる。黒崎、朽木、お前らも来い」
「しっ、しかし、一番隊の隊首室には隊長以外は入れないのでは・・・」
「いいから来い。どうせお前達からも話を聞くんだ。二度手間になったら面倒くせえだろ」
慌てるルキアに、日番谷がぴしゃりと言い放って背を向けた。
「砕蜂がいない時でよかったよ」
浮竹が苦笑し、日番谷の後を追った。

その背中を追おうとしたルキアは、立ち止まったままの一護を振り返った。
「・・・なぁ、一護。お前と神崎茜雫は、初対面なんだろうな？」
「あ？当たり前だろ。あんな女知らねーよ」
ブスッとした表情のまま、一護がため息混じりに返す。
「うむ・・・」
ルキアはうなずきながらも、どこか腑に落ちない表情で目を伏せる。
「なんだよ？」
「いや。どうしてお前、アレが茜雫で、死神代行だと一目で分かったのだ？
あっちもお前を見て、すぐに『死神代行』と断じただろう？不思議に思ってな」
「え」
一護は、とっさに言葉を失い、先をいく茜雫の小柄な背中を目で追った。
「・・・イヤ」
しばらくして、一護は首を振る。
「ただの直感だ。全然しらねーよ。あんなヤツ」

## 【8】「精霊廷を出ること、まかりならぬ！」

「・・・お主が、死神代行・神崎茜雫か」
一番隊隊首室に、山本総隊長の荘厳な声が響き渡った。
――　これが隊首室か・・・
一護はきょろきょろと辺りを見回す。
護廷十三隊にいるルキアには、普段は隊長しか入れない、この部屋のプレッシャーは相当なものなのだろう。
居心地悪そうにしているルキアを見て、一護はそう思った。
その意味をよく知らない一護や、おそらく茜雫も、そのような緊張は強いられないが。

「はい、総隊長。この者が、十三番隊の管轄にある死神代行の一人・神崎茜雫です」
浮竹が茜雫の肩を押し、前に出させた。
「日番谷隊長から聞かされた時は、さすがに仰天したぞ。こんなケースは初めてじゃ。
直接、説明してもらえるかの。お主がここに来た経緯を」

「・・・昨日の夜。父さんが残業終わって帰ってきて、お母さんはお風呂から上がってきたトコで、あたしはＴＶ見てたの。
そしたら急に・・・『アイツ』はやって来た」
「やってきた者の、外見は？」
日番谷の問いに、茜雫は顔をしかめる。
「アンタより一回り大きいくらいの・・・まだ子供よ。中学生くらいの男」
「は？子供？」
浮竹が間の抜けた声を出し、日番谷を見つめた。
「俺を例えに使うな」

ムスッとして日番谷が返す。
顔を見交わしたルキアと一護も、別の意味で驚いていた。
――　孤虹ではないのか？
「そいつは、モノも言わずに、リビングの窓を打ち壊して入ってきた。
あたしが死神化するよりも早く、刀を抜いて・・・あたしに向かってきた」
淡々と語っていた茜雫の声が、その時震えた。
「父さんと母さんはあたしを庇って前に出て・・・同時に斬られたの。
剣の動きを見ることもできなかった・・・」
それが、あの庭で死んでいた二人の男女の姿につながるのか。

「あたしが死神化して、アイツの前に出たとき・・・別の男と女が出てきたの。
そして、あたしを殺そうとしてた子供を「疾風（ハヤテ）」と呼んだ。
そして言ったの。『ここで殺しても、意味が無い』と」
「では、君を襲ったのは、意図あってのことだということか・・・」
「・・・わかんないよ」
茜雫は俯いていたが、やがてバッ！と顔を上げて、浮竹を見た。
その目に、涙がいっぱいに溜まっていた。

「あたしは死神代行だから、恨みを買うコトだってあったかもしれない。
でも！父さんや母さんが、あんな死神に殺されるような何をしたっていうのよ！」
「死神？？」
総隊長と日番谷、浮竹の声が重なった。
「ちょっと待ってくれ。君の家族を襲ったのは、死神だというのか

？」
「死神だったわよ！あの霊圧、あの姿、同類を間違えるわけないでしょ！」
「・・・」
3人の隊長は、互いの思惑を探るかのように、黙って視線を交わした。
「茜雫。お前を襲った三人のうち女は、長い黒髪の、真紅の簪を挿した姿ではなかったか？」
その時、黙っていたルキアが口を挟んだ。
その言葉に、茜雫の肩が震える。
その固く引き結んだ口元が、肯定を表していた。

「・・・総隊長。僭越（せんえつ）ながら、ご報告したいことがあります」
ルキアが、意を決したように総隊長に向き直った。
「神崎茜雫を襲った三人の、目星がついております。
一人は元一番隊隊長、孤虹。そしてもう一人は、元十一番隊隊長、黒星。
そして、子供のほうですが・・・現地に残っていた3人の霊圧をはかる限り、
他の二人と非常に似通っていました。
おそらく、疾風と呼ばれていたのは二人の子供かと思われます」
「な・・・！」
その言葉に、初めに反応したのは浮竹だった。
「そんな・・・総隊長、あの二人は死んだはず・・・！」
彼には似合わぬ慌てきった素振りで、総隊長を見やる。
対照的に日番谷は、怪訝そうに眉をひそめただけだった。

その場全員の視線を受け、総隊長は静かに、ため息をついた。
そして、ゆっくりとした足取りで、ルキアと一護に歩み寄る。
何事か、と体を固くした二人の前に、その皺だらけの手のひらをか

ざした。
「・・・お主らがここに入ってきた時から、本当は既に、察しはついていたのじゃよ。
お主らからは、懐かしい霊圧が漂ってくる。
朽木ルキア、黒崎一護。お主ら、孤虹と刃を交えたか」
「・・・はい。『紅南風』と呼ばれる斬魂刀を使っていました」
「そうか。・・・元気、じゃったか」
そして、総隊長はくるりと、その場の全員に背を向けた。

その声音に、その場の全員が、意外そうな目を向ける。
死神が人間を殺し、死神にも刃を向けるという事態に対するには、あまりにも穏やかな声だった。
「総隊長。どこかの隊を出すべきです。十番隊でもいい」
日番谷が、一歩足を踏み出した。
しかし、それに対する総隊長の言葉は、短かった。
「ならぬ」
「なぜですか！このようなこと、放置しておくわけには・・・」
「捨て置けばよい」
思わぬ断言に、さすがの日番谷も一瞬、言葉をつぐんだ。

背を向けていた総隊長が、肩越しに日番谷を振り返った。
「・・・今、残っている隊長は何名じゃ」
「十人、です」
「そうじゃ。2千年もの年月をかけ、手元に残った隊長の数が、それじゃ」
「・・・総隊長」
浮竹が、もの言いたげに総隊長に歩み寄る。
「だが、十分に信頼できる十人じゃ。・・・もう、同士討ちでこれ以上、お主らを失いたくは無い」
その言葉が、つい数ヶ月前に起きた、藍染たちの反乱を指している

のは間違いなかった。
思えば、この反乱で最も心を痛めたのは、全員を束ねる立場にあった総隊長だったのかも知れなかった。
そうでなくとも、今この時に、これ以上戦力を分散させることはできそうにない。

「・・・アンタ達の都合と、あたしは関係ないわ」
黙っていた茜雫が口を開いたのは、その時だった。
決然とした足取りで、総隊長に歩み寄り、彼女は続けた。
「あたしは、絶対にアイツらを許せない。あたしは死神になるために、自分の命を絶った」
「ま！待て。お前、胸の傷は自分で・・・！」
「そうよ。あたしが自分で貫いたの。この斬魂刀『弥勒丸』でね」
茜雫はそう言い放つと、腰に差していた黄金色の錫杖を引き抜いた。
そして、一護を突き通すような鋭い瞳で見返した。
「死神代行の身分じゃ、自由にソウル・ソサエティに入れないでしょ。
あいつらを絶対に逃がしたくないの。そのためなら何だってできるわ」
「なんと・・・」
さすがの総隊長も、それには驚いた表情を向けた。

「今から、ここを発つわ」
それは、相手に是非を問う言い方ではない。
一方的な宣言だった。
言うことは言った、という表情で茜雫が踵を返す。それと同時に、総隊長が声を放った。
「精霊廷を出ること、まかりならぬ！」
「な・・・なんでよっ！」
茜雫が烈しい勢いで振り返った。

その肩を浮竹が、たしなめるように掴んだ。

「相手は元隊長。しかも、精霊廷初期の動乱を収めた、歴代最強とさえ言われた者たちじゃ。
お主がどう転ぼうと、勝てる相手ではない」
「強ければ、何をしてもいいの？弱かったら、ただ殺されるしかないの！？
そんなの間違ってる！」
「それが死神の道じゃ。この力の世界では、弱いことは罪でしかない。
納得できんなら、死神にはならぬことじゃ」
「・・・！」
後ろから見ていた一護の目には、ガタガタと震える茜雫の肩が見えていた。
その更に先に、歩み去る総隊長の背中が映り・・・そして、バタンと隊首室の扉が閉ざされた。

## 【9】「ごめんね。」

「茜雫！茜雫。起きなさい、いつまで寝てるの！！」
うとうとしている茜雫の耳に、母親の声が届いた。
――　うるさいな。
布団をかぶって、茜雫は外の音をシャットアウトしようとした。
階下の台所からは、タンタン、とリズムよく何かをみじん切りにする包丁の音が聞こえていた。

――　どうせ、朝ごはん作るの手伝えー、なんて言うんだから。
最近になって母親は、やたらと料理や洗濯、掃除を手伝え、なんて言うようになった。
反抗しまくってるのは、別に家事が嫌なからじゃない。本当は、好きなくらいだった。
でも、「女の子らしくしなさい」って言われるのが、とても嫌だった。
男とか女とか、大人とか子供とか。
何で、どれかの枠組に収まらなきゃいけないのか分からなかった。
どうせ収まらなきゃいけないなら、あたしは「あたしらしさ」という枠組を作りたい。

「茜雫！」
次に聞こえてきたのは、父親の野太い声。
同時に、パラリ、と新聞紙をめくる音が聞こえる。
――　父さんもキライだ。
新聞を読みながら、テレビをつけるのがお父さんの癖。
絶対どっちも同時に見れやしないのに、茜雫は思う。
だが、茜雫がチャンネルを変えようとすると、やたらと怒るのだ。
家ではえらそうにしてても、会社ではヘコヘコしてるくせに・・・

「あー、やだやだ」
布団の中で、茜雫は声を出した。
フツーの父親、母親。フツーの毎日。ものたりない、と思う。
「もぅ、あの子ったら」
ジャー、と水が流れる音が聞こえてくる。ややおいて、キュッ、と蛇口をひねる音。
――　うわー、上がってくる・・・
そう思った時には、たん、たん、と軽い足音が近づいてきて、茜雫はしぶしぶ目を開けた。

「・・・」
茜雫は、真っ暗な部屋の中で、しばらく呆然と目を見開いていた。
――　ここは・・・？
なれない畳の香り。障子から漏れる月明かり。知らない質感の布団。とっさに自分がどこにいるのか分からずに、茜雫は動けずにいた。
たん、たん。
夢の中で聞こえてきた足音が、どんどんと近づいてくる。
「あ・・・」
障子に映ったのは、廊下を通り抜けていく、着物姿の人影・・・死神。
そのまま、歩み去ってゆく影を、茜雫はただ、見つめることしかできなかった。
――　あたし・・・
茜雫は、誰にも起こされずに、身を起こした。
「あたし・・・は」

布団の上で半身を起こし、両手で頭を抱える。
――「茜雫っ！逃げろ！！」
なんでよ。
お父さん、あんなにカッコ悪くて、上司にも頭あがんなかったんでしょ？
なのに、なんであんな風に・・・勝てるはずがないって分かってて、格好つけるのよ？
――「茜雫に用なら、私が代わりにいきます！茜雫だけは・・・」
お母さん。
何にも・・・何にも自分が悪いわけじゃないのに。
迷いなくあたしの前に立った、お母さん。

普通で、よかったんだよ。
普通のヒトみたいに、悲鳴あげて、我先に逃げればよかったんだよ。
あんな絶体絶命の状況におかれて、あんなに特別になんて、ならなくて、よかったのに。
嗚咽が、押さえ込んでも押さえ込んでも、喉の奥から競りあがってくる。
たった、半年の記憶。
これからもずっと続いていくはずの未来は、半年で断ち切られた。
でも、それは、あたしのせいかもしれなくて。

「今・・・分かったよ」
茜雫は、つぶやいた。
「誰もが、一番大切なものは、一番隣にあるように、つくられてるんだね。
そんな神様の行為に、あたしたちは失うまで気づけない」
ばかだね。
それでも涙を流せば、押し殺し続けた思いも、少しずつ流れ出るようだった。

「ごめんね。最後まで、親不孝な娘で」
両親が命を賭けてまで護ってくれた命を、自ら捨てるなんて。
でも・・・あたしはもう、あたしの願いを止められない。

茜雫は、両手をしっかりと組み合わせ、額をその上から押し付けた。
そして、一心に集中する。
――　どこだ・・・！
これでも、霊圧を探る力には長けていた。
特に、間近で霊圧を感じた、あの「疾風」という少年の霊圧なら、
身に染み付くほど覚えている。
ふっ、と顔を上げた茜雫の瞳に、もう涙はなかった。

## 【10】「俺も一緒に行くぜ」

「・・・」
精霊廷の敷地内から流魂街へ一歩踏み出した瞬間、ほっとしてため息が出た。
そして、そのまま駆け出そうとした茜雫は、つかの間、背後の精霊廷を振り返る。
月光を浴びて、ボンヤリと白く浮かび出た精霊廷の姿は、ほぅ、とため息がでるほど美しい。

――　もう、ここに帰ってくることはないだろうな。
ここに来るまで、死神なんてほとんど会ったことはなかった。
その名の通り、石みたいに冷たくて、何考えてるか分からない奴らだと思っていた。
でも・・・
「意外と、人間ぽいヤツらじゃん」

驚いたり笑ったり、怒ったりもする。
総隊長と怒鳴りあいまでした自分に一室を用意し、見張りもつけず休ませてくれた。
特に・・・あの、黒崎一護、とかいう死神代行。
やっぱり、どこか「死」には慣れっこになっている死神たちの中で、自分達の死に動揺し、本気で怒ってくれた。
「・・・ありがとう」
さよなら、のつもりで。小さくつぶやいた。
そして、ぺこり、と精霊廷に向け、頭を下げた。

「何がだ」
「ひぇっ！？」

背後から聞こえた声に、茜雫は反射的に飛び上がった。
「あ・・・あんた！」
振り返れば、そこには右手を懐に突っ込んで、こっちを見ている一護がいた。
あまりの驚かれように、眉間に皺を寄せている。
怒っているように見えるが、単に困っているだけらしい。
「いつからいたのよ！」
「あー、いや。お前と話そうと思って部屋に向かったら、すぐそこでお前を見てよ」
「・・・何の用よ」
茜雫が睨みつけると、一護は気まずそうに目を逸らす。
あれ？
日中とは違う一護の態度に、茜雫はキョトンを目を見開いた。

「悪かったな、て思ってよ。親を殺されて、平気な子供なんていねーに決まってるのによ」
なのに、襟元を掴みまでして怒鳴ってしまったと思うと、自己嫌悪に駆られていた。
仇を取るために、自分で自分の胸を貫いた激情を思えば、平気どころではなかったのだ。
仇討ちを禁じられ、ガタガタと震えていた茜雫の細い肩を、思い出さずにはいられない。
「気にしちゃ、いないわよ」
茜雫の答えは、短かった。
「あたしだって、ここまでするとは、思わなかったんだから」
それは、一瞬の衝動。
でもあの瞬間、あたしは敵を討つためなら何だって出来た。
そして今も、不思議なくらい後悔する気は湧かなかった。

「勝てねーぞ。お前じゃ、あいつらには」

背中を向けた茜雫に、一歩踏み出した一護が呼びかける。
「邪魔するなら容赦しないわよ」
茜雫が、チラリと一瞥を投げる。その琥珀の瞳が、すぅ、と細められた。
「しねえよ」
ポン、とボールを投げ返すように。一護はあっけなく返した。
「その代わり、俺も一緒に行くぜ」

茜雫のことが、心配だった。
昼間戦った死神の実力は、ホンモノだ。
とにかく独りで行くのは止める。
もし止められないなら、自分もついていくと決めていた。
「死神は、この件は放置するって決めたのよ？あんた、罰受けるよ」
「受けねーよ」
「受けるわよ！」
「俺は、死神じゃねえ。お前と同じ、死神代行だ。だから味方になってやる」
「・・・」
茜雫は、まるで初めて見る人間に向けるような貌（かお）で、一護を見た。

「一護ォ」
「な・・・なんだよ」
初めて名前を呼ばれ、一護が微妙な表情を作る。
「あんた、いいヤツだね」
さらに微妙な表情をした一護を、笑い飛ばす。
久しぶりに、笑えた気がした。
「行くのはいいんだけどさ」
「あぁ？」
「まず、トイレ行きたいんだけど」
「あぁ！！？」

「悪い？」
力んだところを、足を出されてつんのめった。
そんな表情で一護は言葉を飲み込んだ。

「その辺でしてくるね」
何の衒いも躊躇いもなく、茜雫はきょろきょろとあたりを見回した。
「そ、その辺って、オマエなぁ」
「だって。精霊廷にトイレ借りに戻って捕まったりしたら、ただのバカじゃん。
5分で戻るから。ちょっと後ろ向いてて」
「しょ――――がねえなぁ」
一護はため息をつくと、くるりと後ろを向いた。
たたた、と茜雫が走ってゆく足音が聞こえる。

――　天然だな、アイツ・・・
天然とかいてバカと読む、そういうクチかもしれない。
「・・・」
3分経過。
「・・・」
10分経過。
一護は唐突にバッ！と振り返り、無人の流魂街を見回した。
「やられた！！」

## 【11】「思いっきり暴れてやるぜ」

「バカだな、お前」
「雁首そろえて同時に言うな。分かってるから」
探しに来た恋次とルキアに経緯を説明した一護は、二人に見つめられ、ため息をついた。

「おめーら、正規の死神だろ？アイツがどこ行ったか分かるか？」
「こんな時ばっかり正規呼ばわりすんじゃねー」
「いいから。分かるのかよ？」
「わかんねー」
「バカだな、お前」
「何だと！」
「子供みたいな言い争いはやめろ！」
うんざりした声音で、ルキアがにらみ合う一護と恋次の間に割ってはいった。

「しかし、勝ち目がないことが、死神の端くれなら分かるだろうに。なぜ独りで行ったのだ」
「・・・分かるような気がするぜ」
ルキアの声に、一護がしばらく黙ったあと、ポツリと呟いた。
あれほどに親の仇討ちを望みながら、一護の前では、平気なフリをしていた理由。
傷ついているとは思えない笑顔を返し、共に行くと言った一護を振り切った理由。

「誰も巻き込めない。これは自分の戦いだって思ってんじゃねえかな。
アイツは、自分が独りだって思ってる。だから独りで行った」

勝気な言動や、陽気な笑顔を見ていると忘れそうになるが。
半年以前の記憶がなく、半年の間に得た全てを失う辛さがどれほどのものか。
誰もたどり着いたことのない孤独に、ひとり佇む茜雫の背中だけが見えた気がした。

「しかし負ければ・・・」
「何かを失うのか？親もダチも命も失って、もうこれ以上、失うものなんかねぇだろ」
一護の、言うとおりだった。ルキアが、ぐっと言葉に詰まった。
「このままには、しておけねーな」
黙っていた恋次が、この期に及んでニヤッと笑った。
「溜まってたんだ。思いっきり暴れてやるぜ」
「とにかく、浮竹隊長に報告しよう。
隊長なら、無碍（むげ）に茜雫を見捨てはしないはずだ」

雨乾堂（うげんどう）。
病に伏せりがちな十三番隊隊長のために、特別にしつらえられた隊首室だ。
ざわざわといつも話し声が満ちている隊舎を抜け、長い渡り廊下を渡った先にある。
――　キレイな庭だな・・・
渡り廊下を歩きながら、一護は首を巡らし、庭の景色を眺めた。
コポコポと、どこかから水が沸く音が聞こえる。
庭の中央には大きな池があり、渡り廊下の下まで続いている。
月光を浴び、その下を通り抜けた大きな鯉の鱗が、キラッと金色に光った。

「・・・ん？」
月光に浮かび上がったおかしなシルエットに、一護は眉間に皺を寄せる。
「松の木・・・か？あれ」
形だけ見ると松のようだが、その枝葉が恐ろしく変な具合に、刈り込まれている。
目をつぶって鋏（ハサミ）を入れればこんな風になるのでは、と思うような形だ。
――　誰のイタズラだ？あんなことしてんのは・・・
「あぁ、あれは浮竹隊長の趣味でな。見事な盆栽だろう」
それを見やったルキアが、誇らしげに胸を張った。
「あ・・・あぁ」
動揺しつつ、一護と恋次が頷く。
――　どーゆーセンスだ。

「おぉ、朽木。阿散井くんに、一護くんまでいるのかい。入りなさい」
その時浮竹の声が聞こえ、一護と恋次は首をすくめた。
声は、雨乾堂の中から聞こえている。
「失礼します！」
障子の前に座ると、ルキアはスッと押し開けた。
そこは、２０畳ほどの、簡素な畳敷きの部屋だった。
廊下側には布団が敷かれ、そこに浮竹が丹前を羽織った姿で座っている。
布団の前の低めの机には、署名待ちの書類が積み上げられていた。
そして、逆側の窓は開け放たれ、日本庭園が見えていた。

こちらを振り向くでもなく、庭園にたたずむ人影に、ルキアは声を上げた。
「砕蜂隊長？」

「神崎茜雫は、脱走したのだろう」
庭に視線を向けたまま、砕蜂は抑揚がない声で言った。
「・・・はい」
「えぇ？脱走？」
頷いたルキアに、意外そうな声を返したのは浮竹だった。
砕蜂が呆れたように、ジロリと浮竹を振り返った。
「だから貴様は手ぬるいというのだ！当然予想される結果だろう」
「当然予想してたなら、なぜ放っておいたんだ。命に関わるかもしれないだろう」
「あの者が消されたところで、我々には何の損失もあるまい」
「・・・お前、冷たすぎだぞ」
「誉め言葉と取っておこう」

取り付く島もない砕蜂との会話を、浮竹はため息で切り上げる。
そして、布団をのけるとルキアたち3人に向き直った。
「いえ！隊長、寝ていてください。調子がよろしくないのでしょう？」
「大丈夫だよ」
オーバーなくらい心配して近寄ろうとするルキアに、浮竹は苦笑した。
「浮竹さん。茜雫がどこに行ったか分かるか？後を追いかける！」
一護が、浮竹ににじり寄った。

「彼女、やはり只者ではないようだね。霊圧を完全に消して移動している。
これでは霊圧を追う手段は使えないな」
既に霊圧を探っていたのだろう、軽く目を閉じて、浮竹は返した。
「じゃあ、他に手段は・・・」
「前もって手を打っていれば別だけどね。ちょっと、彼に話を聞いてみよう」

「・・・彼？」
恋次が首を傾げた時だった。
3人の背後を、ふわり、と小さな何かが舞った。
「地獄蝶？」
振り返ったルキアが、息を飲んだ。
「な、なんだこりゃ？」
一護も振り向くなり、ぎょっとした声を上げた。

フワフワと小さな羽根を動かして宙を舞っていたのは、黒い揚羽蝶。
死神がソウル・ソサエティと異界を行き来するときに使う、死神だけが使える遣い魔。
しかし、その姿は、胴体の中央からまっすぐに断ち切られていた。
体の左半分はどこにも見当たらず、右の翼だけを動かして宙に舞っている。

「・・・そういう手を取ったか、抜け目ないな。
さすが育ちが悪いだけのことはある」
「一言多いぞ、砕蜂」
浮竹がたしなめたその時、庭にもう一人の訪問者が現れた。

## 【12】「俺がおめーに一目ぼれしたお陰だろ」

いつの間に現れたのか、全く気配を感じなかった。
気づけば、庭に小柄な銀髪の少年が立ち、翡翠色の瞳をこちらに向けていた。
感情のないその瞳は、本当に宝石のように輝いて見えた。
ふわり。地獄蝶が彼の隣をすり抜けて舞う。

「冬獅郎！」
一護の言葉に何も返さず、日番谷は無言で縁側に歩み寄ると、腰を下ろした。
「その地獄蝶の、左半身は・・・？」
「神崎茜雫を追わせてる」
背中に担いでいる斬魂刀を縁側に置くと、日番谷は一護を振り返った。
「地獄蝶の右半身と左半身はつながっている。
左半身のある場所・・・神崎茜雫のいる場所に、瞬時に穿界門を開き、移動することが可能だ」
「お・・・おめー、アッタマいーな！」
「これくらい当然だ」
安堵の笑みを広げてドタドタと歩み寄った一護を、日番谷がけん制するように睨み上げた。

「じゃ、今から・・・」
「今はやめておけ、一護」
ルキアが口を挟んだ。
「何でだよ？」
「お前、今さっき茜雫を止めようとして、逃げられたばかりだろう。
今後を追ったところで、引き止められるのか？縛り付けておくとで

もいうなら別だが」
ルキアの大きな目に見返され、一護が言葉に詰まった。
「そもそも、その女はどこ行ったんだ？
この広いソウル・ソサエティを、ただ歩いて探すなんで絶対にムリだぜ」
恋次が正座を崩し、宙を舞う地獄蝶の半身を眺めやった。
ふわふわと舞うそれは、砕蜂が中空にかざした人差し指に止まった。
「・・・どうやら、そこまで馬鹿ではないらしいな、神崎茜雫は。
おそらく縛道の四十、血導貫でも使っているのか？敵の場所は補足しているらしいな。
足取りに迷いがないぞ」
瞳を閉じ、砕蜂は独り言のようにつぶやいた。
どうやら、地獄蝶の気配を通し、茜雫の行く手を追うことができるらしい。

「・・・分かったよ、今は動けねーんだな」
一護は無念そうにつぶやくと、その場に胡坐をかいた。
「ひとつ教えてくれ。孤虹と黒星（ヘイシン）って奴、元隊長、なんだろ？どんな奴らなんだ」
一護の視線を受け、日番谷が砕蜂に目をやる。
「私を見るんじゃない。隊の所属時期がかぶっていたのは、浮竹だけだ」
「まぁ、僕や京楽が、まだまだ平隊士だった時代だけどね」
懐かしげな口調で、浮竹が雨が降り続く庭園を見やった。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊

時は、今より八百年前。
現世、ソウル・ソサエティ、虚圏など異世界の境界となる「断界」が今よりも弱く、その狭間があいまいだった時代である。
自然、それぞれの世界間の小競り合いは頻発し、戦争に発展することも少なくはない。
今よりも戦乱に満ちた、群雄割拠の時代であった。

「一番隊隊長っ！孤虹隊長っ！！どちらにおいでですか？」
大声と同時に、バタバタとこちらへ走ってくる足音が聞こえる。
「おーい。返事くらいしてやれよ、孤虹。
一番隊にお呼びがかかるなんて、どっかの隊が絶滅しかかってるとか、ロクな用事じゃねえぜ、きっと」

一番隊隊首室。
孤虹の自室で、布団に自堕落に寝そべった男が、煙管をふぅー、と吹きながら言った。
黒髪を坊主頭に刈り込んだ、猟師のように日焼けした男だった。
2メートルはある巨体で、裸の上半身には、猫科の動物を思わせるしなやかな筋肉が隆起していた。
「分かってるよ、うるさいねぇ。今準備中だよ」
返した孤虹は、鏡台の前に座り込み、紅筆を手に鏡を覗き込んでいた。
鮮やかな朱が、肉感的な唇に刷かれてゆく。
艶やかな赤の襦袢をしどけなく纏っただけの姿。背中まで抜いた後ろ襟がなまめかしい。

「戦いに化粧なんていらねーよ、ったく・・・」
「何言ってんのさ。死んだらどーすんの。すっぴんで死ぬなんて絶対にイヤ」

「死んだら、後のことなんてどーだっていいだろうが。大体、おめーが死ぬわきゃねえ」
くぁ、と黒星がアクビをすると、起き上がって動物のように伸びをした。

「生きてるんだから、そのうち死ぬに決まってるさ」
他人事のように言い捨てると、紅筆をおいて立ち上がった。
そして黒を基調にした着物に袖を通す。袴を履くと、きゅっと帯を結んだ。
その孤虹の細腰を、伸びてきた黒星の腕が引き戻す。
なんの抵抗も示さず、その体が黒星の胸に収まったのを見て、黒星は満足げに笑った。

「お前を、こんな風に好きな様に出来るなんて。出会った時は夢にも思わなかったぜ」
「敵同士だったからね。もし戦ってたら、いいトコ相打ちだったよ。『鬼殺しの黒星』さん」
「俺がおめーに一目ぼれしたお陰だろ」
「まさか、虚圏の幹部が、一目ぼれを理由に護廷十三隊隊長に納まるなんて。
お釈迦様でも予想しなかっただろうねェ」
「今や、十一番隊隊長、二代目『剣八』だぜ。笑っちまう」
「自分のことだろ」
その時、大きくなってきていた足音が、孤虹の自室の前で止まった。
余程急いでいたのだろう、なんの断りもなしにパーン、と障子を開け放った。

「孤虹隊長！申し訳ありません、至急、六番隊の救出に向かってください！
このままでは後１０分もしないうちに全滅・・・うっ？」

廊下に指をついた六番隊十席は、目を皿のように開けて目の前の風景を見た。
まさに目の前で、一番隊隊長と十一番隊隊長が濃厚な接吻を交わしていたのだから、無理はない。
黒星の胸に背中を預け、頤(おとがい)を上げて唇を交わす孤虹の表情が、あまりに恍惚としていて・・・
十席の顔全体が真っ赤に染まった。

「あンた」
観られてからも、たっぷり１０秒は口付けを交わしていた孤虹の瞳が、チラリと十席を射た。
そして、ゆらりと立ち上がると、十席に歩み寄る。
「次、女の部屋をいきなり開けるような無粋なマネしたら・・・殺すよ」
「は・・・はっ！申し訳ありません！しかし、仲間がこのままでは！」
「判ってるよ」
ツイ、と伸ばされた孤虹の指が、伏せられた十席の顎を上げさせた。
「後１０分でたどり着けるのは、時越(じえつ)の孤虹、と呼ばれた貴女しかいません。
お願いします！朽木隊長と仲間を助けてください！」

「・・・１０分」
すっ、と視線を逸らし、孤虹が考え込むように小首をかしげる。
「そんだけもいらないよ」
言うと同時に、ふっ・・・とその姿が影のように掻き消えた。
「えっ？」
あっけに取られた表情で、十席があたりを見回す。
「あーあー、いいトコ邪魔しやがってよ」
死覇装の上着を引き寄せながら、黒星が立ち上がった。

「黒星隊長！貴方も・・・」
「女だけ働かしてたら、ヒモって呼ばれちまう」
巨大な刀を肩に担ぎ、黒星はニヤリと笑った。

## 【13】「この乱世の落とし子のようなものだな」

「朽木隊長っ！隊長、既に取り囲まれていますっ！逃げ道はありません！」
白い髪をきゅっと束ねた、色白の若者が、隊首羽織の背中に声をかけた。
「浮竹か」
振り向いたのは六番隊隊長・朽木銀嶺。
漆黒の髪を背中まで伸ばした、怜悧な瞳の男である。
自分達を取り巻く破面の群れを見渡し・・・スッと目を閉じた。

「浮竹、京楽。お前達は他の若者達を連れて、戦線から離脱しろ。血路は私が開く」
そして、手にした斬魂刀を、ゆっくりと破面たちに向けた。
斬魂刀は血でべっとりと汚れ、白の隊首羽織も、泥や血で汚れている。
「そんな・・・隊長を残して、どうして私達が去れましょう！」

――　こんな・・・はずでは！
叫びながらも、浮竹は唇をかみ締めた。
浮竹も、隣に立つ京楽も、六番隊に配属されて初めの数年を越え、席官として頭角を現してきた頃だった。
ひとつでも戦功を挙げ、ひとつでも席次を上げる。それが楽しくて仕方なかった。
そして不幸中の幸いとでも言うべきか、この戦乱の世では、戦功を挙げることはさほど難しくはない。

「これは・・・僕らの、過ちのようだね」
隣で刃を構えた京楽の声も、彼には珍しく疲弊している。

警備の隙を突き、精霊廷に攻め込もうとしていた破面たちの動向を掴んだまではよかった。
しかし、面白いように戦況がこちらへ好転し、破面が退却するのを見て、勝ち誇っていた。
――　甘く見るな、戦況をよく見ろ！
隊長の命令を、甘く見たのが敗因だった。
結果、六番隊全てを、虚圏近くまで近づけ・・・結果、破面に囲まれることになるとは。

「隊長。これは僕らが招いたこと。ただの意地かもしれませんが、最後まで戦います」
迎え撃つ敵の数は、見る間に増えてきている。
六番隊の生き残りは、当初１００名はいたのが、２０名近くまで減らされている。
そして、敵の数は、今や１００は下るまい。
「分を弁(わきま)えて物を申せ」
対する、朽木の返答は短かった。
「お前らのような若輩者が、意地などとは片腹痛い。
そういう台詞は、これから百年、二百年と戦歴を積み重ねた後に口にするが良い」
「しかし・・・隊長！このままでは隊長のお命も・・・」
「例え敵に虐殺されようとも。背を向けることはできぬ。
私は四大貴族が一、朽木家当主なのだ」

その全身から、疲弊しているとは思えぬ霊圧がほとばしり、浮竹と京楽が飛びのく。
「全く、貴方は・・・」
京楽が、顔をしかめて・・・泣きそうな顔で呟いた。
意地など片腹痛いといいながら。
誰よりも誇りを大切にしているのは、貴方ではないか。そう言いた

かった。
「残るぞ、浮竹」
京楽の言葉に、浮竹は力強く一度、頷いた。
「お前達・・・」
「貴方の隊に最初に配属されたこと、心より嬉しく思いますよ、朽木隊長」
だからこそ。最後まで誇りのために戦い抜く。そう思った。

「山本総隊長！」
その時精霊廷では、六番隊の十席が、山本総隊長の元を訪れたところだった。
「おぉ、六番隊十席か。孤虹と黒星（ヘイシン）は、敵地に向かったかな」
緊急事態とは思えぬ、ゆったりとした素振りで、総隊長はゆっくりと振り返る。
「・・・は。しかし・・・」
総隊長自室前で三つ指を突いた十席は、そのまま深く頭を下げた。
それを見下ろしていた総隊長だが、ほっほ、と軽く笑った。
「一緒におっただろう、あの二人は」
「はぁ。もう昼下がりだと言うのに、寝起きのご様子で・・・
お言葉ですが総隊長、隊長ともあろう方々が、あのように昼間から寝たり酒を飲んだり、睦・・・みあったりというのは」

「ふむ。まぁ、黒星にこちらに従えといっても無茶な話。元々敵だからのぅ。
今でも、精霊廷の命令などひとつも聞きはせぬ。あやつが従うのはただ一人、孤虹の言葉だけじゃ」
「し、しかし！そのような状態では・・・！」
「そのような状態でも仕方ないのじゃよ。黒星は、強い。

この戦乱の世で、どうしても必要なのじゃ。二代目『剣八』としてな」
物言いたげな十席の表情を、総隊長は見下ろす。
――　まぁ、仕方ないのぅ。
稀代の反逆児と呼ばれた黒星。時空をも越えると噂された、時越の孤虹。
しかし、その二人の雷名を覆すほど・・・二人の私生活は、破壊的なのだ。
しばらく置いて、総隊長は再び口を開いた。
「・・・十席よ。
孤虹の代になるまで一度も、一番隊隊長の座を、儂が他の者に譲ったことがなかったのは知っておるな」
「はい」
「伊達や酔狂で、孤虹に『一番隊隊長』を任せている訳ではない。
まぁ、見ておれ」

「行くぞ京楽！」
「はいよ」
破面が、ニヤニヤと笑いながら、少しずつ間をつめるのを見て、二人は同時に斬魂刀を構えた。
「来るぞ！」
鋭く朽木が叫ぶと同時に、雪崩のように破面たちが殺到し、生き残り達が死を覚悟した――
その時。
「こんにちはァ♪」
ひた、と白魚のような細い指が、浮竹と京楽の肩に置かれる。

「な・・・！」
粟を食って二人が振り向いたその先に・・・にんまりと微笑む紅色の唇があった。
「閃け・・・紅南風」
微笑を崩さぬまま、その唇が言葉をつむぐ。
それと同時に、殺到していた破面達の最前線の十数人が、同時に体から血を吹いた。
「お下がりなさいな。朽木のボーヤ」
「侮辱するか」
スイ、と先に立つと同時に、匂い立つような香水の香りが漂う。
「例え自分の誇りを護ろうと、精霊廷を護れなきゃ無意味だろ。だからまだ、青二才だって言うんだよ」

――　なんだ、あの刀・・・？
浮竹は、先を行く孤虹の後姿を見て、目を疑った。
その左手にだらりと下げているのは斬魂刀に見えるが・・・その柄の先に、何度見ても刃がないのだ。
――　ではどうやって、あれほどの敵を瞬時に切り裂いたのだ？

「この女（アマ）！」
一旦引いた破面たちも、その刀を見て勢いを盛り返す。
ひたひたと澱みない歩調で進んでくる孤虹に向かって、我先に刃を振り下ろした。
「俺の女に、アマたぁなんだ、コラァ！」
刃が頭に届く、直前。孤虹の前に割り込むように、大柄な人影が割り込んだ。
それと同時に、その拳が一閃し、
「うっ！」
浮竹の後ろにいた席官の一人が、思わずうめいた。
その拳を食らった破面の胴体が、いとも簡単に上下に引きちぎれた

からである。
文字通り血の雨を降らせたその男は、声もなく倒れ伏した破面の向こうで、ゆらりと立ち上がった。
顔を上げたその姿を見て、浮竹も息を飲んだ。
「十一番隊隊長・・・じゃない、破面・・？」
その顔は間違いなく、十一番隊隊長、二代目剣八こと黒星。
しかし、その顔の半分が、破面そっくりの仮面で覆われていた。
「黒星！この裏切り者が！」
破面たちが怒声を浴びせつつも、慌てた素振りで背後に飛びのいた。
知っているのだ。
黒星が、たった一人でこの戦況を覆せるほどに、強いということを。
「裏切り者、だァ？しらねーな」
拳を血でぬらした黒星が、野卑な表情でにやりと笑った。
「てめーら破面はどうかしらねえが、俺は自分を裏切った覚えはねえ」

それから、小一時間後。
あたりは、不気味なほどの静寂に包まれていた。
「・・・二人とも、この乱世の落とし子のようなものだな」
その場の岩に腰を下ろした朽木が、ぽつりと言った。
砂煙の向こうから、二人の声が聞こえた。
「黒星！アンタ、二度とアタシの近くで戦わないでほしいね。血が着物に散るんだよ」
「うるせーよ。着物に着くのがいやなら裸で戦え！裸で」
軽口を叩きながら現れた二人の姿に、生き残ったものたちは口をあんぐりと開けた。

孤虹は、戦いに現れた時のまま。艶やかな着物には、血の一滴も飛んでいない。
そして、対照的に黒星の全身は、血を頭からかぶったかのように濡れていた。
浮竹と京楽の耳には、その時、朽木が残した言葉が耳から離れなかった。
「更なる戦いのために戦う。
・・・あれが、万が一にも敵だったらと思うと、ぞっとするがな」

## 【14】『裏切りには必ず理由がある』

「・・・つまり」
話に聞き入っていた一護が、浮竹が話し終わった後、口を開いた。
「つまり、その二人は、浮竹さんと京楽さんの命の恩人だってことだな？」
「貴様は何を聞いておるのだ！」
間髪いれず、ルキアがそのオレンジ色の頭に手刀を落とした。
「敵に回ったら大変だと仰っているのだ！というか、もう刃を交わしただろう」

「呑気な奴だな」
腹も立たないのか、呆れた口調で砕蜂が一護を見やり・・・その隣の日番谷に視線を泳がせた。
「貴様は若輩者だからな、全く知らなかったか」
「俺、天才には興味ねぇし。そんな噂も聞いたかもしれねえけど、覚えてねえよ」
「天才は天才に興味はない、とでも言う気ではないだろうな」
「まーな」
何のためらいもなく断じられ、砕蜂がさすがに凍りついた。

「貴様、前から思っていたが・・・その腐った性根、叩きなおしてやろうか？」
「腹立ったか？いい気味だ」
「・・・あのなぁ」
浮竹が、熱が上がったかのように額を押さえた。
「黒星と孤虹並みに仲良くなるのは問題だけど。せめて会話が続くくらい、仲良くしないか？
俺が言いたいのは結局、あの二人は、現存のどの隊長よりも強い、

ということだよ」

「・・・それ、間違いないんスか？」
恋次が眉間の皺を深めて言った。
そして、浮竹、日番谷、砕蜂を順番にチラリと見る。
3人が3人とも、副隊長格から見ても、現実とは思いがたいほどの力を持っているはずだ。
この3人を越えるような「元隊長」など、ますます現実味がなかった。

「あの頃は、今よりも圧倒的に戦いが多かったんだ。
常にどこかと戦争をしている状態でね。
やはり、今の安寧の時代の隊長とは・・・違う」
「安寧って、今がか？・・・突っ込まずにはいられねぇぜ」
思わず一護が口に出した。
一護が知っている精霊廷は、ここ数ヶ月に、立て続けに大きな事件に見舞われている。

「まぁ、最近の治安の悪化具合は、当時を思わせるものがあるがね。
あれくらいの力が、これからは求められるのかもしれないな」
「山本総隊長はどうなのです？彼は最強の死神、のはずでは」
ルキアの言葉に、浮竹は視線を伏せた。
「確かに。しかし、山本総隊長の力も、往年に比べると落ちている。
もしもあの二人の力が衰えていなかったら・・・一対一でも、山本総隊長は分が悪いだろうな」
「けどよ、ルキア」
一護が、眉間の皺を深めてルキアを見やった。
「お前、孤虹と黒星（ヘイシン）は『死んだ』って言っただろ？虚との戦いで殺されたって。
それは間違いだったってことなのか？」

「それは・・・」

「今より、七百五十年前。
俺と京楽が初めて二人の戦いを見て、わずか５０年も経たないうちに、二人は戦いで命を落としたと聞かされた。
まもなく、一番隊隊長には山本総隊長自らが就任され、十一番隊隊長はしばらく空席となった」
口をつぐんだルキアの代わりに、浮竹が歯切れ悪く言葉を挟んだ。
そして、苦々しい笑みを浮かべる。
「ただ、隊長になってから判ったことだが、隊長しか知らされぬ事実は多いんだ」

「・・・そーかよ」
これ以上のことは聞き出せないな、と一護は話を聞きながら思った。
時代は七百年前だの八百年前だのいうレベルだ。
蒸し返そうにも、正確な事実を知る当時の隊長の証言を取るなど、きわめて難しそうだった。
日番谷が軽く肩をすくめた。
「本人達に聞けばいいだろ。
理由があって神崎茜雫を襲ったなら、絶対すぐにまた、奴らは茜雫の元に現れる」
「それはダメだよ。何のために総隊長が、捨て置け、て言ったと思うんだ。
手を出してはだめだ」

その理由は、今ならはっきりとわかる。
孤虹と黒星の実力を考えれば、下手にかかれば返り討ちに遭うのは間違いない。
日番谷と砕蜂は、チラリ、と互いに鋭い流し目を送った。
「そうだな。俺は隊舎に戻って、残業の続きでもするか」

「私も明日早いのでな。寝る」
それっきり目を合わせることなく、くるりと踵を返す。
――　怪しすぎる・・・
一護とルキアは、それを見て顔を見合わせた。
浮竹が、半身を中途半端に起こして、二人を見送る。
「そんな風にあっさり退かれると、なんか逆に怖いんだが・・・おーい？」
「心配すんなよ浮竹さん。大丈夫だから」
何事かを察した一護とルキアも、日番谷と砕蜂の後を追った。
「心配って何を！ちょっと！」
「お休みなさいませ、浮竹隊長！」
「おーい」
にこやかな笑みを残し、ルキアはスッと障子を閉めた。

「おい、待てよ！冬獅郎、砕蜂！」
一護は、慌てて先を行く二人に呼びかける。
早く呼び止めなければ、ふっと瞬歩で消えてしまいそうだ。
「日番谷『隊長』だ！」
「砕蜂『隊長』と呼べ！」
図らずも同時に返した二人は、互いにフン！と横を向く。
「このままにしておく気、ねぇよな？」
さっき二人の態度から感じた直感を、ぶつけてみる。
思ったとおり、二人は当然、とでも言いたそうな表情で頷いた。
「命数の尽きていない人間を殺すなんて、死神にとっては絶対の禁

忌。
それを犯してまで、死神を裏切る理由が知りてぇんだ」
「相変わらず生ぬるいことをいう奴だ。裏切りは裏切り。
禁忌を犯す者の言い分など必要ない」
ただ、意見は真逆。

「気に入らない奴は抹消する。それじゃガキと変わらねーよ」
「なに？」
外見が子供の日番谷の発言に、砕蜂の表情が引きつった。
「俺には分かる。『裏切りには必ずそれだけの理由がある』ことが」
そして、顔をツイと通りのほうに背けると、一同に背中を向けて歩き出した。
「貴様・・・」
その背を追いかけて何か言おうとした砕蜂の肩を、一護が捕まえた。
日番谷の言う「裏切り」が、草冠のことであると、分かったから。
そして、彼を追い詰めたのが日番谷自身という事実に、未だ傷ついていることも。

――　裏切りには、理由がある・・・か。
だが、どんな理由があったところで、既に人が殺されてしまった以上、取り返しがつかぬ。
ルキアは、顔を上げて3人を見比べる。
「茜雫は仇を討ちたい。一護は茜雫を護りたい。
そして、お二人にも孤虹、黒星と会う理由がある。そういうことですね」
「もちろんだ！」
一護が即座に返し、日番谷と砕蜂も頷く。

「それでは、互いに手を結び合えるのではと思います。
・・・茜雫の霊圧を感じしだい、すぐ日番谷隊長の元に集いましょ

う。
日番谷隊長、そのときは穿界門を開いていただけますか」
「・・・判った。お前は十一番隊にでも行ってろ、黒崎」
「あぁ？なんで」
「更木に言ってみるんだな。最強の『剣八』はお前じゃねぇらしいって」
「そ・・・」
そんなことしたら。ムダに血が流れるじゃないか。
一護は日番谷のいつになく黒い顔を見て絶句する。

「馬鹿とハサミは使いようだ」
肩をすくめた砕蜂を見て、やはり隊長同士は仲が悪い、と確信する一護だった。
ただし、似たもの同士ではあるようだ。
――　孤虹と黒星、か。
どちらも、確かにそこにあっても、捉えられぬものの象徴のようだ。
ルキアは、瞳を雨降りしきる、夜空に投じた。

## 【15】「俺は、草冠宗次郎だ」

通り雨がさぁっと、古びた街を通り抜けてゆく。
行き交う唐傘が、灰色の町並みに花開いてゆく。
「いらっしゃーい！」
ガララ、と戸が開くよりも先に、店の中から威勢のよい声が聞こえた。
「宮越蕎麦」と墨書きで書かれた暖簾（のれん）をくぐって現れた男に、店奥にいた女将は笑顔を向けた。
「この辺じゃ見ない、いい男だねぇ。ゆっくりして行きなよ」

さっぱりとした群青色の単衣に身を包み、黒の袴を履いたその男は、二十代初めほどに見えた。
背中まである髪をひとつにまとめた姿は中々に凛々しく、美男といってもいい面立ちだった。
その中で目をひくのは、菫色（スミレ）の瞳。
切れ長の双眸に潜む赤い光は、どこか妖しげに見えた。
「笊蕎麦をひとつ。それと冷たい茶を」
それだけ言うと、窓際の席にどさりと腰を落ち着けた。

「あ！あたし、瑠璃（るり）といいます！あなたは？」
五分後、蕎麦を持って現れたのは、まだ十代初めに見える、髪を三つ編みにした少女だった。
「・・・この店では、客はまず自己紹介をするのか？」
「しません！でもあなた、いい男だから」
「・・・男を見る目がないな。俺は、草冠宗次郎だ」
瑠璃と名乗った娘を見る目は、やや皮肉めいてはいるが、冷たくはなかった。

「あンた、その腰の刀どうしたんだい？見たところ、あんまり強そうにも見えないけどねぇ。
そんな物騒なもん持ち歩いてたら、絡まれちまうよ」
店の奥にいた女将に大声で呼びかけられ、草冠は苦笑した。
「あら、本当よぅ。そんな骨董市で買ったような、古い刀持っちゃって」
瑠璃、と名乗った娘が、無遠慮に草冠が机に立てかけた刀を覗き込んだ。
古びたその刀は、確かに値打ちものにはとても見えない。

「確かに。この街は治安が悪そうだね。というよりも、余所者が大量に流れ込んでるようだ」
「おや。判るのかい」
「まず、言葉遣いが違う。服装も厚着や薄着さまざま。一目で分かるさ。戦いでもあるのか？物騒だな」
「セーレーテイに復讐するんだって」
ぶっ、と草冠が、口に運んだ蕎麦を噴出した。

「あらぁお兄さん、男っぷりが台無しだよ。どーかしたのかい」
「いや、どこかで聞き覚えがある台詞だと思ってな」
瑠璃が差し出した布巾で口を拭きながら、草冠が返した。
――　流行ってるのか・・・？
ただ、流魂街出身の草冠には分かる。
流魂街の住人にとって、精霊廷の死神は、雲の上の存在なのだ。
歯向かおうなどと、そう簡単に思いつくはずが無かった。

「まぁ、あんたが驚くのも無理ないさ。普通無理だもんね」
単純に驚いたと思ったらしい。女将が大声で返した。
「でもね。カリスマが来てるらしいよ、この街に」
「カリスマだか何だか知らないが、死神と一般人じゃ相手になるは

ずがない」
死神と流魂街の住人は、牧羊犬と羊の群れに似ている。
牧羊犬は群れを護ってくれるが、一歩でも群れから離れたり、秩序を乱すと噛み付くのだ。

「ところが、相手になりそうだって、みんな言ってるのよ」
瑠璃が、草冠の座る机に手を置いて言った。
「だって、そのカリスマ呼ばわりされてる人たち、死神の『隊長』だったって言うのよ？
並みの死神なんて相手にならないって皆期待して、それで人が集って・・・」
「バカバカしい・・・」
草冠は、そこまで聞くとため息をつき、茶をズッとすすった。
「隊長っていうのは、死神が何千人といる中、１０人ちょっとしかいないんだ。
元隊長が、流魂街にそうゴロゴロしているわけがない」

――　しかし、それだけの噂でこれほど集るとは、精霊廷は随分恨まれてるな。
草冠は、茶を口にしながら、窓の外を見やった。
ゴロツキだのヤクザだのいう言葉が似合う連中が、ぞろぞろと街を闊歩している。
ほとんどが烏合の衆だが、中には、そこそこの霊圧を持つ者も混ざっていそうだった。
――　徒労だな。
空になったコップをテーブルに置こうとした時だった。
「何？」
鋭い声と共に、窓の外を凝視する。
「な、なになに？」
瑠璃も草冠の肩越しに外を覗き込むが、人が行き交うだけで、おか

しなものは見えない。
しかし、草冠は、中途半端に体の動きを止めたまま、空中のある一角に見入っていた。

――　なんだ、あれは？
人々の頭の上を、黒い小さな影がひとつ、舞っていた。
その姿をよく見ると・・・それは、体が半分しかない、黒い蝶だったのだ。
――　あれは、地獄蝶？
そして、蝶の周辺にかすかに漂う気配は。
「冬獅郎・・・」
ガタッ、と草冠は椅子から立ち上がった。
「ね、ねぇ、どうしたの急に！」
「悪いな、急用だ！」
草冠はそれだけ言うと、椅子から立ち上がり、足早に店から出ていった。
「な、なによ、いきなり・・・」
バタン、と戸が閉められたのを見て、瑠璃が拍子抜けしたように言葉を漏らした。

「おい」
「ひゃあっ！！」
突然背後からかけられた声に、瑠璃は跳ね上がる。
慌てて振り返ったが、視線の先には誰もいない。
「なーんだ、誰も居ないじゃ・・・」
「こっちだ」
不機嫌そのものの声に、瑠璃は改めて視線を下におろす。
「・・・アンタ、誰？いつここに・・・」
さっきまでは、誰もいなかったはずの、瑠璃の背後の席。

そこに、見慣れない銀髪の少年が立っていた。
まだ十歳にも満たないように見えるのに、地味すぎる黒尽くめの単衣に袴。
ご丁寧に羽織までは折っている。
――　いいトコの坊ちゃんかしら・・・小さすぎて入ってくるのに気がつかなかった？
思ったことを口に出さなかったのは幸いだろう。
日番谷冬獅郎は、その大きな鋭い瞳を瑠璃に向けた。
「ここは、流魂街のどこになる？」
「北流魂街２４番区、驟雨（しゅうう）だよ。立派な業物（わざもの）下げてるじゃないか」
女将の声に、瑠璃が見やると・・・確かに、値が張りそうな立派な刀を腰に下げていた。
「アンタには長すぎない・・・？さっきのボロ刀持ってた人のほうが似合いそう」
「ボンクラには、この氷輪丸（かたな）は使えねーよ」
日番谷は言い捨てると、
「邪魔したな」
そのまま、瑠璃の脇をすり抜けて、店から出ようとした。

その鼻先に、グイ、と女将が店のメニューを突きつけた。
「何だ？」
「何だじゃないよ、ここは店だよ。入ったからには、注文してくんだろうね？」
「入って来てねえよ・・・」
「なんだって？」
「イヤ」
日番谷はため息をつきながら首を振った。
――　穿界門通って一瞬で来たなんて言ったって、通じるわけねえし。

だからといって、こんなところで蕎麦など食ってる場合じゃない。
メニューを押しのけようとした時だった。
「っきゃぁ！」
瑠璃が頓狂な声で叫ぶと同時に、ダン！！と音が響いた。
「ン？」
日番谷が振り返った、窓枠のところに、手が見えた。
男にしては小さく、女にしては骨ばった指が、窓枠からこちらにはみ出してきている。
黒い髪が、窓の向こうにのぞいていた。
「やだねー、行き倒れかい？」
カウンターの向こうから歩いてきた女将が、日番谷の後ろに立ってため息をつく。
「め、めし・・・」
少年の声が、窓の向こうから聞こえた。

## 【16】「俺、颯っていうんだ」

「3日ぶりに食べたゴハン、最高だよ！」
うどんの中に揚げ餅、海老天、卵に焼肉をぶっかけるという凶行を犯した少年は、笑顔で箸を手にしている。
向かいに座る日番谷の笊蕎麦を見て、目を丸くした。
「食べないの？それだけ？」
「いーんだよ。お前見てたら、腹いっぱいになってきた・・・」
日番谷はウンザリした声音で返した。
――　まぁ、流魂街の住人を助けるのが死神の仕事だしな・・・一応、これも人助けか。

「食べないと、背のびないよ」
「うるせ！」
噛みつかんばかりの声で返しても、少年はニコニコしたままだ。
ウェーブがかった茶色の、柔らかそうな髪。髪よりは濃い色の瞳。
犬を思わせるのは、その容貌だけではない。
「こんなの食べさせてくれるなんて、君最高にいい人だね！」
ぶんぶん振った尻尾の幻覚が見えそうなくらい、人懐こい表情。
――　警戒心ってもんがねーのか？
こういうタイプは、治安が悪いエリアが多い流魂街には珍しい。

「ね、ね！君、名前何って言うの？俺、颯（はやて）っていうんだ！」
「・・・日番谷冬獅郎だ」
「かっこいい名前だねー！」
「いいから、黙って食え。麺延びるぞ」
満面の笑みにめまいを感じそうになりながら、日番谷が麺を指差した。

「うん、そーだね！」
そのまま、麺に没頭した颯少年を、日番谷は半ば唖然としながら見つめた。

死神といっても木石ではない、笑うことも怒ることもある。
しかし、このような「天真爛漫な笑み」は、やちるのような例外を除けば、滅多に見るもんじゃない。
――　金払ったら、さっさと別れるか。
自分とはあくまで人種が違いすぎる。
大体、と日番谷は考えを進める。
そもそも、そんな用事で日番谷がここを訪れた訳ではないのだ。
ないの、だが。
「お前、身なりからしたら、飯に困るほどほど貧乏でもねーだろ？」
口をついて出たのは、我ながらお節介な質問だった。

「うん、そーなんだけど」
麺を口いっぱいに頬張りながら、颯は返した。
「母さん怒らせちゃって。ご飯抜きよ！って言われて、小遣いもらってなかったから」
母さん？
聞き返そうと思ったが、止めておいた。
現世で死んだ人間が、バラバラにたどり着く流魂街では、共に暮らすのは赤の他人だ。
流魂街出身の日番谷自身も、「祖母」と呼び一緒に暮らしていた人間に血の繋がりはなかった。
死神や、流魂街住人でも霊圧の高いものは例外的に子をなすが、目の前のこの少年からは、霊圧はカケラも感じない。

「これ、払っとけ。残りは取っとけ」
日番谷は、自分の分を食べ終わると、懐から取り出した金をチャリ

ン、と放り出した。
その金額は、二人の代金を考えても余りある。数日分の食費にはなるくらいに。
この少年が何をやらかしたのか知らないが、飢えさせるのも気の毒だ。

そのまま立ち去ろうとした日番谷の袖を、颯が掴んだ。
「なんだよ？」
「行かないでよ、せっかく友達ができたと思ったのに！」
「と・・・友達？」
日番谷は、自分より頭一つ分ほど大きな少年を見下ろした。
「僕ら友達でしょ？冬獅郎」
犬のような円らな瞳に見上げられ、くらり、とまた眩暈がした。
１８０度、全くもって、恐るべき程に、日番谷とは別人種だ。

「・・・あのなぁ。俺は、やらなきゃいけないことがあるんだ」
「手伝うよ！僕この町に詳しいし、力になれるよ、きっと」
町に詳しい、のところで、日番谷は颯と視線を合わせた。
「・・・草冠宗次郎って知ってるか？」
「聞いたことない・・・」
「だろうな」
日番谷は頭を掻いた。

草冠は流れ者だ。
この町に来ていることが確かだとしても、町の者に名前を知られているはずが無い。
「でも、調べて・・・」
「いや、いいんだ。ありがとな」
日番谷は、何か言い募ろうとした颯の眼前に手のひらをかざした。
「危ねぇことになるかも知れねぇんだ。お前は連れていけねぇよ。

じゃぁな」
「え・・・ちょっと！」
敢えて返事を聞かず、日番谷は大股で出口に向かい、扉から姿を消した。

パシン、と閉まった戸を見て、皿を店の奥で洗っていた瑠璃がため息をついた。
「全く、宗次郎さんといい、いきなり出て行っちゃうんだから・・・」
その声に、中腰になっていた颯はハッと振り向く。
「ねえ、今『宗次郎』って言った・・・？苗字は？」
「草冠宗次郎。さっきまでこの店に居た人よ」
「・・・大変だ」
颯は慌てて立ち上がり、金も机に置いたまま、扉を開けて外に飛び出した。
「冬獅郎！」
しかし、颯に向けられたのは、訝しげな視線ばかり。
「あれ？出て行ったの、１０秒くらい前なのに・・・」
店の前は一本道にも関わらず、いくら回りを見回しても、日番谷の姿はどこにもなかった。

時刻は、日番谷が蕎麦屋に現れる、３０分前。
日番谷は、精霊廷の十番隊隊舎で、いつものように仕事に追われていた。
「寝るなっ、松本！」
スキあれば長椅子に横たわろうとする乱菊に激を飛ばし、煉瓦のような分厚さの書類を片付けて・・・ひと段落した所だった。

冷たい茶を口に運んだ日番谷は、ふわり、と目の前を舞った地獄蝶に視線を奪われた。
半分しか体の無い、半身に茜雫を追わせている、例の蝶である。

――　神崎茜雫の奴、どこまで行ったんだ？
何の気なしに、日番谷はスッと指を伸ばした。その指に、地獄蝶が舞い降りる。
もしも戦いの最中になれば、爆発的に霊圧はあがるはず。
今何も感じないということは、まだ茜雫は敵を見つけていない、ということだ。
指に止まった地獄蝶を見つめながら、意識を凝らす。

――　北流魂街・・・２０番区くらいまで来たか？
茜雫が精霊廷から失踪して、１０日近くが経っているのだ。
死神の足なら、それくらいは進めるだろう。
そこまで考えた日番谷は・・・ハッと顔を上げた。
「この霊圧・・・」
地獄蝶のすぐ近くに存在する、かすかな霊圧。
その男の存在を、間違える、はずがなかった。

「んー？どうしたんですか隊長？」
明らかに寝起きの声で、乱菊が長椅子から身を起こした。
乱菊と目が合っても、とっさに日番谷は言葉を発せずに居た。
――　草冠と、死神が接触することになるとまずい・・・
近くで戦いが勃発すれば、草冠のことだ、接触してくる可能性もある。
しかし、公式には草冠は死んだことになっているのだ。
もしも、砕蜂や更木などと顔を合わせた日には、何が起こるかわからなかった。
今更、草冠を戦いの場に駆りだしたくは無い。

流浪の旅に出ているなら、そのままそっとしておいてやりたかった。

「・・・ちょっと外すぞ。何かあったら頼む」

日番谷はそれだけ言うと、素早く立ち上がった。

「？了解っス」

明らかに何も察していない顔ながら、乱菊は頷く。

隊首室を出るなり、日番谷は意識を凝らす。

そして・・・次に目を開けたときには、古びた店と、そこに立つ三つ編みの少女の背中が見えた――

## 【17】「神崎茜雫が来た。そう伝えて」

「ったく、妙なガキに時間とられちまった」
瞬歩で店先から離れた日番谷は、スタッと屋根の上に降り立った。
「草冠・・・この町にいるんだろ、どこ行った・・・？」
辺りを見渡す。
しかし、雑多なほかの霊圧に阻まれて、かすかにまで抑えた草冠の霊圧を感じ取れなかった。
ふっ、とその場から日番谷の姿が掻き消える。
そして、１００メートルほど離れた別の屋根の上に、その姿が再び現れた。
「とっとと草冠を見つけて、ここを離れるよう言わねぇと・・・」
同じく、この町のどこかにいる茜雫がそのまま町を通り過ぎてくれれば、それはそれでいい。
しかし・・・何となくだが、イヤな予感が広がるのを感じ、日番谷は眉をしかめた。

「ん？」
茜雫は、頭上を一瞬、黒い影が横切ったような気がして、顔を上げた。
「気のせいか」
すぐに視線を地面に落とす。その目はうつろで、声も力が無い。
「お、おなか・・・すいた」
信じらんない、と茜雫は腹を立てていた。
死人なのに、飢え死にしそうなくらい腹が減る、というのはどういうことだろうか。
これで本当にまた死んだりしたら詐欺だ、と思う。
でも、当然ながら金なんか持っていない。

あの世に通貨がある、ということも意外だったくらいだ。

――　なんか、海外旅行に来たみたい・・・

自分が死んだという実感がどんどん薄れてくる。

このままじゃ、国境を越えるみたいな感覚で現世にも戻れてしまいそうだ。

その時、ふわりと目の前を舞った蝶に、茜雫の視線は吸い寄せられた。

「あんたもしつこいよね・・・そんなにあたしが好きな訳？」

そこに居たのは、なぜか体が半分しかない、黒い蝶らしき物体だった。

初めて見たときは、幽霊！と思って悲鳴をあげたものだが（考えてみれば、自分だって幽霊だということに気付いた）、今はその姿にも慣れてきている。

ただ、おかしなことに、この蝶の姿は、他の流魂街の人間には見えないらしいのだ。

「良く見たら、おいしそうね、あんた・・・」

その言葉が分かるのか分からないのか、蝶が心なしか遠のいた気がした。

――　しっかりしろ茜雫！もう、仇は近いはずよ！

自分を叱咤激励するが、腹が減っては戦が出来ぬ、という諺（ことわざ）は事実だ、と思う。

スッ、と指を額に当てて、精神を集中させる。

――　近い。

鬼道のひとつ、「血導貫」は、自分の血を相手に浴びせることで、相手の位置を補足する技。

茜雫の血は、あの少年にはかかっていない。

その代わり、その頬に飛んでいたのは・・・

「父さん・・・母さん」
ずっと、一緒に暮らしてきた両親が、死してこんな風に、あたしを助けてくれているなんて。
間近に迫ってきたあの少年からは、親の気配が、かすかにした。

「は・や・て」

どこかで息をしている。あたしの仇。
絶対に仇を討つ、ともう一度誓う。
例えその後の未来に、何もなかったとしても。

「いたっ！」
その時、茜雫の肩に堅いものがぶつかり、茜雫は悲鳴を漏らして飛びのいた。
「おぉ、悪いな、ねーちゃん」
「何よ！」
茜雫より頭二つ分ほど大きい男が何人か、茜雫の横を通り過ぎようとしていた。
自分の肩に当たったのが、腰に差した刀だと気付き、茜雫は表情を強張らせる。
――　なんなの、この町。なんか不穏・・・

「本当に、この町にいるんだろうな？死神の『元隊長』とやらは」
「本当だって！この道の突き当たりの『椿』って揚屋の二階にいるって聞いたんだ」
頭が理解するよりも先に、ドキン、と心臓が跳ね上がった。
――　元隊長・・・？
元隊長ともあろう者が、そうどこにでもゴロゴロしているはずがない。

「ね！ねぇ！その元死神の名前は、黒星と孤虹っていうんじゃないの！？」
いきなり身を乗り出して捲くし立てた茜雫に、周りの視線が集中した。
「何だぁ？女。まさか、仲間入り希望ってか？おめーみたいな弱っちいのがよ」
茜雫とぶつかった男が、おどけたように言ってくる。
少なくともあんたより強いよ。
真っ向から睨み返すと、肩をすくめられた。

集まってきた野次馬の中から、誰かの声がした。
「まぁ、隠すことでもねぇだろ？黒星と孤虹。それは間違いねぇぜ」
「そう。あたしの追跡能力も、まんざらじゃないわね」
茜雫はまっすぐ前に視線を移した。
通りの突き当たりにある店の軒先には、大きく「椿屋」と書かれた看板が立っていた。
それを見つけた茜雫の胸が、もう一度ドクンと波打った。

――　父さんと、母さんの仇・・・！
逸る心とは裏腹に。足、が。動かなかった。
動かすどころか、へなへなと力が抜けそうになる。
――　怖い、ていうの？ここまで来て。
そう思いたくは無い。でも、この全身が冷たくなる感覚を、抑えられない。

――　茜雫。
その時思いがけず脳裏に響いたのは、父親の声だった。
――　もしも、何が何でもやり抜かなければ、と思うことが見つかったら、だ。

人のためとか、理屈とか、常識とかどうだっていい。思い切りぶつかればいい。
聞いた時は、会社でヘコヘコしてる父さんの、ただの願望だと思った。
でも今は、その言葉がスッ、と胸に染みとおった。
ぶつかるしかないよね。父さん、母さん。
茜雫はスッと顔を上げ、迷いない足取りを前に踏み出した。

店先には、明らかに堅気ではない男たちが十人以上、たむろしていた。
それだけではない。店の中いい外といい、揚屋とは思えない不穏な気配が漂っている。
「あぁ？なんだ、てめ・・・」
大股で歩み寄ってくる茜雫を振り返った男たちが、一様に息を飲んだ。
その琥珀色の瞳は、敵に飛びかかる猫科の猛獣のように、爛々と輝きを放っていた。
力を抑えたままだと言っても、死神の殺気。
それは、ただの男たちを凍りつかせるには、十分なものだった。

「この奥にいるんでしょ？死神崩れが・・・黒星、孤虹、そして疾風って三人組が」
腰から引き抜いた錫杖が、雨の中でくすんだ黄金の輝きを放った。
「神崎茜雫が来た。そう伝えて」
「お前。なんで名前を知ってる？」
「知ってるわよ・・・」
男達に、茜雫は怒鳴り返した。

「自分の親を目の前で殺されて！仇を討ちに来たって伝えろって言ってんのよ！
伝えないなら自分から行くわよ！」
「てめ・・・女子供に舐められてたまるか！」
男たちが、一斉に手にした刀や棍棒を茜雫に向けて構えた。

――　十五。軽く倒せるか・・・？
霊圧を開放すればたやすいだろう。だが、今は余計な力を消費したくない。
茜雫が斬魂刀「弥勒丸」を構えたときだった。
「うるっせえぇぇ！！！」
声、というよりも雷が落ちるような気合と共に、二階の障子が吹っ飛んだ。

## 【18】「思念珠って・・・何よ」

「え・・・？」
茜雫も、男たちも、とっさに何のリアクションも取れないまま二階を見上げた。

粉々に吹っ飛んだ障子の破片の先に、二階が見えた。
まず目に入ったのは、色黒の、やたらと大きな拳。
そして、日焼けした坊主頭。炯炯（けいけい）と光る野卑な瞳が、眼下を見下ろした。
「女子供一人に、男が総がかりかよ、つまんねぇことやってんな」
「黒星（ヘイシン）ッ！！」
怒りで、目の前がぐらり、と暗くなる。

激情に身を任せたまま、茜雫は地面を蹴った。
そして、屋根の上に飛び乗るなり、錫杖を振り上げる。
「黒星さんっ！」
男たちのどよめきが上がる。

――　茜雫の錫杖は、黒星の頭上5センチほどのとこで、止まっていた。
はぁ、はぁ、と茜雫の荒い息が、静まり返った空間の中に響いた。
「親の仇を討つために、ここまでやるとはな。面白ぇ女だ」
「当たり前よ！！」
「本当の親でもねえのにな」
えっ？
黒星の額に突きつけた錫杖の切っ先が、揺れる。
しかし茜雫は、ギリ、と錫杖を握りなおした。
「何言ってんのよ！あの二人はあたしの・・・」

「半年前までの記憶もねえのにか？お前に何が言いきれる」
今度こそ、茜雫は言葉に詰まった。
言いたい思いが喉元にこみ上げてきたが、旨く言葉になって出てこない。

確かに・・・黒星の言うとおりだったからだ。
そして茜雫自身、ずっとそのことに疑問を感じてきた。
「なるほど、てめえには、知る権利くらいはあるかもな。
ただ、お前にはなんの利益もねぇ情報だ。それだけは先に言っておくぞ」
黒星は、その時まともに茜雫の瞳を見返した。

途端。
ドキンッ、と心臓が暴れだすと同時に、茜雫は一歩、後ろに引いた。
まともに、その目を覗き込んでしまった瞬間、心臓を鷲づかみにされた気がした。
――　怖い・・・！
それは、怒りを凌駕する、より根源的な感情。
兎が虎に身竦められたような感覚だった。

「ふ、ざけんなっ！」
恐怖を追い払うように、茜雫は大声を張り上げた。
そして、錫杖を黒星の首元に突きつける。
「話なんてするために、ここに来たわけじゃない！
疾風を・・・あんたの息子を、出しなさいよっ！」
「いねぇよ」
黒星の返事は、腹が立つほどに落ち着き払っていた。
「今は、いねぇ。探してもムダだ」
「どういう・・・」

「てめぇに恨みはねぇが、てめぇを使わねぇと出来ないことがある。悪いが利用させてもらうぜ。神崎茜雫・・・いや、思念珠」
「シ・・・ネン、ジュ？」
茜雫は、その言葉をゆっくりと、口ずさんだ。
同時に、頭の中がぐるぐると回りだす。
「知らねぇとは言わせねぇぜ」
男の薄い唇が動くのを、茜雫は小刻みに震えながら見つめた。

「あ、あたし・・・！」
黒星が無造作に腕を伸ばし、錫杖の先を掴むのを、茜雫は視界に捉えた。
「・・・っ！」
初動が、遅れる。
気配が、ぐっと大きくなる。座っていた黒星が、立ち上がったのだ。
――　殺される！
茜雫の足がたたらを踏むが、その場でかろうじて踏みとどまった。
――　何やってるんだ、あたしは！ここでコイツに殺される訳にはいかない・・・！

立ち上がった黒星が、何気なく店先を見下ろした。
「ん？」
怪訝そうに、眉をひそめる。
店先に居た男たちが、すべて正体を失って、地面に昏倒していたからだ。
――　なんだ？気配を全く感じ・・・！
その直後、黒星の背後のふすまが、パシン、と退き開けられた。
振り返った黒星の向こうに、茜雫は見た。
黒髪を束ねた、茜色の瞳を持つ男が、そこに無表情で佇むのを。
「あんた・・・」

誰？そう茜雫が言葉を続けるよりも早く。
どう、と一陣の風が吹き抜けるように、男の気配が動いた。

「・・・冬獅郎の気配を追って来たら、なんだか妙なことになってるじゃないか」
男は、その古刀の切っ先を、まっすぐに黒星に突きつけた。
「あぁ、そこの少女。いずれ教えてくれるかな。その頭上に舞う蝶の経緯を」
「え？これ・・・？」
茜雫は、思わぬ男の言葉に絶句する。
男は、ニヤリと笑って、ズイ、とさらに切っ先を突きつける。

「そのためには、君に死んでもらっては困る。
だから、その錫杖はそいつに突きつけたままでいてくれ」
「あ、あんた、誰？」
「草冠宗次郎。死神崩れなんて俺一人かと思ったが・・・最近流行ってるらしいな」
草冠は、刀の向こうでニヤリと笑った。

## 【19】「子宮だよ」

幼心に、とても美しい女(ひと)だと思っていた。
鏡台に向かっているその後姿の、着物の裾から除く白い足を、なぜか正視できなかった。
見てはいけないものを見たかのように、気恥ずかしくなったからだ。

娼婦のような女だと、いかにも「貴族然」とした人々が言っているのは知っていた。
頭角を現すまでは、随分とひどいことを言われたり、されたりもしてきたらしい。
でも、何をされても萎縮するでも言動を改めるでもなく、本心から笑っていられる「図太い女」。
最強の隊長とまで字(あざな)され、頂点に立った今でも、その笑顔は変わらない。

憧れていた。
いつも突き抜けた場所にいた自由闊達なあの女(ひと)に、いっそ強烈なほど。
あんな風になりたいと、思った。
一番隊隊長・孤虹。
それが、儂の揺籃(ようらん)※の師の名だった。

「せぃっ!!」
気合一閃、夜一は瞬歩で中空に現れるなり、組み合わせた両拳を打ち下ろした。
目の前の女の頭に向かって。
しかし。

「あれっ？」
ゆらり、と女の頭が揺れたと思った瞬間、夜一の拳は空を切る。
あっ、と思った時には、その後頭部に手のひらが添えられていた。

「くっ！」
頭を押さえたその手には、全く力が入っていないように見える。
それなのに、夜一の小柄な体は、まるで手品のように吹き飛んだ。
ダン、と近くの木の幹に両足をつき、猫のような敏捷な動きで、近くの岩へと降り立った。

「どうして！なんで当たらないのじゃ！」
口を尖らせる夜一に、孤虹はふっと微笑んで見せた。
小憎らしくなるくらい、見事に結い上げた髪も奇麗な着物も、全く乱れが無い。
「一休みしようか、夜一サマ」
いつもいつも、からかうように「サマ」をつけるのが孤虹の癖だ。
そう呼ばれると、まるで頭を抑えられたかのように、反撃する言葉が出なくなってしまう。

「不思議じゃな、先生は」
そう言って孤虹を見上げた夜一は、まだ十歳程度にしか見えない。
「体もゴツくないし、凄い武器も持ってないのに、先生には勝てる気がせぬ。
儂、これでも四楓院家の中では、筋が良いと言われてるのに」
ぽん、と二の腕を叩いた。
日焼けしたその腕は、少女とは思えぬほど、逞しく発達している。
それを、孤虹は楽しげに見下ろした。

「筋肉とか、頭とか。女はそれだけじゃ強くなれないんだよ」
「じゃぁ、どこを鍛えるのじゃ？」

口に出されれば、どこでも鍛えて見せよう、とでもいうような真剣な表情に、孤虹は吹き出す。
そして、手のひらで自分の腹を押さえた。

「子宮、だよ」
「シキュウ??」
「そう。大切なものを孕(はら)み、護ることさ」
「子供のことか?」
きょとん、と夜一は首を傾げる。孤虹は、笑ったままだ。肯定も否定もしない。
「アンタは、まだそれでいいんだよ、夜一サマ」
「何かバカにされてるみたいじゃ」
夜一は、ぷーっと頬を膨らませた。

「大体、先生にだって、護る子供なんかおらぬ!」
「いるさ」
ほら、まただ。艶やかな笑み。
「アタシにとっての子供は、精霊廷だよ。
この戦乱の世の中で生まれたてで、弱くて。
でも愛しくて、可能性を秘めている」
ぽん、と頭を撫でられる。
そのひとつがアンタだよ、といわれたような気がして。
夜一は、はにかむように微笑んだ。

「儂は、先生のようになりたいぞ!」
天真爛漫な笑みを浮かべた夜一を、孤虹は少し目を丸くして見つめたが・・・やがて、その頭をぽんぽん、と撫でた。
「夜一サマなら、きっとアタシより強くなれるさ」
そう言って。

精霊廷・雨乾堂。
「さすがに梅雨時じゃあ、雨乾堂なんて言っても、雨は乾かないねぇ」
京楽が、いつもは被っている編笠をくるくると回しながら言った。
「黒星隊長と、孤虹隊長も、今頃雨を見ているんだろうか・・・」
病がちな浮竹には、この長雨は堪(こた)えるらしい。ここ数日は、ずっと床についていた。
「生きておられたのは、嬉しいんだけどねぇ。
味方だったらこれほど心強い二人もいないのに、残念だよ」
浮竹から少し離れて、京楽が煙管をふかしている。
そして、縁側にいるもう一人の人物に、浮竹は呼びかけた。
「なぁ、四楓院、お前には想像がつかないのか？」

「ん？」
名を呼ばれ、猫のように縁側に寝転がり、雨を見ていた夜一が答える。
気のない返事だけで、振り返りもしない姿が、ますます猫を思わせる。
「だからさ、今話したろう。黒星隊長・孤虹隊長が『殺された』とされた理由さ。
もしかすると、今回の反逆と関係があるんじゃないか？」

しばらくの、沈黙があった。
浮竹と京楽は、辛抱強く夜一の背中を見つめ続ける。
「そんなに凝視するな、チクチクするわ」
夜一が、ごろんと二人のほうに体を向けて言った。

「知らんよ。儂とて、二人が隊長だったころは、護廷十三隊に入隊すらしていなかったのだから」
「う、うむ。それはな・・・」
浮竹が、それを聞いて視線を落とした。

「でも、お前に瞬歩を教えたのは、孤虹隊長だったんだろう？もしかしたらと思ったんだ」
「確かに。当時随一の速さを誇った孤虹隊長が乞われ、四楓院家の教育係として来られていたのは事実。
懐かしい話じゃ」
そこで、夜一は身を起こすと、くるりとその場で胡坐を掻いた。
「しかしな。ある日から突然、孤虹隊長の名前は四楓院家では禁忌になった。
それだけじゃよ、儂が知るのは」
「らしくないねぇ」
飄々とした口調で、すかさず口を挟んだのは、京楽だった。
「あからさまに何かありそうじゃない。
君だったらすぐに、あちこちに首を突っ込んで調べそうに思うけどね」

「・・・お主、相変わらずイヤな奴じゃの」
ガシガシと夜一が頭を掻いた時だった。
「！」
3人は同時に、その表情を変えた。

――――――――――――――――――――――――
※揺籃（ようらん）＝ゆりかご。転じて幼少期。
「揺籃の師」で、「幼い頃の先生」という意味です。
普段の生活には不要です、きっと。

## 【２０】「貴様！孤虹か！！」

「この霊圧・・・黒星隊長じゃない？」
「近くに感じるこの霊圧、茜雫のものだ！」
浮竹が京楽に返すと、すぐさま立ち上がろうとした。
しかし、立ち上がったとたんに、ごほごほと咽こむ。
「まさか行こうってのかい？その体調じゃ無謀もいいとこだよ」
「でも・・・茜雫は俺の部下には違いは無いんだ！」

夜一は、二人の会話を聞きながら、視線を背後の庭へと移した。
無遠慮な足音が、遠くのほうから聞こえてきていた。
「庭から急に入ってくるな、お主ら！」
「夜一さん、あんた来てたのか！冬獅郎は来てねぇか！」
風情も何もなく、庭を突っ切ってやってきたのは、一護、ルキア、恋次だった。

「日番谷冬獅郎なら・・・」
夜一は、ちらり、と視線を中空に走らせた。
「今霊圧を感じたぞ。一足早く、現地に入っていたようじゃな」
「おいホントか？アイツ、抜け駆けかよ！」
「草冠宗次郎の霊圧も、今跳ね上がった。神崎茜雫のすぐ傍におるようじゃ」
「・・・はっ？」
一護が、とっさに思考のおいついていない顔をした。

「止まらぬな・・・」
夜一は一護にかまわず、ひとり、つぶやいた。
まるで獲物の匂いをかぎつけた獣のように。一人、また一人と戦いに巻き込まれてゆく。

こんな場面を、これまで何度も見てきた。
「止めるさ」
一護の言葉に、ハッと我に返る。
たった１０年ちょっとしか生きていない、死神から見れば、よちよち歩きを覚えた赤ん坊なのに。
生まれたてで、弱くて、可能性を秘めている。
それを愛しいと呼んだ、あの女（ひと）の記憶がまたひとつ、鮮やかになる。

「蝶の半身はここにおるぞ」
返事の代わりに、夜一は中空を指差した。
一護たちの背後を追うように、ふわふわと異形の蝶が飛ぶ。
「穿界門の向こうは、もはや戦場だ。一護、恋次、覚悟はいいか！」
「おう！」
「当然だぜ！」
一護と恋次が即座に返すのを見て、ルキアは頷いた。
そして、手にした斬魂刀を向け、一言、唱える。
「開錠！」
その時、刀の近くを待っていた地獄蝶の半身が、朧な光に包まれたように見えた。
そう思ったときには既に、穿界門の姿が中空にぼぅ、と浮かび上がって見えた。

「行ってしまいおった。慌しいのぅ」
夜一が、３人を飲み込んで、ふっと掻き消えた穿界門の方を見やって呟いた。
「ぼやぼやしてる場合じゃない！俺たちも・・・！」
そういいかけて、浮竹が言葉を途切らせた。
腕から背中にかけて、一瞬で鳥肌が立つ。
それほどまでの霊圧が、瞬間的に高まったからだ。

「・・・さすが黒星元隊長。格が違うのぅ」
――　まずいな。これじゃ・・・
浮竹と京楽は顔を見合わせる。
何百年も時を経れば、いくら二人でも、多少は力が衰えるのではと思っていた。
衰えた二人なら、いざとなれば自分たちでも押さえ込めると。
しかし、まるで限界が無いかのように・・・むしろ、その力はあがっているではないか。
「儂は・・・行くぞ」
その時、二人に背を向け立ち上がったのは、夜一だった。

「し！しかし、いくらお前でも・・・」
「行かねばならんのじゃ」
振り返った夜一は、見慣れない表情をしていた。
それは、孤独、とか。寂しさ、とか。おおよそ彼女には無縁な感情をあらわしていた。
「儂しかできぬことがある」

場所は、一番隊隊舎前。
「毎日毎日、こう雨が降り続けると、体にもカビが生えそうだな」
死覇装の上にたすきをかけ、斬魂刀を腰に差した門番が、くぁ、と欠伸をした。
「オイオイ、気を抜くなよ。最近はただでさえ治安が悪いんだから・・・」
隣に立っていた別の門番が、欠伸をした男の肩を小突いた。
旅禍の侵入。藍染の裏切り。そして、思念珠と王印による精霊廷への侵攻。

とくに、王印を携えた草冠宗次郎が精霊廷を襲撃した際は、精霊廷も直接かなりの打撃を受けた。
そしてこれが全て、過去数ヶ月の間に起こったことなのだ。
過去数百年と、安寧の時代を送ってきた精霊廷には、近年例を見ない状況だった。

「あぁ。分かってるさ・・・ン？」
姿勢を正した男が、前を見やった。
ふぅわりと、鼻腔に香水のような甘やかな香りが漂ったように感じたからだ。
風に流されるように霧雨降りしきる中、蒼い影が、ぼんやりと浮かび上がった。
艶のある黒髪が、風にさらりとたなびく。
黒い飾りのついた簪が、しゃらりと涼やかな音を立てる。
透け模様の入った黒い唐傘を、無造作に片手で差している。

「誰だ！」
その問いに、にんまりと女の口角がつりあがった。
その女が、だらりと手に提げた、白々と輝く刃に、門番たちはハッと身構えた。
大胆な芍薬（しゃくやく）の模様が入った、蒼い着物を粋にまとった女。
女が歩むごとに、割れた裾から紅い襦袢がのぞくのが、なまめかしかった。
「懐かしいねぇ、一番隊舎なんて」
その唇から言葉が紡がれた時。

「貴様！孤虹か！！」
鷹の一鳴を思わせる鋭い声が、雨の空気を切り裂いた。
女がゆるり、と首をめぐらせて、声のほうを見やる。
スタッ、と一番隊門の上に姿を現したのは、二番隊隊長・砕蜂だっ

た。
「ただいまァ♪」
からかうように発せられた孤虹の言葉に、砕蜂は眦を決してにらみつけた。

## 【21】「必要なんだよ。王印の力が」

「ここは既に貴様の立ち入ってもよい領域ではない！今更、何をしに来た！」
「王印。あるでしょ？ここに」
「・・・なに？」
その言葉は、砕蜂には意外なものだった。虚を突かれて一瞬、黙り込む。

――　王印・・・など、どうするつもりだ？
草冠宗次郎が王印を奪い、精霊廷に戦いを挑んだのはまだ記憶に新しい。
卍解を会得していない草冠が使ってさえ、隊長全員でかからねば押さえ込めないほどだった。
もしも、この女や黒星がその力を使ったら。
結果は、火を見るより明らかだ。

その間にも、ゆっくりと孤虹は門に歩み寄っていた。その足音に、砕蜂は我に返る。
「使わないでしょ？アタシに頂戴」
「馬鹿を言うな」
返した砕蜂の背中を、つい、と冷たい汗が流れ落ちた。
その頃には、一番隊の隊士に加え、二番隊も続々と門の前に集結しつつあった。
しかし、「敵」が着物姿の女一人、と知ると、戸惑ったように顔を見合わせた。

「王印で何をするかは知らんが、ただ一人で乗り込んでくるとは無謀というもの。

後悔するぞ、孤虹」
冷たい、強い言葉はいつも通り。しかし砕蜂はその時、女の姿に視線を奪われた。
着物の胸元からこぼれる、白く豊かな胸元。
裾からのぞく、細い足首。
目尻を紅く染め、きりりと描かれた眉。
自分が厭い、投げ捨てた「女」というものを、惜しむことなく備えている。
その艶のある唇が微笑む形に、砕蜂は図らずも、見惚れた。

「一人で来るから粋なんじゃないか。ぞろぞろ古巣へ帰るなんて無粋ってものサ」
ざっ、と女の足が砂を踏む。
その頃には、皆気付いていた。女の孕む空気が、まともではないことを。
異様、異質、異常。「異」という言葉がふさわしい。
――　この女は、危険だ・・・
本能が、この女に背を向けろ、全力で逃げろと言っている。

「何をしている、早くかかれ！」
一番隊舎の中から走り出てきた隊士たちが、飲まれたように立ちすくむ門番達を叱咤する。
「お・・・おぉ！」
その言葉で我に返ったように、門番たちが一斉に、孤虹に向かって駆け出した。
「ま・・・待て！」
砕蜂は、気付けば叫んでいた。
「その女に不用意に近づくな！」
「・・・正鵠※」
孤虹が顔を上に向け、小首をかしげた。

そして、その唇が何かを呟いた。

途端。

「う・・・うぉっ？」

「なんだぁ？」

門番たちの体が、突然何かに拘束されたように、その動きを止めた。

「く・・・くるし・・・」

手から、次々と斬魂刀が落ちる。

その胴体が、目に見えぬ大きな手のひらに掴まれたかのように締まり、よじれてゆく。

――　なんだ、この技は？斬魂刀の力か・・・？

砕蜂は、門の上で斬魂刀を構えたまま、目下の状況を見下ろした。

締め上げられた男たちの顔が赤く、そして次々と蒼白に色を変えてゆく。

その体が、上にぐっと持ち上げられたように見えた次の瞬間・・・

つま先が、宙に浮いた。

「う・・・わっ！！」

５センチ。３０センチ。１メートル・・・

門番達の体が中空に持ち上げられるに至り、それを成すすべなく見守る隊士達の間にも、恐慌が広がった。

その中を、悠然と孤虹がひとり、歩みを進める。

「砕蜂隊長！」

二番隊の隊士たちも、思わぬ事態にたたらを踏んでいた。

ちっ、と砕蜂は舌打ちをする。

「私が行く！」

叫ぶと同時に、その姿が掻き消える。

「素早いね」

唐傘を上に持ち上げ、孤虹が呟いた。

その刹那、砕蜂の振り上げた足が、孤虹の頭を狙っていた。

ギンッ！！

孤虹が顔の前にかざした腕と、砕蜂の足首が烈しく交錯する。

――　この感触は・・・

肉体ではない、もっと硬い・・・鉄のようなもの。

砕蜂がそう思った時、孤虹が砕蜂の蹴りを受け止めた、着物の袖の中に手を差し入れた。

その中からスルリ、と抜き出されたのは、艶やかな薔薇の花が描かれた、鉄扇だった。

――　ただの扇ではない！

孤虹の白魚のような指が踊り、鉄扇が開かれる。

「覚悟っ！」

中空で体勢を立て直し、砕蜂は、斬魂刀「雀蜂」を繰り出した。

普段はそう簡単に斬魂刀は出さないが、相手がこの女では、遠慮する必要はあるまい。

無防備な孤虹の顔に、その雀蜂が吸い込まれた――

「隊長っ！」

隊士の声が周囲に響くと同時に、鋭い金属音が響き渡った。

「うっ・・・」

その瞬間、宙に浮いていた門番達の体が落下し、次々と地面にくず折れた。

「おい！大丈夫か！」

隊士たちが駆け寄るが、門番達は口から泡を吹いたまま、意識は全くなかった。

孤虹が持っていた唐傘が、驚くほど高く、宙を舞う。

恐ろしく長いような気がした時間の後、乾いた音を立てて地面に転がった。

そして・・・その唐傘の向こうに、ふぅわり、と孤虹の後姿が降りた。
風に膨らんだ蒼の着物が、地面に着地すると同時に、元の姿に収まった。
しなやかな髪が、さらりと背中に流れた。

「唐傘、ダメにしちまったね」
小さく肩をすくめる。そして、手にした鉄扇を空中で一振りした。
と、同時に。真紅の液体が、空中に飛び散る。
「な・・・に？あれは・・・」
隊士たちが、その扇を見て絶句する。
その扇の骨の部分一本一本が銀色に光り、更に目を凝らせば・・・
鋭い刃さながらに磨き上げられているのが分かったからである。

「き・・・貴様」
１０メートルほど離れて対峙した砕蜂は、地面にうずくまったまま動かない。
その両足首を手で掴んでいた。指の間から、次々と血が流れ出し、地面に赤い水溜りを作った。
――　この女、腱を・・・！
砕蜂は、その場にうずくまったまま、歯を食いしばった。
「それが、貴様の斬魂刀か・・・」
「紅南風。始解もまだだけどね」
皮肉っぽくもなく孤虹は言い放った。
「アンタの戦い方、サッパリしてて嫌いじゃないよ。でも、まだまだ修行が足りないね」
「敵」というよりも、まるで後輩を見るような、笑顔。
パシッ、と音を立て、片手で扇・・・いや、「紅南風」を閉じる。

「・・・なぜだ」

気づけば、砕蜂は傷の痛みに歯を食いしばりながらも、問うていた。
「なぜお前のような実力者が、野に潜んでいた。なぜ王印を求める！」
「必要なんだよ。王印の力が」
「王印など手に入れて、今更何をする気だ！」
「それは・・・」
孤虹が、口を開いた瞬間だった。重々しい声が、その場の緊迫した空気を破った。
「待て。孤虹」
ぴたり、と孤虹の足取りが止まった。
そして、声を放った主を見上げ・・・優しげに微笑んだ。
「お久しゅうございます。・・・山本総隊長」

――――――――――――――――
※正鵠＝「物事の要点や急所を正確にとらえること」。その通り。
「最もだ！」と思ったら、学校でおうちで、使ってみてください。

## 【22】「破道の百一」

「総隊長・・・！」
その場で凍り付いていた隊士たちが、かすれた安堵の声をあげた。
タン、と手にした杖が、地面を突く。
堂々とした足取りで、総隊長が姿を現した。

ごくり、と誰かが息を飲み込んだ。
決して、その霊圧は烈しくはない。
しかし、歩みと共に輪のように広がる霊圧が、その場の空気を制圧してゆく。

「さすがですねェ、その力・・・お変わりないようで」
どことなく嬉しげに、孤虹はその口の端を上げた。
「何。お主ほどの勢いはもう無うなったがな」
その言葉とは裏腹に、老人とは思えぬ力のこもった動きで、ひゅん、と手にした杖を振る。
それと同時に杖の外側は姿を消し、中からは、一振りの斬魂刀が姿を現した。
山本総隊長の持つ最強最古の斬魂刀、「流刃若火」である。

１０メートルほど手前までやってくると、そこで総隊長も動きを止めた。
――　ここが、境界か・・・
おそらく、これ以上一歩でも踏み込めば、互いの間合いに入る。
「古巣に戻ったか。何ゆえじゃ」
眦を決し、総隊長が言い放った。
それを、孤虹の涼しげな瞳が受け流す。
「復讐のためか？お前たちを裏切った、精霊廷に対しての」

――なに？
砕蜂は、その言葉に一抹の違和感を覚えた。
それは・・・「逆」ではないのか。

「まぁ、ね」
ゆっくりと、再び孤虹は歩き出した。
山本総隊長に向かって。
膨張してゆく霊圧に、ビリ・・・と空気が震え、傍を取り巻く隊士たちに緊張が走った。
「ちょっと、王印を借りようかと。精霊廷が持っててもお使いやしないだろ」
「そんなことが出来ると思うか！」
砕蜂が身を乗り出し、叫んだ。
「出来るわよ」
孤虹の言葉は、短かった。そして、スッと視線を地面に伏せる。

「黄昏に沈む翼（はね）。一切の光を滅す瞳。汝（なれ）の棲（す）まいし闇に我を誘え」
その言葉に、誰もが怪訝そうに眉をひそめた。
鬼道のようだが、そのような詠唱を、誰もが聞き覚えが無かったからだ。
しかし、その詠唱に反応したのは、総隊長だった。
「よせ！」
一声叫んで、思わず、といった仕草で孤虹の方に手を伸ばす。
「その技は・・・！」
「破道の百一」
「ひゃ・・・百一？破道は百までのはず・・・」
周囲からどよめきがあがる。
「バカだねぇ、そんなの誰が決めたのさ。鬼道は百が限界だって」
蓮っ葉に言い捨てると同時に、手にした扇「紅南風」をシャン、と

振った。

ぽぅ・・・と扇を紅色の光が包んだ、と思った瞬間、扇は一振りの刃に姿を変えていた。

「鬼道と、斬魂刀の力を組み合わせた、アタシだけの技さ。かわした者は、今まで・・・誰もいない」

「・・・それを打てば、何が起こるかわかっているのか」

「山本総隊長。貴方は、死なないだろうね。そこの隊長さんも」

チラリ、と孤虹が視線を砕蜂に走らせた。

「でも、それ以外に半径1キロ以内で助かる人間はいないだろうさ。そして、精霊廷全土に壊滅的な打撃を与える・・・」

ゆっくりと口から紡がれる言葉。それを受けた総隊長の表情が、全てを物語っていた。

「ひ・・・」

隊士たちが、じり、とその場から退く。

「王印を渡しな」

「脅すつもりか、孤虹！」

「つもり、とは甘いねぇ、相変わらず」

あざけるように、孤虹は山本総隊長を見返す。その瞳に一気に力がこもった。

「精霊廷全土を人質に、卑怯にも脅してんのさ」

「貴様！元隊長として、恥ずかしくは無いのか！」

砕蜂がその時、声を上げた。

今の隊長達に、精神面で未熟なものは多いと思ってきた。

戦闘狂の更木、マッド・サイエンティストの涅、一人一人の命に拘りすぎる日番谷。

しかしそれでも、「精霊廷を護る」という強い意志だけは、皆持っていると思う。

それに比べて・・・この女は。
こともあろうことに、精霊廷と引き換えに、己の願望を叶えようというのか。

――　裏切りには必ず、理由がある。
やはり、そんなことには意味はないのだ。
砕蜂は、そう言った時の日番谷の表情を思い出し、心中で毒づいた。

砕蜂を見やった孤虹は、その紅色の口角を上げただけで、何も言わず視線を戻した。
「どうするんだい？山本総隊長。アナタならアタシに勝てるかもしれない。
ただ、精霊廷は灰燼に帰すけどね」
卑怯な・・・砕蜂は歯を食いしばった。
ふたりが刀を向ければ、戦いに勝とうが負けようが、精霊廷は崩壊する。
精霊廷守護の要である総隊長が、それと知って戦えるはずがないではないか。
そして、それをこの目の前の女は、誰よりもよく分かっている。

「・・・！」
山本総隊長が、無言で唇を噛んだ。
その表情から、苦悶が手に取るように感じられる。
ゆっくりと・・・彼が手にした「流刃若火」の切っ先が、下へと降りた。
「それじゃ、中に入らせてもらいますか」
その横を、軽い足取りで、孤虹が通り過ぎる。

ヒュンッ！！
その頭に向かって、一筋の閃光が光った。

孤虹は振り向きもせず、頭の位置を少しだけずらす。
「！」
完全に避けきったと誰もが思ったが、その頬に、真紅の一線が引かれた。
「・・あンた」
孤虹ははじめて振り返り、血を流す足を引きずりながらも、立ち上がった砕蜂を見た。
その手には、苦無が握られていた。その切っ先を向け、砕蜂が孤虹をにらみつける。

「そんな苦無で、アタシを殺せる訳がないだろ。無様な真似はやめな」
「無様、だと」
腱を切られた足は、他人のように言うことをきかない。
それでも、砕蜂はよろめきながらも、前に歩き続ける。
「本当に無様なのは、隊長でありながら、精霊廷の敵に、一矢も報えぬことだ！
貴様には絶対に分からぬ」

こんな醜態をさらすために、何百年も修練を積んだわけではない。
尊敬した元上司の失踪後、その隊長の座を奪い取ったわけでもないのだ。
こんなにカンタンに隊長の座を捨て、精霊廷を裏切った女には、絶対に分からぬ。
「・・・」
孤虹が、砕蜂に初めてまともに向き合った。
そして、斬魂刀をヒュッと空中で一振りすると、大股で砕蜂に歩み寄った。

## 【23】「倒せるか、黒星と孤虹を」

「そ・・・砕蜂隊長！」
「近づくな貴様ら！」
間髪入れず、傍の部下達を一喝した。
とてもじゃないが、隊長以外の死神が手を出せる場面ではない。
ピン、と張り詰めた空気の中で。
砕蜂に触れるところまで近づいた孤虹の、真紅の唇が動いた。

「そんな僻んだ根性じゃ、アタシは絶対に殺せないよ」

砕蜂が見上げた視界の中で、孤虹の瞳に光が渡った。
それなら、貴様は一体、どんな人生を歩んできたというのだ。
時代が違えば、立場が違えば、聞けたかも知れぬ。
振り上げられた切っ先を見て、砕蜂は一瞬、そう思った。

「砕蜂！」
総隊長が駆け寄ろうとし、周囲の空気が緊迫した・・・
その虚をつくように、黄金の輝きが宙に弧を描いた。
手のひらに収まるような大きさの「それ」に、孤虹が振り向く。
「・・・これは」
パシッ、と刀を握っていないほうの手のひらで、それを受け取る。
砕蜂が孤虹の向こうを見やり・・・そして、隊舎の前に佇む小さな影に、思わず声を上げた。

「夜一様！」
砕蜂が久しぶりに見た夜一は、なんともいえぬ、不思議な眼をしていた。
いつも強い意志を持っているはずのその瞳は、彼女には異質な光を

宿している。
涙をたたえたかのように輝く瞳が、ひた、と孤虹に据えられた。
「・・・それが王印じゃ」
「四楓院！お主・・・！」
振り返った総隊長を尻目に、夜一はまっすぐに孤虹を見つめ続ける。
「総隊長。この状態では、渡すしかないじゃろう。それよりも、儂は聞きたいことがある」
「夜一サマ」
全く変わらぬ、涼しげな瞳。王印を手に、妖艶に微笑んでいるその姿。
既視感に、頭がぐらりとした。
――　ちがう・・・
頭痛がする・・・
儂が憧れて止まなかったあの女（ひと）ではない。そう、夜一は思おうとした。
でも、寸分も変わってはおらぬ。いっそ、残酷なほど。
「あなたが、自らの子供のように慈しんでいたのは、精霊廷ではなかったのか。
・・・もう、あなたを信じてはならぬのか。最後にひとつ、教えてくれ」
その声に含まれた必死な何かに、その場の全員が、黙り込む。
孤虹は王印を、ぽん、と軽く宙に放り投げた。
そして確かめるようにもう一度掴むと、それを懐に入れた。
「知りたいのかい？答えを」
孤虹は、斬魂刀を鞘に収めると、にっこりと微笑んだ。
「答えは単純。『信じてはならぬ』。今のあたしは、精霊廷への復

讐のために生きている」

「ちがう・・・」

ちがうちがう。

あなたは昔から、虐げられても颯爽と笑っていたではないか。

怨むなど、復讐など、あなたが口にして似合う言葉ではない！

孤虹は、そんな夜一を、どこか哀れむように見た。

「アンタは、余りに子供だったんだよ。周りの噂のほうが、本当だったのさ。

アンタが憧れたのはホンモノのあたしじゃない。

自分が見たいと思った理想の姿を、あたしに映していただけさ」

「うそだ！！」

「バイバイ、夜一サマ。二度と会わないことを願うよ」

それは・・・つまり。次に会うときは、平穏にはすまないという威嚇行為。

孤虹の姿が、ふっ、と掻き消える。

「くそ・・・」

夜一は、一番隊門の上に現れると、焦った素振りで周囲を見渡した。

「ムダじゃ、追うな」

総隊長の言葉に、苦い表情でうつむいた。

「どうやら儂等は、あの者を見誤っていたようじゃ」

その言葉は暗く、重い。

一番隊隊長を任せていた死神の離反。それは、深く彼の心をうがったのだろう。

いつも若々しく見える肉体は、この時ばかりは一気に年老いて見えた。

「片や死神代行を襲い、片や王印を奪うなど。やつらの狙いは、一

体・・・」
足を引きずりながら、砕蜂が総隊長の傍に歩み寄った。
「死神代行・・・！神崎、茜雫か・・・」
その言葉を聞いた総隊長が、ハッ、と目を見開く。
「そういう、ことか」
「総隊長・・・？」
態門の上から、夜一が半ば唖然とした表情のまま、総隊長を見下ろした。
その場に、長い沈黙が落ちる。

「総・・・」
何かを振り切るように、総隊長は顔を上げた。
「敵は、黒星に孤虹。孤虹は言うまでもないが、黒星もまた、最強の破面と呼ばれた男。
だが、二人が精霊廷に刃を向けるのなら、おめおめと敗ける訳にはいかぬ！」
そう言い放った老死神は、毅然とした表情で周囲の死神たちを見回した。

「倒せるか、黒星と孤虹を。かつての隊長を」

「もちろんです」
間髪入れず砕蜂が返し、周囲にひしめいていた死神たちも、頷いた。

――　違う・・・
もう何度目か分からない言葉を、夜一は繰り返した。
何かが違う。自分達は何かを、読み間違えている。
だが、それが何かは分からない。
分からないまま、ずるずると事態だけが先へと進んでゆく。取り返

しのつかない方向に向かって。
――一護。
必ず止める、といって黒星のところへ向かった、あの少年は無事だろうか。
どんな理由があろうとも、もう・・・止まることはない。そうなのか？
「儂は、諦めぬ」
夜一が苦しげに、眉根を寄せた。そして、その姿がフッと掻き消えた。

## 【２４】「俺は、破面と仲良くはできないな」

グラウンド・ゼロ。
爆心地には、ぽっかりと大きな穴が開いていた。
「椿屋」は、既に影も形もなかった。
焼け焦げた大黒柱が、そこに建物があったことを示すのみ。

「アイテテ・・・」
瓦のカケラを払いのけ、地面に伏せていた茜雫が身を起こした。
――　あ、あれ・・・？意外と平気みたい・・・
部屋に入ってきた草冠という男と、自分の斬魂刀の切っ先を黒星に突きつけた瞬間のことだった。突然、黒星のいた辺りが「爆発」したのである。
まるで彼自身が爆薬にでもなったかのように、放たれた光は一気に周囲を飲み込んだ。
車にはねられたことなどないが、はねられたら、おそらくこんな風に飛ぶのではないかと思う。
体が撥ねあげられて、目をつぶって、意識が遠くなって・・・気がついたら瓦礫の中にいたのだ。

「大丈夫か」
その時、聞きなれぬ声が思いがけず近くで聞こえた。
茜雫が弾かれたように振り返ると、そこには、青い着物をまとった後姿があった。
「あ、あんた。草冠とかいう・・・」
「あぁ」
草冠宗次郎は、見えない壁に手を突くかのように、スッと手のひらを前に伸ばした。
すると、乳白色の壁が一瞬見え、ふっと掻き消える。

「今の、知ってる・・・鏡門ていうんでしょ。使えないけど」
「あまり出来がよくない死神だったようだな」
ムッ、として茜雫は草冠の横顔を見やった。

――　肌、あたしより白い・・・
キリッとつりあがった眉。切れ長の瞳。
クール、を絵に描いたような男だと思った。
「でも、なーんかあたし、こういうタイプ苦手・・・」
「何か言ったか？」
ぶるる、と茜雫は首を振った。
――　しまった、口に出ちゃった・・・

「そんなことより！アイツらは、あたしの親を殺した仇なの。
助けてくれたのはお礼を言うけど、ここからは離れてて！」
「・・・それは無理だな」
しばらく茜雫を見下ろしていた草冠は、しばらくして首を振った。
「なんでよ？」
「お前の実力じゃ、もって十秒だ。離れる時間なんてない」

こっ、こいつ・・・
こういう時は「お前が退がってろ」とか言うもんじゃないの、一応？
前言撤回。「苦手」じゃなくて、「嫌い」だ。
「・・・どっ、どこの所属よ、あんた！こんなところでたった一人
でいてさ！
ロクな死神じゃないでしょ！」
どこかで聞いたような言葉だ・・・と思いながらも、これくらいし
か反撃の言葉が浮かんでこない。
「まぁな」
捲くし立てられて、草冠が苦笑いを浮かべた。
そして、視線を前に戻す。

「こんな所に居る死神なんて、ロクなもんじゃない。俺もお前も、奴もな」

草冠が視線を向けた先を、茜雫も同じように見つめた。
もうもうと立ち上る煙の中・・・煙が晴れたとき、茜雫は息を飲む。
累々と、という表現がふさわしいほどの、男達の集団が正体もなく倒れ伏していた。
さきほど、店先にたむろしていた連中に違いない。

そして、その向こうにゆらり、と動いた影に、草冠も茜雫も身を強張らせた。
「あんた！一体なに考えてるのよ！味方を攻撃するなんて！！」
「・・・味方？こんな奴ら知らねえよ」
姿を現した黒星は、太い眉毛の下の大きな瞳で、ぐるりと周囲を見回した。
「追っ払っても追っ払っても勝手に集まって来る方が悪い。
吹っ飛ぶ瓦礫、燃え盛る焔。崩れる建物。
とくりゃあ、死体の十や二十、あたりに転がってねえと示しがつかねえだろうが！」

「なんてはた迷惑な男・・・」
茜雫が立ち上がった。
「まさか、あたしの家族を狙ったのも、理由なんかないって言うんじゃないでしょうね？」
「それは、ちゃんと理由がある。安心しろ」
「・・・。って、ふざけんな！どんな理由があろうが、人を殺すなんて死神として最低よ！」
「最低、ね。言われるまでもねぇよ。俺らはとっくに精霊廷の裏切り者だからな」
茜雫の視線もどこ吹く風、という表情で、黒星が一歩踏み出した。

「そんなことはどうでもいい。お前がわざわざ追ってくるとは、好都合だな」
「・・・シネンジュって物のこと？言っとくけどあたし、そんなの知らないからね！」
言い返す一方で、茜雫はジワリと嫌な予感が広がるのを感じていた。シネンジュ、なんて知らない。知るわけがない。
でも・・・その言葉を口にするたびに、なぜか懐かしいような気がするのだ。

「・・・ふん」
しかし、そんな茜雫に黒星は余裕の笑みを漏らしただけだった。
「嘘じゃなさそうだな。結界で封じ込まれてる、てトコか」
「結界？テキトーなこと言ってるんじゃないわよ！」
「気にするこたない。直に思い出すさ」
その言葉に、ゾクッ、とした。なぜかは分からないけれど。

「・・・思念珠、か」
言葉を挟んだのは、思いがけず草冠だった。
「それは、使い方によっては精霊廷を破壊できるほどの武器になりうる。
そんなもの、どうする気だ？まさか本当に精霊廷を襲う気か？」
「破壊・・・？精霊廷を？」
茜雫は思わず、草冠の言葉を鸚鵡（オウム）返しに繰り返した。

「詳しいな」
黒星は肩をすくめる。肯定も否定もしないままで。
「飯食ってクソして寝て、くだらねー毎日じゃねぇか。
それをちょっとだけ、面白くしようって趣向さ」
「おもちゃ代わりにするには、思念珠は大きすぎると思わないか？」

「大きい小さいは俺達が決めるさ」
黒星はそれだけ言うと、ズイ、と茜雫のほうに身を乗り出した。
その霊圧に、茜雫は我知らずたじろいでいた。

――　やっぱり、こいつ・・・
強い。
おそらく、精霊廷で会った、どの死神よりも。
その時、茜雫は、ズイ、と隣に突き出された刃に息を飲んだ。
斬魂刀ではない。しかし、その刀を青白い光が・・・霊圧が包んでゆく。
「草冠宗次郎・・・」
「お前。ロクに戦った経験もないだろう。意地張らずに下がるんだな」
「う・・・」
腹が立つくらい、隣の草冠宗次郎の横顔は、冷静に見えた。
あれだけの霊圧を見せ付けられても、何も感じないみたいな顔をしてる。

それに比べれば、確かに、あたしは・・・虚しか、戦った経験はない。
強さはもちろん、「人の形」をした者と戦うことなんて、これまで夢にも考えてなかったのだ。

ふん、と草冠を見返した黒星が鼻を鳴らした。
「中々キレのいい霊圧してる。自前の斬魂刀を持たねぇとは思えねぇな」
「あいにくだが、もう斬魂刀は使わないと決めたんだ」
「同じ死神崩れ同士、仲良くできると思うんだがな？」
「まぁな、確かに。精霊廷に牙を向けた者って点でも同じだ」

こいつもまた、深刻な内容を深刻そうでもなく、よく言うよ・・・
そこまで思って、茜雫はハッとした。
――　牙を向けた・・・？
こいつ、確かにイケ好かないけど・・・悪い奴には見えないけど。
自分を庇うように刀を前に出した草冠の背中を見て、茜雫は心中つぶやいた。

「何ぼうっとしてる。早くどこかへ行け」
振り返った草冠の一言に、ムッと口を曲げてみても、草冠はもう前にし視線を戻している。

――　こいつ以外は、周りに気を使う必要はなさそうだな・・・
草冠は、周りの気配をざっと探って思う。
不幸中の幸いとでも言うか、既に一帯は瓦礫の山のため、今更多少壊れても、差はなさそうだ。
――　最も。周りに気をやるゆとりなんか、あるはずない・・・か。
茜雫の手前冷静に振舞っているが、正直、まともにやりあって勝てる相手とは思わない。
――　王印とか。ルール違反の「なにか」がない限りはな・・・

それに、目の前のこの男は。
「裏切り者って点では同じだが・・・惜しいな」
黒星を覆う、どこか獣のような野蛮な気配。
「俺は、破面と仲良くはできないな」
虚圏で長年過ごした草冠には分かる。この気配・・・間違いなく、破面のものだ。
「・・・お前とは、楽しめそうだな」
黒星がニヤリ、と満足げな笑みを漏らした。

## 【25】「父さんと母さんの仇っ！！」

「お前を殺して、思念珠は頂いていくぞ。
ちったぁ働かねぇと、ヒモ呼ばわりは癪だからな」
「思念珠がどこにあるっていうんだ？」
「すぐに分かる」
「言う気はない、か」
話が出来るのはここまで。察した草冠は、すかさず両手を顔の前にかざした。

「氷殺陣！」
詠唱ど同時に、両手の前に、幅数十メートル、高さも十メートルはある、巨大な氷の壁が出現した。
バキバキと瓦礫の山を叩き潰しながら、すさまじい勢いで、黒星にむかって殺到した。
「きゃ・・・」
瓦礫に足を引き込まれそうになった茜雫が、慌てて飛びのく。
―― どうなってんの、こんな量の氷が一瞬で・・・

「お前、氷雪系の死神か」
氷の壁の向こうで、黒星が一瞬で目の前に迫った、氷の壁を見やった。
手のひらを、氷に向かって突き出す。
その手の中に、ドス黒い力が溜まってゆく。
「！」
その気配に気づいた草冠が、とっさに茜雫の両肩を掴んだ。
「ちょっ・・・なによ！」
抗議を聞かず、その場から飛びのく。
「虚閃が来る！」

「セロ？って何・・・」
茜雫が言うと、ほぼ同時だった。
まばゆい閃光が、周囲を覆い隠し、茜雫は思わず目を閉じた。

「・・・何」
目を開けたとき・・・そこには、あの氷の壁はどこにもなかった。
パラパラと、氷のかけらが宙を舞う。
――　一瞬で、あの氷の壁を全部・・・吹き飛ばした？
「来るぞ！」
草冠の鋭い声が、茜雫を我に返らせた。

とん、と拳が地面を叩く。
その音に見下ろせば、わずか数メートルにまで迫った黒星の姿があった。
獣が獲物に襲い掛かる時のように、地に伏せるような体勢で、刀を構えた二人に、素手で殴りかかった。
その顔の半分を隠しているのは・・・不気味な、仮面。
「ちっ！」
とっさに刀を構え、突進してくる黒星を受け止めようとした草冠が、直前で身を翻した。
茜雫を抱え、脇へ飛びのく。

ズン！
地響きのような音を立て、拳が地面に食い込んだ。
それは瓦礫の山を突きぬけ、地面にクレーターのような穴を作った。
「受けなくて正解だったな」
立ち上がった黒星が、ニヤリと笑って二人を見た。
「でも、避けてるばかりじゃ勝てねぇぜ」
――　パワータイプの破面だが・・・厄介だな。

接近すればこの馬鹿力が黙っていまい。
かといって距離をとっても、あの虚閃がある。

「そういえば。氷雪系といえば、最近隊長になった天才児がいるらしいな」
不意に思い出したかのように言った黒星の言葉に、草冠は顔を上げた。
「ウチの息子と同じくらいの年だとか。まだそいつは生きてるのか？」
「・・・当然だろう」
急に低くなった草冠の声に、茜雫が彼の横顔を見上げる。
フッ、と対照的に黒星が笑った。
「それはよかった。一度、息子が戦いを切望していてな。まぁ、息子には勝てんだろうが」

草冠は、無言で刀を構えなおす。
まるで、「戦う理由ができた」とでも、言うように。
「・・・戦闘狂ごときに、冬獅郎は殺せない」

――　冬獅郎？冬獅郎って・・・
茜雫の脳裏に、自分を関門から精霊廷に連れてきてくれた少年がよみがえった。
「知り合いなの？日番谷冬獅郎と・・・」
「お前こそ知り合いか」
「こっちの質問に答えなさいよね！あたしは精霊廷で、何日か前に会ったけどさ」
「そうか。元気だったか？」
「元気・・・ていうか。ちょっとしたことじゃ表情も変わんない、図太そうな奴だったわよ」
一笑いで三文の損とでも言わんばかりの、仏頂面を思い出した。

――　こいつも、似たようなもんだけど・・・
そこまで考えて草冠を見上げた茜雫は、草冠がフッと微笑んだのを見て、目を疑った。

「そうか。相変わらずだな、アイツも」
「・・・友達、なの？」
あたしの問いに、草冠は微笑んだままあたしをチラリと見て・・・
すぐに、黒星に視線を戻した。
「俺は、精霊廷を一度裏切った男だ。今でも愛着なんて微塵（みじん）もないさ。
ただその形を維持するためだけに、多くのものを踏み潰してきた精霊廷にはな。
だが、殺されては困る奴もいる」

精霊廷に反逆した時も、あの少年だけは「特別」だった。
精霊廷が全て敵に回っても、彼だけは味方でいてくれるものだと、信じた。
だから、彼に討ち取られるという結末は、草冠にとって、最悪の幕引きだった。
しかし、命を永らえ、彷徨ううちに・・・草冠は判っていたのだ。
日番谷冬獅郎は、最初から最後まで、草冠の「味方」だった、ということに。
――　ここでは、負けられない・・・
草冠が、刀をグッと握りなおした時だった。

「！」
茜雫が、バッと背後を振りむいた。
「どうした？」
草冠の声にも反応せず、食い入るように瓦礫の向こうに目をやっている。

「・・・そう。ここにいたのね」
茜雫の口から、彼女のものとは思えぬ、低く震える呟きが生まれた。
かすかに感じる、両親の血の気配。これを頼りに追ってきたのだ。
こんな近くに迫っていて、気がつかないはずがない。
「父さんと母さんの仇っ！！」
「おいっ！」
差し伸ばした草冠の手を振り払い、脱兎のように茜雫は駆け出した。

## 【26】「は・や・て」

――　何だ？一体誰が・・・
その手を向けた先に、草冠は見知った霊圧を感じ、その場に凍りついた。
「お前やっぱり・・・なんでこんな所に！」
それは、日番谷冬獅郎の霊圧に、間違いなかった。
何がどうなってるんだ・・・？

「・・・違う」
背後に聞こえた黒星のつぶやきに、草冠は彼には珍しく、慌てた素振りで振り返った。
「あれは・・・『疾風』じゃない」
「・・・ハヤテ？」
「どけ！」
草冠を突きのけ、茜雫の向かった先へ向かおうとする。
それは、黒星がはじめて見せた、焦りに見えた。
その黒星に、草冠は刀の切っ先を突きつけた。

「てめぇに関わってる時間はねぇ！」
「こっちだって、お前を通すわけにはいかない！」
二人の怒鳴り声が、ほぼ同時に瓦礫の山に響き渡った。
――　こいつは、ここで俺が倒す！
目の前のこの獣のような男と、日番谷を出会わせたくはなかった。
「そうか。じゃあ、お前から殺すぞ」
見下ろした黒星の瞳に、野卑な輝きが宿った。

「おい、ガキ！それ以上中に踏み込むんじゃねぇ！」
まだ濃い土煙が晴れない中、煙に突っ込むように足を踏み入れようとした少年の肩を、爆発から逃れた男が捕まえた。
「中で黒星が暴れてる！誰にも、どうにもできねぇよ」
「黒星？」
背を向けた銀髪が、ぴくり、と震える。

少年はくるりと振り返った。
その、氷河に落ちた影のような、翡翠の瞳が男を射る。
「・・・なにっ！」
腕を切るような冷たさが、少年の肩をつかんだ指先から駆け上がってくる。

「悪いな」
とっさに手を離した男を見上げ、無表情に少年・・・日番谷は声をかける。
――　この中に、草冠の・・・神崎茜雫の霊圧がある！
たいしたダメージは受けていない。だが、問題はそんなことではない。
恐れていたことが、起きてしまった。そういう気持ちだった。
この黒星の霊圧の高まりが、精霊廷で感じ取れないはずはない。
今頃、黒崎一護たちが目の色変えているだろう。
「ちくしょう、なんで出会っちまうんだ・・・」

黒星に孤虹。一護。茜雫。草冠。
彼ら彼女らは全員、精霊廷のもとで、同じ死神として生きたことのある者たち。
今の立場でなければ、今のタイミングでなければ、分かり合えたかもしれない。
だが、これでは立場もタイミングも最悪だ。

そして、日番谷は、その時は気づいていなかったのだ。
そして自分も既に、「出会い」を果たしているということを。

「ちょっと・・・離してよ！」
その声に振り返った日番谷は、見覚えのある茶色い髪が揺れるのを見た。
「アイツ・・・颯（はやて）！」
自分と同じように、踏み入ろうとしているところを、野次馬に止められている。
普通の子供が、大人の男の腕力にかなうはずがない。
「離して！いかなきゃ・・・！」
それでも必死に抗う颯の姿には、何か尋常でないものがあった。

「お前！何やってんだ！」
この忙しいのに。チッ、と心中舌打ちしながら、日番谷は颯の元に走った。
「あ！冬獅郎！頼む、この人たちを何とか・・・」
「人を悪者扱いすんじゃねえよ！親切に止めてやってるのに・・・！」
「父さんが！父さんが、この中にいるんだ！止めなきゃ！」
「と・・・父さん？」

母さんの次は「父さん」か。
しかし、この中で今マトモに感じる霊圧は・・・
草冠。茜雫。そして・・・

「父さんは『死神崩れ』なんだ！早く止めないと、みんなが！」
「・・・颯。お前、まさか」
気づけ。自分の中で、警鐘が鳴り響く音が聞こえる。
まさか・・・

高まった鼓動に拍車をかけるように、背後から足音が聞こえた。
ざっ、と瓦礫を蹴る音に、日番谷と颯は同時に振り返った。
その二人の視界に、豹のように宙を舞った黒い人影と・・・黄金色の輝きが見えた。
怒涛の勢いで、鋭い切っ先が疾風をまっすぐに狙う。

「颯っ！！」
とっさに、日番谷は颯の肩を押し、小柄な体を突き飛ばした。
人影に背を向けた日番谷の耳を、金色に輝く切っ先が掠める。
それが「錫杖」だ、と日番谷が気づくと同時。颯の頬を、その切っ先が抉った。
鮮やかな赤い雫が宙を舞う。

「ちっ！」
殺気が十二分に込められた一撃だった。
日番谷はとっさに、背中に担いだ氷輪丸を抜き放つ。
ガインッ！！
金属音と火花を残し、氷輪丸と錫杖が真っ向から打ち合う。
力負けした錫杖が、背後に跳ね飛ばされる。
体勢を崩した人影が、近くの瓦礫の上へと降り立った。

「・・・」
翡翠と、琥珀の瞳が、驚愕に見開かれた。
互いに、相手に向けた剣先が揺れる。
「神崎・・・茜雫」
「あ、あんた・・・日番谷冬獅郎じゃない」

なんで？
対峙する相手が誰か知ると同時に、心に浮かんだのは同じ言葉。

「な・・・んで、邪魔をするの！」
打ち合った衝撃にビリビリと痺れる腕を押さえ、茜雫は日番谷に怒鳴りつけた。
「なんでって・・・お前こそ、一体何やってんだ！」
怒鳴り返した日番谷は、背後で颯が身を起こす気配を感じた。
「颯、大丈夫か？」
茜雫を見据えたまま、声をかけた。

「は・や・て」

その言葉が、茜雫の口から紡がれ・・・日番谷は、ハッと目を見開いた。
「違う！こいつはお前の仇じゃねぇ！！」
「血導貫で追ってきたのよ？そいつの体には、あたしの親の血が残ってるの！
間違えるはずがないわ！！」
なに？
日番谷の頭で、何かが凍りつく。

「血導貫」を使っていて、相手を途中で取り違えるなどとは聞いたことがない。
――　父さんは、死神崩れなんだ。
その言葉が日番谷の頭をよぎり・・・日番谷は、頭を振った。
「こいつは、人を殺せるようなヤツじゃねぇ！！落ち着け！」
日番谷が、そう叫んだ時だった。
茜雫の肩越しに、瓦礫の山が爆発するのが見えた。

「ちっ！！」
その土煙の中から現れた人影に、日番谷は動揺も忘れ、身を乗り出

した。
「草冠っ！！」
「冬獅郎？」
自分を見下ろして、声をあげたのは、間違いようもない草冠の姿。
そして、その向こうに佇むのは・・・
「黒星か！」
日番谷は、氷輪丸の切っ先を黒星に向けた。

## 【27】「冬獅郎！逃げろっ！！！」

何がなんだか分からない戦況だが、黒星と戦う必要がない、という状況だけはありえなさそうだ。
初めて見る黒星は、もはや姿も霊圧も死神ではなく・・・破面そのものだった。
しかし、その割れた仮面の向こうの訴えるような色に、日番谷は視線を奪われる。

黒星は、こう言っていた。
「オイッ！颯に血を見せるな！」
血を・・・見せるな？
「どういう・・・」
日番谷が、黒星に声をかけようとした時だった。

「冬獅郎！逃げろっ！！！」
何かに気づいた草冠が、日番谷を見て絶叫に近い声を上げた。

――　いつまで生ぬるいことを言ってるんだ？
自分の頭の中で、冷静な誰かが言う声が聞こえたような気がした。
――　途中から、気づいてただろ？
背後で、殺気がぐん、と膨らんだ。そう思った刹那。
日番谷の左肩を、熱い何かが貫いた。

「・・・あっ・・・？」
全ては、スローモーションのように見えた。
驚愕に見開かれる、草冠と茜雫の瞳。
自分の肩を突き抜けた、銀色の物体が「斬魂刀」だと。
飛び散った紅い液体が、自分から噴出した「血液」だと。

悟ると同時に、熱い痛みが全身に広がる。

「冬獅郎っ！」

左肩を抑え、地面に転がった日番谷を見て、草冠と茜雫が悲鳴を上げた。

駆け寄った茜雫が日番谷を支えると、錫杖・・・「弥勒丸」を日番谷の背後の人物に突きつけた。

「アンタ、最低ね！冬獅郎はね、アンタを庇おうとしたのよ！それを・・・」

何を・・・言っているんだ？

誰としゃべっている？

俺の背後にいたのは・・・

「それがどうした？」

茜雫に返した、冷たさすら感じないほどに平坦な声。

それが鼓膜を叩くにいたって、ようやく日番谷は理解した。

「・・・お前は、誰だ」

激痛に顔をゆがめながら、目の前に立つ少年を見返した日番谷の口をついたのは、そんな言葉だった。

柔らかく、ウェーブがかった茶色の髪。白い肌。

外見は、変わらない。その左頬から、血が流れていることくらいだ。

しかし、目が違った。

穏やかな鳶色だった瞳の色は、今は底の見えぬ漆黒にしか見えない。

まるで・・・闇を覗き込む、穴のように。

そして、小柄な体から発せられる気配は、さっきまでとは別人だ。

その手には、見慣れぬ形の斬魂刀をぶらりと下げていた。

蒼みがかった刀身を、日番谷の血が滑ってゆく。

「俺の名は、疾風(ハヤテ)」
少年の薄い唇が、言葉を発した。

「こいつ、まさか。二重人格・・・なの？」
日番谷を庇うように、身を乗り出した茜雫が、つぶやく。
「日番谷冬獅郎。お前のことは知ってる。ずっと会いたかったんだ」
酷薄な瞳が、日番谷をまっすぐに射る。
ヒトの眼じゃない。日番谷が初めに思ったのは、それだった。

「疑問だったんだ。精霊廷の天才児と俺、どっちが強いんだろうってな。
想像通りだ・・・お前、確かにイイぜ」
「颯、お前・・・」
口からチラリ、と真っ赤な舌が見えた。ニヤリ、と颯・・・いや、疾風が獣のように笑った。
「誰が生き残り、誰が我を通すのか。始めようぜ？祭りをよ」

どくん、どくん、と胸が烈しく波立っていた。
ほんの半月前までは、現世で普通の女子高生としての生活を送っていた。
普通の日常。普通の両親。
つまらない、くだらないと言いながらも・・・
愛していたのだ。
亡くしては、生きてはいけないほどに。

「夕闇に誘え。『弥勒丸』」
ゆらり、と立ち上がり、弥勒丸を一振りする。

同時に瓦礫の山の中に、凶暴な風が吹き荒れた。
瞼の裏に、闇の中でも鮮やかな血がよみがえる。
ぐっしょりと雨と血にぬれたスーツ姿で、庭に横たわる父親。
唖然とした表情で倒れ伏した母親の開いたままの瞳に、ポツリと落ちた、雨。

「あんたを、絶対に許さないわ」

ここで殺されれば、自分の体は輪廻からはずれ、転生することもないだろう。
それでもかまわないと思った。
もう・・・両親と暮らした日々は、戻ってこないのだから。

「ごめんね」

茜雫は、自分の傍らで荒い息をついている日番谷を見下ろした。
瓦礫に背中を持たせかけ、傷ついた肩を押さえている。
もう・・・戦えない。一目で分かる重傷だった。
「もう一人の、あんたの『友達』だった颯は、いいヤツだったのかもしれない。
でも、あたしの仇と同じ体を持ってるんなら・・・容赦はできないわよ」
「・・・俺に気を使ってる場合じゃねえだろ。気ぃ抜けば一瞬で殺られるぞ」
間を空けず、日番谷はそう返した。

――ごめんね。
茜雫はもう一度、つぶやく。
戦場では一瞬の迷いが、直接的に死につながる。

仲間をおろそかにするとは思えない日番谷が、敢えて止めないのは茜雫を迷わせないためだ。
「命はひとつだ、落とすなよ。・・・援護する」
「うん！」
瓦礫の影から、歩み寄ってくる少年の気配をうかがう。
注意を凝らすまでもなく、肌にチリチリと感じるほどの殺気が、疾風からは放たれていた。

日本刀・・・というよりも、巨大な山刀のような代物を肩に担いでいる。
疾風の腕くらいの長さの刀身は、日本刀と違って全く反りがなかった。
無骨な刃の幅は１０センチに迫り、かなりの重量がありそうだ。
刃を支える柄は巨大で、軽々と片手で握り締めている。
――　あれで薙ぎ払われたら、腕の一本、軽く飛ぶわね。
接近戦は、不利。
茜雫は日番谷とは離れた方向に、軽く跳び下がった。

「仇討ち、か」
疾風は茜雫の決然とした表情を見返し、嘲笑(わら)った。
「どうしてほしいんだ？土下座して謝らせたいなら、やってもいいぜ？」
「いらないわよ」
沸騰寸前の怒りが、腹の底からこみ上げてくる。
「謝らせてくださいって、あんたが言うまではね！」
こいつが、どれだけのことをしたのか。それを絶対に思い知らせてやる。

茜雫が熱するは熱するほど、疾風は余裕の表情を濃くしてゆく。

「なんで、人間を殺しちゃいけないんだ？どうせ百年弱で死んでゆく奴らじゃねえか」
「なんだって・・・」
「どいつもこいつも、撫でてやれば次々と死んでゆく。
死ねば腐ってゴミになる。そんな命に価値なんかない。お前にも、俺にもな」
疾風の瞳に、冥い光が宿る。
「価値があるとしたら、死ぬその瞬間だけだな。俺はそれに魅入られた」
「・・・狂ってるわよ、あんた」
茜雫が吐き捨てた。

――　来る。
日番谷は、二人が接近するのを横目で見つつ、口元で小さく鬼道を唱える。
今の状態でも、茜雫の霊圧を１とすれば、疾風の霊圧は１０を越えている。
自分が援護しなければ、殺されるのは目に見えていた。
――　「僕ら友達でしょ？冬獅郎」
去ろうとした自分を引き止めた、無邪気な颯の言葉を思い出した時、言葉が途切れた。
「許せ・・・」
二重人格とはいえ、その手が茜雫の親を殺してしまった以上、もう後戻りはできないのだ。
その時、
「覚悟っ！！」
茜雫がいち早く地面を蹴った。

## 【２８】「殺しあおうじゃねぇか、トモダチよ」

一足飛びに疾風に迫ると、自分よりも頭ひとつ分低い疾風の肩に、錫杖を打ち下ろした。
「ふん」
疾風はつまらなさそうに鼻を鳴らすと、肩に担いでいた斬魂刀を無造作に打ち下ろした。
ガイン！！
刀と錫杖がぶつかり合い、火花を散らす。
火花の下で、疾風の酷薄な瞳が、スッ、と細められた。
「まさかこんな力で、俺を殺す気じゃねえだろうな？」

――　こいつ、ものすごい力・・・！
茜雫は歯を食いしばる。
全力で打ち込んだつもりだ。
それなのに、まるで鉄柱を相手にしているかのように微動だにしないのだ。
――　でも、刀はこれで封じた！
弓なりにしなった弥勒丸が、黄金色の光芒に包まれる。
「なめんじゃないわよ！」
疾風が怪訝そうに眉をしかめた、次の瞬間。
「風刃！」
凛とした茜雫の声が響き、同時に錫杖から、鋭い真空の刃が打ち出された。
その数、実に十以上。
こんな至近距離で、斬魂刀を封じられた状況で、避けられる技ではなかった。
「・・・！」

日番谷が、残された右腕を突っ張って身を乗り出す。
――　やったか？
極限まで集中した茜雫の刃は、本来の彼女の力をとっくに凌駕している。
正直、このレベルの一撃を放てるとは、思っていなかった。
ふわり、と死覇装がふくらみ、茜雫が地上に舞い降りる。
いつ飛び出してこられても返せるよう、油断無く弥勒丸を構えた。
「後ろだ神崎っ！」
日番谷の声が唐突に響き渡り・・・茜雫はハッと振り返ろうとした。

「ちょっと面白かったぜ。手品程度にな」
ガッ、と茜雫の長い髪が、背後から乱暴に掴まれる。
姿を視界に捉える間もなかった。
――　やば・・・！
茜雫がイチかバチか、背後に弥勒丸を突きこもうとした時、
「六杖光牢！」
日番谷の鋭い声が、間髪いれず放たれた。
完璧なタイミングだった。
「ちっ！」
茜雫の耳元で、舌打ちが聞こえる。

振り返った瞬間・・・自分から３０センチほどの距離で、疾風がその動きを封じられていた。
振りかぶられた刃は、茜雫の頭上、わずか数センチにまで迫っていた。
「バカヤロウ、早く離れろ！」
「う・・・うん！」
茜雫が慌ててその場から飛び下がる。
「速さには自信があるんだがな。あの一瞬で捉えられるとは思わな

かったぜ」
「・・・だろうな」
疾風に向けた日番谷の右腕が、その抵抗力の大きさに震えている。
日番谷自身、実は疾風のあの瞬間の動きは見えていなかった。むしろ山勘だ。

「ええい！」
体勢を立て直した茜雫が、状況を見て取ると同時に、再び錫杖を手に疾風に打ち込んだ。
「遅ぇな」
にぃ、と疾風が笑った。
その全身の筋肉が、きしむ。恐ろしい力が加えられてゆく。
――　ちっ！押さえられねぇ・・・
疾風を拘束した六杖光牢の周りに、パシッ、と光が走る。
血管が浮き出した腕の皮膚が弾け、細かい血が飛ぶ。

「惜しかったな。両腕で撃ってたら、押さえられたかもしれねぇのに」
「よく言うぜ・・・てめぇが俺の片腕、使い物にならなくしたんだろうが」
日番谷が言い終わる前に、バシッ！とひときわ大きな音が響き、六杖光牢が跳ね飛ばされた。
「！」
走り寄ろうとした茜雫が、途中で足を止める。
「逃げろ！」
日番谷が叫んだ直後・・・豹のように走り寄った疾風が、茜雫の胴に拳を打ち込んだ。

「破道の一、衝！」
とっさに日番谷が次の破道を唱える。

その一撃は疾風の左足を直撃し、茜雫に一撃が叩きつけられる直前、その体がよろめいた。
「ぐっ・・・！」
くぐもった悲鳴を上げ、茜雫の体がダン、と地面に叩きつけられた。打たれた腹を押さえ、悶絶する姿を、冷ややかな疾風の瞳が見下ろす。
「さっきの小技がなけりゃ、大穴空けてやったのに。ちょこまか邪魔しやがる」
その一瞥が、日番谷に注がれた。

――　敵に回すと最悪だな、コイツ・・・
肩の痛みになんてかまってられない。
このまま座ってれば、肩よりもひどい一撃を食らうことになる。
日番谷は歯を食いしばり、立ち上がった。
怪力と、素早さ。両親の特長を、両方とも引き継いでいる。
「これで邪魔者はいねぇ。殺しあおうじゃねぇか、トモダチよ」
日番谷が、ぐっと歯をかみ締めた。
怪しい瞳が、日番谷を真っ向から射た。

「ちっ、冬獅郎！」
それを遠くから認めた草冠が、日番谷の方へ身を乗り出す。
しかしそれと同時に、鼻先まで迫った黒星の一撃を紙一重で交わし、飛び下がった。
「どけ！！」
ざっ、と動物のような身軽な動きで降り立った黒星を、にらみ返す。
そもそもこの男は、未だ自分の斬魂刀すら出していないのだ。
しかし・・・黒星が肩越しにチラリと振り返り、疾風を見つめる視

線に、草冠は気づいた。
「あの疾風とかいう少年を、元の人格に戻す方法はないのか！」
「・・・『疾風』が一度起きちまった以上は無理だな。
元々『疾風』は、『颯』より強い人格なんだ」
「だからって、ずっとそのままな訳じゃないだろう！現にさっきまでは・・・」
「『疾風』が気を失うか、『颯』に自分から意識を譲り渡せば話は別だ。
だがこの調子じゃ、それは望めそうもないぜ」

「他人事みたいに言うな！」
草冠が、大声で黒星を怒鳴りつけた。
「あそこにいるのはお前の息子なんだろ！親子なんだろうがっ！
殺人鬼になった自分の息子一人、止められないのか！」
草冠の言葉に、黒星がわずかに、身じろいだ。

その声に、日番谷に歩み寄ろうとしていた疾風が、振り向いた。
黒星と疾風の視線が、数十メートル離れたところで交錯する。
「親父とお袋が求めてんのは、『颯』じゃねぇ。俺だ」
疾風がつぶやいたその言葉は、草冠にも、黒星にも向けられてはいなかった。
「二人を『裏切り、追放した』精霊廷に、復讐するために必要なのは、力だけだ」

## 【29】「死神代行ッ、黒崎一護だ！」

――　親子・・・
朦朧(もうろう)とした茜雫の意識に飛び込んできたのは、草冠の怒号だった。
「とう・・・さん。かあ・・・さん」
どこへ行くの？
瞼の裏には、変わらぬ父親と母親の姿が、見える。
光に包まれて、ふたりとも笑ってた。
「ちく、しょう・・・」
あの時、何も出来なかった。
そして今度も、何も出来ずに終わるの？

「はや、て」
ゆっくりと、目を開ける。
気づけば、自分の体が、さっきの両親のように光に包まれていた。
「なんだ？」
疾風が振り向く。その視線に、半ば呆然としていた茜雫の意識が、一瞬で現実へと立ち戻った。
「あんたは許さない！」
怒鳴ると同時に、暴力的な力が、自分の中に吹き荒れた。
「なに？」
日番谷が、草冠が、黒星が。戦いの手を止めて、茜雫を見やった。
「・・・思念珠か！」
黒星の叫びを捉えた日番谷は、耳を疑う。
――　思念珠？どういうことだ・・・？

『許さないわ。あんただけは』
その場に、茜雫の声がエコーのように響く。
光の包まれた茜雫は、どこか茫洋とした瞳で、遠くを見つめていた。

『殺す・・・』
その指先が、疾風のほうに向けられる。
「あ？思念珠の力が何だってんだ」
不審げに、疾風が刀を前に構える。
気づけば、日番谷は叫んでいた。
「颯っ！」
事情がさっぱり分からないが、これが本当に「思念珠」だというなら。飲まれればお仕舞だ。
そこまで考えた日番谷は、ハッ、と息を飲んだ。

『冬獅郎・・・』
伸ばされた茜雫の手が、ぴくりと止まった。
その瞳が日番谷に据えられ・・・日番谷はとっさに、口ごもる。
その、コンマ数秒の間だった。
「王虚の閃光（グラン・レイ・セロ）！」
ハッ、と日番谷と草冠が振り返った先に、黒星の姿が目に入った。
と思った時には、周囲はまばゆい閃光に覆い隠されていた。
「神崎！！」
王虚の閃光（グラン・レイ・セロ）は、虚閃を大きく上回る、破面の最強の技のひとつ。
あれだけの攻撃を、あの状態の茜雫が避けられるとは思えない。
しかしそれは、瞳に光が焼きつく、ほんの一瞬。

「かん、ざき・・・」
光が消え去った痕跡・・・数百メートルにも及ぶクレーターを見つめ、日番谷は言葉を失った。
――　俺が、颯を呼んだから・・・
岩の上についた手が、小刻みに震えた。
「く、そっ・・・」
俯き、きつく地面を握り締めたときだった。
「誰だ、てめえは！」

黒星の怒号が、日番谷の頭上を通り抜けた。

「・・・俺か？」

2メートル近くありそうな、巨大な斬魂刀を、ぶん、と肩に担ぐと、少年は上空で、ニヤリと笑った。

小脇には、気を失った茜雫を抱えている。

「死神代行ッ、黒崎一護だ！」

「カッコつけてる場合か！」

恋次が、その後頭部に手刀を落とした。

「皆大丈夫か！」

恋次の後ろの穿界門から飛び出してきたルキアが、周囲を見渡す。

「なんとかな」

返したのは、日番谷だった。

茜雫を見て、ホッと息をなでおろす。

そんな日番谷を、一護はにらみつけた。

「抜け駆けはいけねーよ、お前よ」

「いろいろあったんだよ」

ため息混じりに、日番谷が返す。

「いろいろ・・・なぁ。そーみたいだな」

一護は、廃墟と化した周辺と、草冠を交互に見て言った。

「ひ、日番谷隊長！その傷は・・・」

ルキアが、日番谷の傷を見るなり声を上げる。

「ルキア。茜雫も一緒に連れてってくれ」

「あぁ、分かった！気をつけろよ一護」

一護から、ぐったりと気を失った茜雫を抱き取ると、ルキアは一護を見上げた。

――　いち、ご。
その名前に、茜雫はふっ、と瞳を開けた。
――　あぁ。追ってきたんだね。「また」。
そこまで考えて、一護の横顔を見やる。全く、体に力が入らない。
ルキアに抱かれて、その凛とした横顔が、遠ざかる。
言いたいことがいっぱいあるような気がする。
でも、うまく言葉にならない。
そう思ったとき、また意識が遠のいた。

## 【30】「俺を誰だと思ってんだ」

「日番谷隊長！今すぐ治します」
瓦礫の影に茜雫の体をもたせ掛けたルキアが、すぐに日番谷の元に向かった。
そして・・・日番谷の負った傷を目の当たりにして、言葉を失った。
死覇装の上からだからよく見えないが、おそらく肩の骨まで断っているだろう。
完全にコントロールを失って、だらりと垂れた腕を伝い、血が滴り落ちていた。
「先に神崎を診てやれ。かなり消耗してる」
「は？し、しかし！」
「隊長命令だ」
ぐっ、とルキアが言葉に詰まった。

日番谷のほうが、どう見たって命に関わる。
それに日番谷冬獅郎の右腕は、戦況をひっくり返す力を持つかもしれないのに。
「バカヤロウ。俺がどれだけの戦闘をくぐってきたと思ってる。これくらいは慣れっこなんだよ」
何か言いたそうなルキアを見返し、日番谷は言った。

――　いくら怪我になれていようとも、痛みがなくなる訳じゃないだろうに・・・
仲間が傷ついていれば、当然のように自分より治療を優先させる。
長生きできず、理屈にも合わないタイプだと思うが・・・
そういう器の大きさを見せられるのは、嫌いじゃない。
「・・・分かりました。少しだけ、お待ちください」
ルキアはうなずくと、ぐったりと脱力した茜雫を振り返った。

「そういう訳だ。もう少し踏ん張ってくれ、草冠」
「こき使ってくれるぜ・・・」
スタッ、と草冠が、日番谷の隣に飛び降りた。
「でかいほうは俺たちに任せろ！」
一護と恋次が、黒星の前に着地する。

「どう見る？戦況を」
日番谷は、傷口を押さえながら草冠を見やった。
「負けるんじゃないか？」
「他人事みてーに言うな！」
飄々とした草冠の言葉に、日番谷が苦笑した。
「まぁ、戦い方しだいさ。お前、相手の動きは一度見たら覚えられるんだったな？」
草冠の瞳は、こちらを見据えている疾風に向けられている。
「真央霊術院時代も、お前の読みの速さには苦しめられたもんだった」
「あの動きを読めって言ってんのか？」
日番谷は、草冠の肩越しに疾風を見やる。

「できないのか？」
その声音は、単純な質問というにはあまりにも、挑発的。
草冠の菫色（スミレ）の瞳と、日番谷の翡翠色の瞳が、至近距離で交錯する。
ややあって、日番谷がため息をついた。
「俺を誰だと思ってんだ」
「決まりだな」
疾風が、ゆったりとした足取りで歩いてくる。
草冠は、再び自分の刀を構えつつ、返した。
「完全なタイミングで出て来い。見誤るなよ」

「おぉぉぉっ！！」
一護の雄叫びが、その場に響き渡る。
緩慢な動きで、斬魂刀を向けられた黒星が、突進してくる一護を見やった。
「お前の戦い方に名前をつけるとしたら、ひとつだな」
焦る様子もなく、居間でテレビでも見るかのように、腕を組んだまま一護を見た。
「『猪突猛進』」
「って、そのまんまかよ！」
先手必勝！
一護は、大きく斬魂刀を振りかぶると、黒星の肩口に思い切り振り下ろした。

「っおお？」
恋次の意外そうな声が響く。
黒星の体が、あっさりと吹っ飛び、背後の瓦礫に叩きつけられたからだ。
「なっ、なんか悪いことしたか？俺・・・」
一護がその場に着地すると、斬魂刀を担いで恋次を振り返った。
「まぁ感謝されはしねーだろうよ。ていうか、いいのかよこれ・・・」
恋次が言いかけた時だった。瓦礫の中から、ひょい、と人影が身を起こす。
それが黒星だ、というのは火を見るより明らかだ。

「・・・今、斬月が当たらなかったか？」
「当たったが、それがどうした」

黒星は、憮然としているように見えた。しかし、その体には傷ひとつ無い。
「お遊戯の時間か？てめーの攻撃は軽すぎる！廊下に立ってろ」
その瞬間、一護の頭に浮かんだのは、なぜか涅だった。
更木にノリは近いが、この快楽を追い求めるところは、マッド・サイエンティストならぬマッド・ソルジャー・・・戦闘狂、だ。

「おい、そっちの、めでたい色の頭のヤツ」
「どっちだよ？」
「めでてーと言えば、オレンジより赤だろ。お前、刀構えろ。今打ち込むから」
「ハッ？てめー、なに・・・」
恋次があからさまに胡散臭い表情を作りながらも、斬魂刀「蛇尾丸」を構える。
「構えたな？」
「お前いい加減に・・・」
真面目にやれ、と恋次が言おうとした時だった。
ひゅっ、と黒星の姿が掻き消える。
緩慢な動作ばかり負っていた恋次には、全くついていけないスピードだった。

「恋次っ！！」
一護が振り返る。
なんだか分からないがヤバイ、と恋次がその場から離れようとした時、ガシッ！とその腕が掴まれる。
「うぉ？」
ヒトの力というより、熊にでも振り回されたようなバカ力で、恋次の体は吹っ飛ばされた。
・・・一護に向かって。
「おおぉ！？」

とっさに受け止めようとした一護だが、とても無理なスピードと力だった。
二人の体が、地面に何度も打ち付けられ、転がる。

「真面目にやれ！てめーら」
地面に手をついて起き上がろうとした二人を、黒星が一喝した。
「さ、先に言われた・・・」
「バカヤローども・・・」
それを見守っていた日番谷が、ぼそりと漏らした。
「読め・・・ますか？彼らの戦いが」
「読む気がしねー。あっちは勝手にやってりゃいいけど、こっちは・・・」
日番谷は表情を曇らせた。

## 【31】「残念系だ、お前らは」

「・・・ッ！」
吹っ飛ばされた草冠は、刀を地面に突きたて、勢いを殺した。
そして、頬を流れる血をぬぐう。
「ちっ、酔狂なことだぜ」
自分の父親を遠目で見つつ、疾風は吐き捨てるように呟いた。
しかし、その表情は決して不快そうではない。
「つまらねーことを面白くするのに心血注いでやがる。どうせ無駄なのに」
ピッ、と刀にまとわりついた血を、地面に払い落とした。
「俺は親父とは違うぜ。決着は速いに越したことはねえ」

――　なんてヤツだ・・・
草冠は、全く顔色ひとつ変えない疾風を見やり、心の中で舌を巻いた。
これほどまでに天才的なセンスを持っている者を、草冠は日番谷冬獅郎以外に知らなかった。
感じ取れる霊圧は、日番谷の方が強い。
しかし、戦いのテクニックについては、疾風のほうが上に見えた。
少なくとも、斬魂刀を持たない状態で勝てる相手じゃない。

草冠は、チラリと日番谷を見やった。
その傍らにルキアの姿があるのを見て、わずかにホッとした。
やっと茜雫の治療が終わり、日番谷の順番が回ってきたらしい。
――　早くしてくれよ・・・
自分が、こうして立っていられる間に。
「しかし、てめえの仲間は卑怯モンだな」

疾風の言葉に、草冠は顔を上げた。
疾風の瞳が、まっすぐに、瓦礫の向こうの日番谷に注がれる。
「お前に戦わせて、自分は高みの見物とはな。情けねーにもほどがある」
戦いの最中、日番谷はただの一度も、疾風から注意を逸らさなかった。
それに気づかない疾風ではなかった、ということだろう。

真っ向から侮辱されても尚、日番谷は眉ひとつ動かさなかった。
「・・・余所見してる場合かよ」
日番谷は、わずかに目を細めて言った。
「そんな余裕をくれてやるほど、草冠は優しくねーぞ」
「！」
疾風が間髪いれず、振り返る。その視界いっぱいに、草冠が振り下ろした刀が飛び込んできた。
「くっ！」
双方が振りかぶった刀がぶつかり合い、二人は反動で飛び退いた。

「・・・ちっ、草冠がやばい！」
黒星と向き合った一護が、恋次を横目で見やり、舌打ちをする。
「俺達だって、結構やべーけどな」
ぜぇ、ぜぇ、と息を切らしながら、恋次が答える。
額から流れてきた血を、拳でグイッとぬぐって続けた。
「あのヤロー、鋼鉄ででもできてんのかよ？倒れる気がしねー・・・」
二十メートルほど先にたたずむ黒星に、その目は向けられていた。

近づけば、拳が飛んでくる。
それも一撃食らえば、命まで持っていかれるような重い拳が。
かといって、離れていても虚閃で狙い撃ちされるのを待つだけだ。
「おめー、鬼道とか打てねーのかよ！」
イライラと一護が恋次を見やり、恋次は唇を突き出した。
「おめーよりはマシだ！」
「じゃ打てよ」
「打ってみれば？」
遠くから黒星の声が聞こえる。
見れば、瓦礫の山のなかに、退屈そうに腰を下ろしている。

「でも期待しても無駄だろうな。残念系だ、お前らは」
「分類すんな！・・・てめー、やる気あんのか！」
「あるに決まってんだろ。あんまりつまんねー攻撃してくるから、励ましてやってるだけだ」
敵に励まされて戦うなんて、状況としてあんまりにあんまりではないだろうか。
戦闘で鳴らした、もと十一番隊の一員として、こんな扱いに耐えられる頭の構造はしていない。

「君臨者よ！血肉の仮面・万象・・・」
「馬鹿恋次、お前、暴発が得意だろう！」
その詠唱を聞いたルキアが、慌てて恋次に声をかける。
「い？」
聞きつけた一護が、慌てて遠くへ離れる。
――　信頼関係ってもんがないのかね、こいつらは・・・
とはいえ、味方が逃げるような攻撃なら、ある意味それなりに見られる技なのかもしれない、と黒星は思った。

一方、恋次の耳にはルキアの静止は聞こえていない。

チラリ、と草冠が恋次のほうを見やる。
「そんなモンか」
恋次の周りに膨れ上がった霊圧を見て、肩をすくめた黒星が、
「ん？」
眉をひそめた。
「なんだ？」
ルキアも、それに気づく。
恋次の詠唱に重なるかのように、もうひとつの低い声が聞こえたからだ。

「海隔て逆巻き　南へと歩を進めよ！」
黒星が立ち上がる。
草冠が、ニヤリ、と笑い、手のひらを前に突き出した。
「破道の三十一、赤火砲！！」
次の瞬間。
数十メートルはあろうかと思われる巨大な炎が、瓦礫の山を包み込んだ。

「な・・・」
恋次は見たことも無い己の大技に、その場に固まった。
周囲はもうもうとした煙に覆われ、赤火砲が直撃した地面にいたっては、熱で溶けていた。
黒星、疾風、どちらも今の爆発には巻き込まれたはずだ。
「やっと俺の才能が開花しやがった」
「バカが・・・」
その背後に、スタッと草冠が飛び降りた。
「そんな下手な鬼道でも隊長格になれるとは、平和な時代でよかっ

たな」
「！あぁ？」
「俺が軌道修正して、暴発を抑えてやったんだ。そうでもしないと今頃お前、黒焦げだぞ」
「ぅ・・・」
ぐうの音もでない。助けられたと知った恋次が、真っ赤になる。

「鬼道ってのは、二人で同時に撃ったりできんのか？」
パチパチと燃え広がる炎を見ながら、一護が感服したように言う。
「まぁな。こいつの一撃は、破壊力『だけ』はあったからな。利用させてもらった」
「あー。破壊力『だけ』な」
「だけって言うな！」
「何をじゃれておるのだ、お前ら！」
肩を怒らせて一護と草冠に向き合った恋次に、ルキアが叱咤の声をかけた。

## 【32】「裸足で逃げ出せ、てめーら！！」

「でもよー。今のは効いただろ。さすがに」
「なぜ私に聞くのだ。相手に聞け！」
融通の聞かなさを前面に出して、ルキアが一護に言い返した。
そして、額に浮かんだ汗を腕で拭う。
――　しかし、これはさすがに・・・
爆発から数十メートル離れていても、チリチリと産毛が焼けそうなほどの熱さなのだ。
これをまともに喰らえば、黒星や疾風とて、無事では済まないはずだ。

「・・・イヤ、待て。まだ分からねー」
瓦礫の上から戦況を見下ろした日番谷が、眉をひそめた。
「合同技の弱点は、一人で撃つ時よりも焦点が合わなくなることだ。威力はとんでもなく上がるが、本来敵が多数の時に一番の威力を発揮できる」
「お前と撃ったことしかなかったからな。
こんなに拡散したのは、一緒に撃った奴が悪かった」

草冠が飄（ひょう）げた仕草で肩をすくめ、日番谷を見上げた。
もちろん、恋次の方はチラリとも見ない。
「アカラサマな嫌味言ってんじゃねーよ！そっちが合わせてきたんじゃねーか！」
恋次が噛み付くが、草冠は見向きもせず、黒星と疾風がいたほうを見やった。

その時。

「裸足で逃げ出せ、てめーら！！」
怒号が周囲に響き渡った。

「・・・あ？」
その場の全員が、イヤな予感に顔を引きつらせながら、前方をうかがう。
パシッ、と何かが弾ける音が響いた。
そして、土煙が晴れた後に現れたのは・・・
「出来損ないの、腐れ赤火砲なんか撃ちやがって」
焼け爛(ただ)れた地面の上に、黒星が微動だにせずに立っていた。

その黒星の背後には、疾風が膝を突いていた。しかし、傷らしい傷はないようだ。
どうやらあの一瞬で、黒星が疾風の前に出たらしい。
「なんだあれは・・・結界か？」
突き出された黒星の右手を中心に、半径2メートルほどの光の壁が作られていた。
パシッ、と放電のような光が、壁の周りを覆っている。
光が、急速に右手に収束してゆく。

「結界じゃねえっ！」
日番谷が彼に似合わぬ、慌てた素振りで立ちあがった。
「お前ら逃げろっ！」
日番谷の叫びと、
「爆裂砲！！」
黒星の叫びが重なり・・・まるで爆弾でも落ちたかのような轟音が鳴り響いた。

「・・・そりゃあよ俺だって、いきなり暴発気味の赤火砲を撃ち込んださ。
でも、もともとアイツが撃ってみれば？って言ったんだぜ？逆切れすんなって感じだよな」
「だよなー、人間ができてねーよ。死神だけど」
「ブツブツ文句言ってる場合ではないぞ！」
恋次と一護の会話を、ルキアがバッサリと斬った。
間一髪抱きかかえた茜雫の体を、その場に横たえる。

「しかし、爆裂砲なんて技、初めて聞いた・・・ご存知でしたか？日番谷隊長」
「霊術院の授業で、大宇奈原（おおうなばら）って先生から聞いたことはある。
辺りに爆発を撒き散らすばっかりで、迷惑な技だから出来る限り使用するなって」
「敵に迷惑でない鬼道も無いかと思いますが、それにしても、これは・・・」
そこまで言って、ごほごほと咳き込んだ。
汗を掻いたところに頭から土煙を浴びたせいで、その顔は黒く汚れている。

「全くだ」
草冠が、日番谷に肩を貸し、瓦礫の上にヒラリと飛び降りた。
「あの黒星って奴、こういう爆発系が得意な破面か？ヤな敵だな」
日番谷の言葉に、草冠は頷く。
「さっきもこの辺一帯ふっ飛ばしてくれたからな。
霊圧を一箇所に集中させ、周囲を爆発させる能力。
歩く爆発物みたいなもんだ。厄介だな」
そう言って、恋次と一護を見渡す。くい、と顎で黒星を指した。
「なんだよそれ。俺らにどーにかしろって言ってるか？」
「俺はあの、疾風とかいうガキを抑える」

「お前が決めんな！」

「おい草冠、もう下がってろ。俺が出る！」
日番谷が立ち上がり、言い争う三人の間に割って入ろうとする。
その左肩に、草冠がすかさず刀の柄を押し付けた。
「☆※％＄@＊？」
「出番はまだ先だな」
意味不明の叫びを漏らしうずくまった日番谷を見て、草冠が断じた。

「おいてめーら！探すのが面倒くせえから、とっとと出て来い！
それともなんだ？吹っ飛んでなくなったか？」
黒星の勝手な言い分が聞こえてくる。
「爆発物処理班、さっさと行け！」
立ち上がった草冠が、一護と恋次を見下ろした。

「とにかく！あんなのを全部倒そうとか思うな」
日番谷が、若干涙目で全員を見渡した。
「当座の目的は、あの疾風とかいう子供の身柄を確保できればいい。
そしてあの子供は、おそらくそれほど防御力は強くない。
あの親子、バラバラに戦っていたくせに、あの赤火砲の時だけ黒星が疾風を庇った。
つまり、疾風一人ではあの攻撃を受けられなかった・・・という可能性が高い」
「そ、そうか・・・じゃあ」
「ああ」
草冠が、立ち上がった一護を見下ろした。
「さっきのと同じくらいの一撃を、疾風に食らわせればいいってことだな」

「オッ？出てきやがった」
瓦礫の向こうから姿を現した草冠を見て、黒星が漏らした。
すぐ隣に立つ疾風を見下ろす。
「多分あいつら、お前にあんまり防御力がないことは察したと思うぜ。
遠慮なく斬魂刀を使っていけ」
「けどよ、向こうは斬魂刀ももってねえ！」
「プライドがゆるさねーとか言う気か？そんな高尚な概念、お前に教えたっけ」
「・・・イラネーな、そんなモンは。とにかくあいつ等殺せばいいんだったな」
「・・・。ま、そーなるね。ただ、お前には時間がねえのを忘れんな」
「分かってる」
疾風が舌なめずりでもするように、チロリと紅い舌を見せる。
草冠の姿が、フッと見えなくなると同時に、疾風も瞬歩で姿を消す。

ガキン！！

次に二人が現れたのは、ほぼ中間となる空間だった。
「おぅ、速さは中々だな」
黒星が身を乗り出し・・・その動きを止めた。
右に一護、左に恋次が散り、黒星に向かって斬魂刀を構えていた。
「吼えろ、蛇尾丸！」
間髪いれず、恋次が斬魂刀を解放した。

## 【33】「撃ち砕け、CATLASS（カトラス）！」

ドォン、と轟音と共に、黒星のいた辺りが崩れ落ちるのを、疾風は目の端に捉えた。
「飛雷閃！」
その一瞬の虚を突き、間近に迫った草冠が、鬼道を放った。
その名のごとく、一瞬で空を駆ける稲妻のような光が、疾風を襲った。
「鎌鼬！」
考えるまもなく、とっさに鬼道を返す。
真空の刃を打ち出す技。稲妻の間を縫うように、草冠に襲い掛かった。
互いに、保身を考えぬ攻撃主体の技。
「ちっ！」
舌を打ったのは、同時。
疾風の右肩から焔が上がるのと、草冠のこめかみから血が噴出すのも同時だった。
刃を返した疾風と、上から打ち下ろした草冠の刃が真っ向からぶつかる。

「氷閃弾！」
「チッ！」
疾風は自分に向かって飛んできた、錐（キリ）のような氷の刃を次々と交わす。
「そのまま返すぜ・・・氷閃弾！」
交わしきれるはずの無い距離。その氷の刃は、容赦なく草冠を斬り刻む。
それでも・・・草冠は止まらなかった。
血のしぶきを撒き散らしながら突っ込んだ草冠の手のひらが、とん、

と疾風の胸を突く。
「こっちこそお返しだ。・・・爆裂弾！！」
「疾風っ！」
黒星の、いつにない鋭い一声が響き渡る。
直後、疾風を巻き込み、その場が爆発した。

「一気に決める！」
草冠が更に砂埃の中に突き入った。
相手が立ち直る前に勝負を決めないと、斬魂刀を持たない草冠には勝利は難しい。
――　こっちか！
その霊圧を頼りに、刀を振り上げる。
煙の向こうに、しゃがみこんでいるのか、小さな人影が見えた。
何か棒状のものが、その煙の向こうから突き出される。
少年の声が、周囲を貫いた。
「撃ち砕け、ＣＡＴＬＡＳＳ（カトラス）！」

――　なに？
草冠の目には、閃光が飛び込んできたかのようにしか、見えなかった。
それが攻撃だ、と気づいた時には、右半身をもぎ取られるような衝撃が、草冠を襲っていた。
「なっ、なんだ！？」
煙の中に向かっていった草冠が、それ以上のスピードで吹っ飛ばされるのを見て、恋次が目を剥く。

「なんだか分からねぇが・・・蛇尾丸！」
斬魂刀の先を煙に向ける。巨大な蛇が、煙の中に突き入ろうとし・・・
光が奔った、と思った瞬間、巨大な頭部が吹っ飛ばされた。

まるでとんでもなく速い砲弾を食らったかのように、粉々に。
「なに・・・」
矢継ぎ早に奔った閃光のひとつが、恋次の腹をまともに捉えた。
「恋次っ！！」
地面に叩きつけられ、動かなくなった恋次を見て、ルキアが悲鳴を上げる。
瓦礫の上を、血が奔るような勢いで流れ、広がってゆくのを見て、その場の全員が凍りつく。
「下がれ下がれ！近づくなっ！」
地面に倒れたままの草冠が、左手で右肩を押さえ、怒鳴りつけた。

「くっ・・・何なんだ、あの攻撃は！」
痛みを吐き出すように、草冠は息をついた。
上半身を何とか起こすが、体に力が入らない。
鬼道、ではない。
球型の霊圧を打ち出す点が赤火砲や蒼火墜と似ているが、威力と速さはその比ではない。
というよりも、どの鬼道も、あれには及ばないだろう。
――　と、すると。斬魂刀の力か・・・
草冠は激痛に顔をゆがめながらも、煙の向こうから少しずつ姿を見せた、疾風を見た。
だらん、と無造作に、刀を引っさげている。
カトラスと呼ばれた其れは、見た目は変わっていないように見えた。
少なくとも、刀身は。
「あの柄の形・・・」
斬魂刀を構えた一護が、目を凝らした。

「・・・。銃か！」
「アタリだ」
疾風は、無表情に一護を見やった。
さすがにさっきの爆裂砲は堪えたか、額からは血が流れている。

「・・・。銃刀か。斬魂刀じゃ、初めて見たぜ・・・」
解放することで、柄の部分を銃に変え、柄尻から弾丸・・・圧縮した霊圧を打ち出す。
――　硬ぇな。
一撃で蛇尾丸の頭部を砕く威力、スピード。
まともに食らえば死に直結するだろう。

「・・・あァ。お前もいたんだったな。飯、食わせてくれてありがとうよ」
疾風の酷薄な瞳が、日番谷に向けられた。
「礼に、せいぜい苦しまないように、一瞬で撃ち殺してやるよ」
その銃口が、まっすぐに日番谷に向けられた。
「冬獅郎ッ！ルキア、茜雫！逃げろ！」
一護の叫びと、ほぼ同時に、銃口が火を噴いた。

「ちっ！」
日番谷が背後のルキアと茜雫を見やり、とっさに二人の前に飛び出した。
「冬獅郎っ！！」
一護の叫びむなしく、続けざまに放たれた3発が、その場に炸裂した。

思わず駆け出した一護の足が、ピタリ、と止まる。
「お前・・・なにもそこまで・・・」

半ばうめくような声で、つぶやいた。

パタタッ、と血が地面に立て続けに落ちる。

「あぁ・・・そんなに、逸るなよ・・・」

その草冠の言葉は、口から漏れる傍から小さくなってゆく。

青い着物の、破れた部分から覗く背中は、血で赤黒く変色していた。

「草冠宗次郎、お前・・・」

その足元にうずくまっていたルキアが、ハッと口元に手を当てた。

草冠の体が力を失い、スローモーションのように地面に崩れ落ちた。

血をにじませた口元が、かすかに笑みを浮かべる。

「もう、お前の出番だから」

その体が地面に叩きつけられる直前、草冠よりは一回り以上小さな体が、草冠を受け止めた。

「やっと出てきやがったか」

ニヤリ、と疾風が笑う。

その視線の先で、日番谷は己の手の平に視線を落としていた。

零れた草冠の血で紅く染まった手が、固く、固く握り締められる。

「てめえ・・・赦さねえぞ」

その瞳に、危険な光がギラリと渡った。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

やっと、加筆修正前の展開に追いついた・・・！

ここからは、あまり日にちをあけないよう更新します。きっと。

## 【３４】「天鎖斬月！！」

「うわ、こっちに瓦礫が飛んでくるぞ！」
「ちくしょう、どうなってんだ！」
男や女、大人や子供が入り乱れて駆けて行く。

「あっ！」
蕎麦屋の軒先から、不安げな顔を覗かせていた瑠璃が、肩を押されてよろめいた。
そばを走り抜けた若い男が立ち止まり、瑠璃を助け起こす。
「悪ぃな、瑠璃！この街はもうダメだ。お前らも早く逃げろ！」
「う、うん・・・」
男の背中を見送った瑠璃は不安げに、街の中心部から上がった黒い煙を見上げた。

「・・・え？」
中心部から、街の外に向かって逃げていく人々の中、逆に進んでゆく二人組の横顔が見えた。
どちらも、大柄な大人の男だ。
一人は、女物の着物を羽織り、結わえた長髪に簪（かんざし）を挿した伊達男。
もう一人は、落ち着いた面立ちの、長い白髪を背に流した男。

「あぁ。逃げなくていいよ、君。そこまでは被害がこないようにするからさ」
伊達男のほうが、瑠璃を見てニッコリと笑って見せた。
言わずと知れた八番隊隊長、京楽春水である。
「戦いを収めることはできなかったらしいな。まぁ、逃げる時間があったのが救いか」

浮竹十四郎が、表情を翳(かげ)らせ、周囲を見渡した。
「しょうがないんじゃない？起きちゃったことは。
今の僕等に出来ることは、ここに結界を張って、これ以上被害を大きくしないことだ。
人命最優先だからね」
「あぁ！」
浮竹が頷く。
そして、二人同時に「力ある言葉」を唱えた。
詠唱が進むと同時に、周囲を乳白色のドームのようなものが包み込み始める。
「どうやら、阿散井君と一護君が押されているようだな」
「でも、二人とも鬼道は不得手だからね、代わってあげる訳にもいくまいよ。
それよりも僕らは・・・」
そこまで言うと、京楽は、急速に空に集りつつある雲を見上げた。
辺りが一気に暗くなる様は、明らかに自然現象を越えている。
「中の戦いによって、結界が切れないように保持するのが先決だ」

日番谷が一歩ずつ、歩むたびに。
ビシッ、と音を立て、地面に氷が奔った。
その霊圧に反応し、空に厚く雲が垂れ込めてゆく。

「冬獅郎！」
「黒崎」

日番谷は、走り寄ってきた一護が何か言う前に、倒れた恋次の前でピタリと足を止めた。
「ここから先は、一歩も入らせるな」
一護は、背後のルキア・茜雫・恋次・草冠と、手前の黒星、疾風を見比べた。
「・・・おぅ！」
力強くうなずくと、斬月を構えた。
気を失った恋次を、ルキアのところに運べるほど余裕をくれる相手ではない。
それなら、ここから後ろには一歩も行かせない、しかなかった。

「しかしアイツら、異常に強・・・おぃっ！！聞け！」
一護の語尾は断ち切られ、前のめりに手を伸ばす。
だが、その視線の先で、日番谷はすでに地を蹴っていた。

「まっすぐ突っ走ってくるとは、芸がねぇな」
確かに速いが、避けられないほどじゃない。
疾風はまっすぐに銃口を日番谷に向けた。
「馬鹿・・・！」
一護が叫んだ直後、日番谷に向かって霊圧の弾丸が放たれた。
しかし、その一瞬。
日番谷の姿が、ふっ、と消えたように見えた。

「な・・・！」
今までの速さはダミーか、と思ったときには、その姿が目前に迫る。
疾風がとっさに柄尻を返し、刀身を日番谷に向けようとした時だった。
日番谷は、ひょい、と疾風が前に出していた、右腿の上に左足で乗

った。
あっ、と疾風が思った時には、全体重を疾風の右腿にかけた日番谷が、ぶつからんばかりの勢いで迫っていた。
刹那に見えたのは、日番谷の握り締められた拳。

「思い知れ！」
日番谷の言葉を耳の端に捉えた、時には。
日番谷が思い切り振り上げた拳が、疾風の頬を捉えていた。
「ぐ・・・」
疾風の小柄な体が、宙を吹っ飛ぶ。
ドォン、と音を立て背後の瓦礫に激突した。

「！」
更に迫ろうとした日番谷が、身を返す。
「てめぇ！」
振り返った時には、黒星の拳が目前に迫っていた。
「ちっ！」
とっさに刀を引き抜き、振り向きざまに拳に叩きつける。
バチッ！！
互いに跳ね飛ばされたのは、一瞬。
小柄な分、余分に吹き飛ばされた日番谷が、距離を置いてクルリと飛び降りた。

――　なんだ、あの拳・・・人体の硬さじゃねえ！
「もう一発」
その拳が光芒に包まれるのを見て、日番谷が背後に跳び下がろうとする。
その背中が、ガン、と何かに突き当たった。
「日番谷隊長！結界です！」

「は？」
ルキアの声に振り返ると、背後に半透明の膜のようなものがうっすら見えた。
日番谷の背中は、そこに突き当たって止まっていた。
――　まずい・・・！こいつ、鬼道までいけるのかよ！
ニヤリ、と黒星が笑う。
「もらった！」
その拳が日番谷の胴を捉えようとした時だった。
「天鎖斬月！！」
鋭い一喝が、周囲に響き渡った。

「！」
日番谷は本能的に、フッと体の力を抜くと、地面に伏せた。
顔を上げた日番谷の真上を、巨大な刃が通り過ぎた。
その刃はアッサリ結界を断ち切り、黒星の胴に炸裂した。
「ぐぉ！」
さすがの黒星も受け切れなかったか、その体が背後に吹っ飛ぶ。
「大丈夫か、冬獅郎！」
スタッ、と一護が地面に飛び降り、黒星に油断なく、斬月の切っ先を向けた。
「大丈夫じゃねえ！伏せなきゃ一緒に斬られるところだったぞ！」
バッ、と体を起こして日番谷が怒鳴る。
「でもおめー、この技知ってるし。避けるだろ？ていうか、避けただろ」

「・・・てめーは俺から１００メートル以内に近づくな」
「よく言うぜ、助けてやったのに！」
「俺は疾風の相手で忙しいんだ、お前がアイツを抑えろ！」

「いい技持ってんじゃねーか、ガキ」
黒星の声が周囲に響き渡る。
バッ、と日番谷と一護が背中合わせに立ち、刃を向けた。
「次はこんな風にはいかねぇぜ」
プッ、と地面に血交じりの唾を吐き、疾風がゆっくりと歩み寄るのが見えた。
一護と黒星。
日番谷と疾風が、視線を合わせる。
次の瞬間、
四人の姿が同時に掻き消えた。

## 【35】「あばよ」

ガキン！！

日番谷と疾風の刀が交錯する。
火花を散らし、二人の体は、影のように住宅街の中に落ちた。

「あいつ、接近戦に持ち込むつもりか？まさか」
ルキアに助け起こされた草冠が、その姿を見やって思わず声を上げる。
「私は日番谷隊長の接近戦を、見たことが無いが……」
「俺だって霊術院の授業以外、見たことがないさ。
霊圧勝負なら冬獅郎が有利なのに、なんでわざわざ不利な戦いをする？」
相手も小柄とは言え、重量で劣る分、接近戦は日番谷には分が悪い。
敢えて持ち込む理由が分からなかった。

ダン！！

足音を立て、日番谷が路地に飛び降りた。
――　さすがに、住人も逃げてるか。
それに、気配を探れば、浮竹と京楽の気配を感じた。
このドームのように街を覆う霊圧は、二人が張った結界――　鏡門に違いない。
――　妥当な判断だな。
黒星は、「多数でかかれば何とかなる」という類の相手ではない。
一概に、隊長の実力は、卍解すれば一気に倍、鍛えれば十倍以上に跳ね上がる。
しかし黒星は、卍解どころか、まだ斬魂刀を出してもいないのだ。

隊長が寄ってたかって戦いに加わったところで、周囲に被害が広がるばかりだろう。

――　王属特務に助けでも求めるか・・・

そこまで考えて、日番谷は心中苦笑した。

藍染の反乱で激震している現状で、静観を決め込んでいるのだ。

「反逆した元隊長」が3人から5人になったところで、動いてくれるとはとても思えぬ。

日番谷は気配を殺し、同じように霊圧を絶った疾風を目で追った。

家々が入り組んだ路地は、大人二人がやっとすれ違えるほどに狭い。

日の光も差し込まないそこは、まるで迷路のように見えた。

――　ガキじゃあるまいし、隠れん坊はごめんだ。

玄関も開け放しの小さな家の障子は開け放たれたままで、玄関から覗き込むと、庭まで見えた。

キラッ、と障子の向こうで何かが光った。

「ん？」

太陽の光にしては、明るすぎるような……

「死ねっ！！」

それが、自分に向けられた「カトラス」の銃口だと気づくよりも早く。

それは日番谷のほうに、火を噴いていた。

爆音と共に、日番谷が潜んでいた玄関が吹っ飛ばされる。

「やったか？」

あの日番谷という少年のスピードは大したものだったが、この距離、この威力では交わせまい。

――　意外と、相手の気配を読む力は弱かったってことなのか？
疾風は、瓦礫の山に向かって一歩踏み出した。

――　いや、待て。
疾風は足を止めた。
そんな簡単にくたばってくれるような相手か――　？

「動くな」

感情を込めない、冷たい言葉を耳元に聞くと同時に、冷たい霊圧が疾風の総身を粟立たせた。
「お前の攻撃は、ムダが多すぎんだよ」
突きつけられたのは、障子の影に潜んだ日番谷の拳だった。
その腕に沿うように、腕ほどの長さの、何本もの氷の柱が現れる。
その切っ先は、矢尻のように研ぎ澄まされていた。

「ヤロ！」
疾風はとっさに銃口を日番谷に向けると、有無を言わさず発射した。
その動きは見越していたのか、日番谷は氷の刃を打ち出すことなく、その場から姿を消した。
そして、再び周囲が煙に覆われた次の瞬間、

シャッ！！

空気を裂く音とともに、気づいた時には氷の刃が疾風の眼前にまで迫っていた。
「ちっ！」
本能的に、疾風は右へと交わした。
「アノヤロウ、どこに……」
辺りを見回した疾風の頬に、血が一筋流れ落ちる。

煙が晴れ、周囲を見渡したときには、再び日番谷の姿は消えていた。

――　あいつ・・・

疾風は歯噛みした。

草冠を囮にしてまで、戦いを見守っていただけのことはある。

疾風の武器の弱点を、はっきり見抜かれている。

威力が大きすぎ、爆発を引き起こすため、視界を数秒失うこと。

それは、日番谷に数秒の準備時間を与えているようなものなのだ。

「……」

疾風は目を閉じ、その場に立った。

――　何だ？

気配を消した日番谷は、眉をひそめる。

ゴクリ、とどちらかが唾を飲み込んだ。

――　喰らえ！

日番谷が、更に氷の刃を撃った。

その刃の切っ先が、疾風の肩口に当たろうとしたその瞬間、

カッ、と疾風が目を見開いた。

それと同時に、その手が氷の柱の一つを、つかみ取る。

「……」

疾風の掌から血がはじけとんだ、と思った時、疾風の姿が掻き消えた。

――　やばい！

本能的に、日番谷は背後に飛び下がろうとした。

しかし、その体は中途半端に止まる。

瞬歩で現れた疾風が、日番谷の右腕をガシッと掴んでいた。

「速さと、力は俺が上だ！」

間近に迫った疾風がニヤリと笑う。
「この……馬鹿力野郎！」
腕を引こうとしても、ピクリともしない。
有無を言わさず、ぐい、と前に引きずられた。
「あばよ」
カトラスの銃口が、トン、と日番谷の胸の上を突く。
カトラスに、爆発的な霊圧が膨らんだ刹那。
「断空っ！！」
日番谷が叫んだ。

「うぉっ？」
今まさに発射されようとしたカトラスの霊圧が、突然霧散する。
しーん、と辺りが静まり返った。
「……」
二人は、とっさにリアクションを取れず、沈黙して互いの表情を見やった。
「放せ！」
いち早く立ち直った日番谷が、渾身の力を込めて疾風の胴を蹴り飛ばした。
さすがに効いたか、疾風が日番谷の腕を放すと、身を翻して背後の屋根の上に飛び降りた。

「てめー、なんだその技！」
疾風は血が流れる掌を払い、日番谷は手のあとがくっきりと浮かび上がった腕を押さえた。
「断空を知らねーのか？相手の九十番以下の鬼道を、無効化する技だ」
「俺の技が九十番より劣ったってことか？それを見抜くとはたいした奴だぜ」
知らない。

日番谷はとっさに正直に答えようとして、口をつぐんだ。
あの場面では効くか分からなくても、断空を撃つしかなかった、それだけの話だ。
ただ……鬼道と、斬魂刀の一撃で致命的に違うのは、その力に制限があるかどうか。
使い手の力によって変動する斬魂刀の威力を考えれば、次の一撃も断空で相殺できるかは分からない。

「てめーは、全力で殺すぜ」
「……こっちの台詞だ」
二人は刀を手に、にらみ合った。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4980e/

AFTER←RAIN ～BLEACH小説～

2010年10月12日16時15分発行